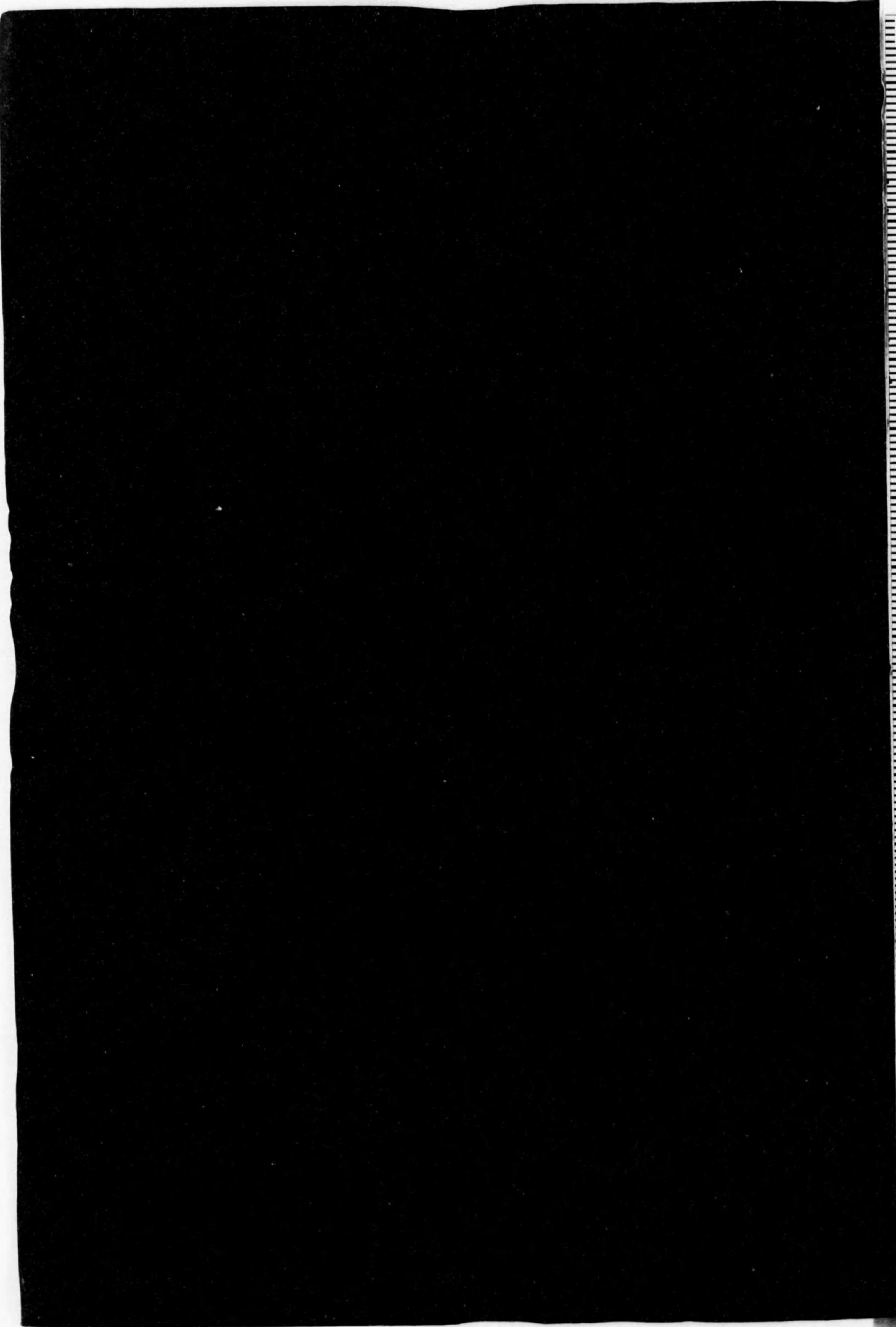


始





特 201  
606

世界傳奇叢書

面 假 鐵

作 イ ベ ゴ ア ボ  
譯 蘭 十 生 久

博 文 館 刊





鐵 假 面 目 次

第一部「白い寢臺」

一、發端。「鐵假面」の史實。並に、曰くあり氣な一組……………	二
ニ、イスナアール男爵。並に、勝味のない決闘……………	一六
三、「人でなし」の密偵長。並に、雪夜の重い荷物……………	三〇
四、「白い寢臺」の夢。並に、卅萬金法の取引……………	四四
五、林から洩れる話聲。並に、要塞の緑の洋燈……………	六二
六、渡されない覺書。並に、流れついた二人……………	七八
七、釣臺上の假面男。並に、要塞諸共の焚刑……………	九四
八、夫人の長い獨白。並に、「ラ・ヴォアザン」……………	一一二
九、河のほとりの密會。並に、陰慘な卅年の始り……………	一二六



第二部 死の牢獄

- 一、十六本目の檜の下。並に、汗を拭く鬮樓男……………一三八
- 二、若い富裕な未亡人。並に、殺さぬといふ誓……………一四八
- 三、サンマルスの晩餐。並に、ルーヴォアの戀……………一六〇
- 四、第 塔の窓の薄明。並に、闇の庭の待伏せ……………一七五
- 五、バスチーユの歴史。並に、爪二つの麻布袋……………一九一
- 六、空に揺れる黒い影。並に、思ひもかけぬ顔……………二〇四
- 七、死なせて生かす法。並に、手管にかける謀……………二一九
- 八、「黒頭巾」の強商談。並に、ナアロオの上機嫌……………二三五

第三部 悲哀の谷

- 一、囚人「白助」の嗟嘆。並に、袖に書く血文字……………二五四

- 二、洗濯女バルトロメ。並に、灰になつて手巾……………二六七
- 三、パルマ國の貴婦人。並に、盡きぬむかし語……………二七九
- 四、ボヘミヤの大力男。並に、アリ・ペーの離業……………二九九
- 五、軍務宰相の急死。並に、「香橙苑」の路易王……………三二二
- 六、サンスの谷の山莊。並に、腰に繫いだ大輿……………三四二
- 七、鐵假面の最後の日。並に、その夜の聖保羅寺……………三六〇
- 八、納骨洞から出た男。並に、逃げたもう一人……………三七九
- 九、スペイン繼承戦争。並に、悲奇史の大團圓……………三九二



第一部

白

い

寝

臺



一、發端。「鐵假面」の史實  
並に、曰くあり氣な一組

一六七二年、二月九日。白耳義、アラバン伯領アリユッセルの町端れ。霏々と降る春の雪は道を埋めつくし、人通りもいたつて稀である。

和蘭のアムステルダムからバリへ直通するフランドル街道のトバロ、双方から來た驛遞馬車がこゝで待ち合せ、客と郵便物を交換する。

いつもなら耳も痴れるやうな馭者の喇叭に、鋪石に轟かす轍の響き。馬が嘶き、客が喚き、宿引共が右往左往、犬が吠え、鶏が駆け出し、なんともたいへんな騒ぎが繰返されるのだが、二三日來の大雪でバツタリと交通が途絶え、昨日の正午に着くはずの驛馬車が、今日の夕方になつてもまだ到着しない。街道の閑靜にひきかへ、どの立場もどの旅籠屋も、馬車を待ち合わせる客でこつたかへしてゐた。

街道に沿つた「金の楯屋」といふ旅籠屋。水飼場と厩をもつた手廣い構へ。その居酒屋の奥まつた粗木の卓に、何やら案じ顔に頬杖をついてゐる廿七八の美しい騎士があつた。

この邊ではさらには見られないやうな都雅な顔たちで、葵花色の短胴衣にリネンの襟飾。廣口靴に

銀の拍車をつけ、短いマントオの裾から尾長鳥の尾のやうに劍の鐙をのぞかせてゐる。

田舎浪士とも見える極くありふれた風態だが、眉は一文字に濃く、眼は清しく、キリツとひき結ばれた口の上には凛々しい八字髭があつて、安葡萄酒に空景氣をつけ、埒もなく談論風發する壯士くづれなど、は段がちがひ、りんとした、あり餘るほどの氣品をそなへてゐた。

その傍に、まだやうやく廿歳ぐらゐかと思はれる、眼もとの美しい、繪に描いたやうな美少年が寄り添つてゐる。鍔廣帽子の縁から縮れた金髪をはみ出させ、天鷲絨の胴衣に組糸の飾のついた空色のマントオ。身装は男だが、ひと目で少女だといふことが知れる。二人ながら際立つて美しいせりもあり、なにやら曰くのありさうな一組で、なんとなく人眼をひいた。

男のはうは、先程から幾度となく伸び上つては街道の方を覗き、苛立たしげうに舌打ちしては、また卓の上に頬杖をつく。焦燥のさまは眼にあまるほどで、多分、何か至急の用件があつて、驛馬車の到着を一刻千秋の思ひで待つてゐるのだと察しられた。

ちやうど夕食の時刻なので、粗石造りの大きな煖爐の前で、亭主と内儀が忙しうに食事の仕度を立てゐる。廻轉串の上では丸焼きの野鴨がさかんな脂煙をあげ、スウプの大鍋はグツグツと音を立て、小童が食卓の間を駆けながら煮葡萄酒を注いで廻つてゐる。大勢の人いきれと話聲でムツと逆上せあがるくらゐ。



あたかも、佛國はネエデルランド攻略の失敗の報復に、コンデ大公とチュレンヌ元帥が大軍をひきゐて和蘭へ攻め入らうとしてゐるといふ風説あり、物情騒然たる際なので、従つて旅客はいづれも武張つた風態のものばかり。紋章を金糸で刺繍した陣羽織を着た親衛銃士。烏毛帽子の擲弾兵や胸甲をつけた龍騎兵。白絹の襟巻を鼻の下まで引き上げ、眞黒々の狹上衣、革の文書容を腰にさげたのは、言はずと知れた早飛脚。いづれも粗木の床几に目白押になつて、寒さ凌ぎの爛葡萄酒、聲高に戦争の取沙汰をしてゐるうちに、居酒屋の立飲臺に身を隠すやうにし、しんねりと盃を舐めながら、美しい男女の一組のはうをチラチラと窺つてゐる黒マントオの男があつた。

古びた三角帽に汚れた長靴下。陰氣な眼つきをし、死人のやうな極く顔色の悪い男。梁の高い鉤鼻の先が薄つぺらな唇の上まで垂れ下り、額は狭く、顴骨は飛び出し、なんとも嫌な顔。節くれ立つた自然木の太い杖を持ち、皮革の大きな巾着をさげてゐる。これに黒犬でも連れてゐたら、さながら地獄の獄卒。壯士とも見えず、といつて庶民の風態ではない。役場の書記か徴税吏とでもいつたところ。

先程から上眼づかひでジロジロと二人の方を眺めてゐるが、やがて、うつそりと床几から立上り、猫すり足で二人の方へ近づいて行き、さり氣ないやうす、マントオの裾から五徳のやうな恰好をしたものを床の上へずり落とすと、肩をゆすりながら街道の方へ出て行つた。

床の上へ落して行つたものは、歴史にも名高い「踵挫き」で、その中へ足を踏み込むと、彈機仕掛で三本の鋭い鐵の齒がガツチリと足首を挟んでしまふ陰險な道具。つまり、人良。…ほんのちよつとしたことだが、これが、陰慘たくひない「鐵假面秘史」の發端になつた。

そもそも、鐵假面とはどんなものだつたかといふと、それは假面といふよりは、むしろ、丸い鐵の塊のやうなもので、首から上をスッポリと蔽ひ包み、皮膚と假面が寸分の隙もなくピッタリと喰ひ合ふやうに作られてゐる。

左右の顚顚の邊に蝶番のやうになつた合せ目があり、その眞中に二つの鍵穴がある。眼のところには驗甲が垂れ下り、わづかに外界の光が見られるほどの細い透穴があげられてゐる。

口に當るところには小さな鐵の蔽蓋があり、必要があればいつでも閉ぢられるやうになつてゐる。蓋の裏には二本の長い針と二つの鉗子がついてゐて、それを閉ぢると、二本の針は口の中へ突き入つて舌を押へ、鉗子はやつとこのやうに上下から唇を挟んでしまふので、聲をたてることは愚か呻くことさへ出来ない。

ある不詳の一人物が、一六七二年から一七三〇年に至る約卅年の間、この冷濕慘忍な鐵の假面をかぶされたまゝで幽閉されてゐた。歴史始まつて以來、これほど陰慘な生涯に置かれたものはまだ嘗つて一人もなかつたらう。いつたい、どのやうな罪、どのやうな事情によつて一人の人間を生きたまゝ



鐵假面の下に葬り去り、而も、卅年もの長い間生存させて置かなければならなかつたか？

佛蘭西の歴史は、それについては一切口を噤んで語らない。目的、理由は勿論、それがどのやうな身分、どのやうな經歷の人物であつたか。それもすべて不明のまま永遠の中へ葬られてしまつた。ただ、バスチーユ監獄の公務日誌によつて、その人物が「鐵假面をつけた男」といふ通稱で呼ばれ、一七〇三年十一月十九日に、バスチーユのベルト・オウジェール塔の第二號監房で病死し、翌廿日、聖ポール教區墓地に埋葬されたといふ事實と、墓地帳に「名は、マーチエリ。年齢は四十五歳位」と記入されてゐることを知るばかりである。

「鐵假面」に對する史家や考證家の追究ほど目覺ましいものはなかつた。従つて、これについて幾多の説が行はれた。

「鐵假面をつけた男」は、實は、ルイ十四世の母のアンヌ・ドオトリツシユが前大宰相マザランと通じて生んだ庶弟だとする説（ヴォルテール）。ルイ十四世の双生の兄弟だとする説（ミシュレル）。ルイ十四世の財政宰相ニコラス・フウケエだとする説（フジエ）。いづれも、さまざまな史的根據から推測を加へてこの秘密を解決しようと努力したが、いづれも成功するに至らなかつた。

最も眞實に磅礫するとされてゐるのは、チャールス四世の公使マッティオリ侯爵がそれだといふ説で、ルイ十四世の言行録「書簡及び覺書」を書いたフランソア・シヨアジイ僧正も、その中で「鐵假

面は、ヴェネチア領に於ける叛逆行爲のためルイ十四世の命によつて捕へられたるマッティオリといふ男」と記してゐる。言ふまでもなく、これは墓地帳の「マーチエリ」に附會したものに相違ないが、本物のマッティオリ侯爵は、それより九年前、一六九四年の五月に、地中海の一孤島、聖マルグリート島の監獄で死亡してゐる。

ところで、諸家の浪漫的な考證追及にかゝはらず、事實はそのやうな花々しいものではなかつた。飽迄も質朴で、且つ救ひ難いほど陰慘である。「鐵假面をつけた男」こそは、章を追つて述べるやうな、數奇慘苦な運命に翻弄された悲運の人、バスチーユに送られる以前に幽閉されてゐた、アルプスに近い舊伊太利亞領チユランの山間の要塞監獄、ピニユロールで、伊太利風に訛つて「マーチエリ」と呼ばれてゐた國事犯終身囚、マルセル・アルモアーズといふ人だつた。

一六七二年といへば、ちやうどルイ十四世が全歐洲に覇をとなへかけてゐた頃で、歐洲第一の強力な軍隊を驅使してしきりに近隣を侵し、内には諸侯貴族の勢力を削減するため、「玉璽狀」といふ白紙の逮捕狀を濫發して無辜の人々を投獄處刑し、また、多數の新教徒を虐殺迫害したので、ルイ十四世に對する怨嗟の聲は四方に起り、苛迫された貴族諸侯は王族や外國の勢力と結びつき、ひそかに王位轉覆を策すといふ甚だ險惡な時代だつた。

なかにも、このブリュッセル市は巴里街道の捷路に當り、英吉利街道、フランドル街道、普魯西の



デッセンドルフ街道を経て来る驛馬車は、すべてこゝで繼ぎ立てられるので、佛蘭西へ出入する足溜りとしては偏強、外國の加擔者と連絡をとるためにも打つてつけの土地柄だったので、反路易黨の志士が多數この町へ入り込み、互ひに往來して頻りに策動をつゞけてゐた。

當時、ルイ十四世の權力の行使者は、慘忍酷薄のゆゑに、今も歴史に名をとどめる軍務宰相フランソア・ド・ルーヴォア侯で、財政を除くあらゆる樞機を握り、辛辣精緻な秘密警察を組織して、些かでも叛逆の意志をいだくものがあると、あらゆる陰險な方法を以て苛責なくそれを抹殺する。ひとたびルーヴォア侯に睨まれたら、皇族近親といへどもその追究からまぬかれることは難しい。バスチーユ監獄の地下牢、さもなければ、山間僻陬、地中海に浮ぶ名もない孤島の監獄に幽閉され、最後の日まで陽の目を見ずに終らねばならない。

さういふわけだから、ルーヴォア侯がこの危険な陰謀の策源地を見遁して置かう筈がなく、敏腕な密偵と暗殺團をこゝへ入り込ませ、主だつたものは逮捕して巴里へ押送し、さもないものは故意に争論をしかけ、決闘に名をよせて簡單に葬つてしまふ。反路易黨の志士は、假借ない暗殺團の鋒銳にかり、王位轉覆の雄志も空しく、日に二三人づゝも、恨をのんで異國の土と化してしまふといふ有様だつた。

さて、短い冬の日は、はやとつぷりと暮れ、既に七時にも間近くなつたが、まだ驛馬車は到着しな

い。上品な騎士は袂へかねたものか、ツイと床几を離れて亭主の傍へ行き、

「かう尋ねられても返事に困るだらうが、果して今日中に驛馬車が着く見込みがあるだらうか。さうでないなら、かうして待つても仕様のないことだが……」

餘りに氣遣はしさうなやうすなので、亭主も氣毒に思つたものか、

「先程も申しましたやうに、晝頃にはボームの峠を越えましたさうで、幸ひ雪も小降りになりましたから、もう追つつけ着くことゝ思ひますが、何しろ、かう遅くなつてはすぐ繼ぎ立てるといふわけにはまゐりません。どつちみち、出發は明日の朝といふことになりませう。だいぶお急ぎのやうですが、なんとも、お氣毒なこつて……」

と、慰め顔に言ふと、騎士は頭を振つて、

「いや、われわれは馬車で發つのではない。實は新聞を待つてゐるのだ。今日中に到着するといふのなら仔細はない。夜の夜中までゝも待つてゐるから、驛馬車が着いたら「和蘭新聞」を眞つ先に私のところへ持つて来て貰ひたい。人にとられると、仲々こつちへ廻つて來ないから」

「はいはい、長まりました。そんなことならお安い御用。きつと第一番にそちらへお届けいたします」

「どうかよろしくたのむ。忘れぬやうに」



と、幾度も念を押して床几へ戻る。

先に述べたやうな恟々たる折柄だから、一刻も早く新聞を読みたいのは誰しも同じ心。青年騎士のこの異様な熱心も、格別傍目を惹かなかつたが、もし、その真相を洞察することが出来たとしたら、何人も恐悚の念を禁じ得なかつたであらう。だがしかし、「和蘭新聞」の第三段に掲載された何気ない一文字が、全歐洲の形勢を一變するに足る驚天動地の大政變の口火にならうとしてゐることは、もとより知る人もなかつた。

この氣品ある青年騎士は、もと、北佛蘭西モーゼルに廣大な莊園と城館を持つてゐたモオリス・マルセル・ダルモアーズといふ伯爵だつた。

ロオレンヌ州の名家ダルモアーズ家の當主として潤達な生活を送つてゐたが、新教徒だといふ理由で、フランス王以來の領地と榮爵を褫奪され、今は一介のアルモアーズになつてしまつた。新教徒の反路易黨を指導する信仰の篤い勇敢な志士で、男裝の美少女の方は、テレエズ・ヴァンダムといつて、アルモアーズのたゞひとりの従妹である。

ダルモアーズ家は、代々熱心な新教徒で、祖父は、佛蘭西王安リ四世の叔父のコンデ公と共に、ジャルナックの宗教戦争で舊教派を破つて大功を立てた人だつた。

ルイ十四世は、親政すると間もなく、加特力教徒の意をむかへるため、舊教を勵行して新教徒を

度に壓迫し、逮捕状をふりかざして新教徒を投獄處刑し、殊に、ナントでは約二萬の教徒を屠殺するやうな暴虐を行つた。

アルモアーズは新教徒の一方の頭領と目されてゐたので、ルーヴオアの追及が激しく、生命の安全さへ覺束ないやうになつたので、下僕のジャン・コフスキーと土其古人の馬丁アリ・ペーを伴ひ、郷里を出奔して巴里に潜入すると、キツペンバッハといふ名で教徒の同志を糾合し、頻りに王位轉覆を策してゐるうち、墺國皇帝レオポルド二世の甥のフォン・ライズラア伯爵を知り、この後援で大胆果敢な行動を起すことゝなつた。

ルイ十四世は、三月の末頃になると、ヴェルサイユ宮から聖ゼルマン・アン・レエの離宮へ御成りになるのが例になつてゐるので、白耳義に亡命してゐる新教徒反路易黨の中から決死黨をつくり、アルモアーズが隊長になつて、途中のマルレエ・ル・ロア村の入口で御成りを待ち受け、ルイ王を擒囚にして白耳義の國境まで引き上げると、それを機會にライズラア伯爵が英吉利と和蘭の外援隊に進發の命令を發する。

内には、ノルマンディを始め、その他の要塞が一齊に背反し、廿萬の新教徒を合して巴里へ攻め上り、南北から正規軍を挾撃して巴里を陥し入れ、新教徒のコンデ大公の執政によつて王弟オルレアン公ルイ・フィリップを國王に擁立する手筈。和蘭の外援隊の戦備が整ふと、「和蘭新聞」の第三段に



Roma (羅馬)といふ一文字をそれとなく組入れ、決死黨先鋒隊の行動開始を促す合圖とすることになつてゐた。

史實によれば、この陰謀の加盟書には、チュレンヌ元帥を始めとして、ルイ十四世の前の側室、前大宰相マザランの姪のオランブ・マンチーニ嬢(ソアツソン伯爵夫人)、奥國皇帝レオポルド二世、英吉利の陸軍元帥マルブウル・ユウジエンヌ大公といふやうな王族近親までが署名してゐたことになつてゐる。もし、これが成功すると歐洲の地圖を塗り換へなければならぬほどの大陰謀。アルモアーズ

ほどの沈着な丈夫も、いさゝか苛立たし氣に見えるのも無理のないことだつた。

それから約一時間ほどの後、街道の遙か向ふに、早駆けする馬の蹄の音と、轟くやうな轍の響が聞えはじめ、馭者の喇叭の長吹きに、居酒屋の一同は、やうやくしこりをおとし、

「馬車が来た、馬車が来た」

と叫び合つてゐるうちに、和蘭アムステルダム發の驛遞馬車は、屋根に小高く雪を積んで、ガラガラと内庭の中へ走り込む。

出迎へて抱き合ふもの、寒さに凍えながら居酒屋へ駆け込むもの、ごつたかへす混雜のうちに、亭主は馬車に近づいて、驛遞の郵便物を選び分けはじめ。

アルモアーズは、燃えるやうな眼付で、そのやうすを窓越しに眺めてゐたが、突然テレエズのはう

へ振向くと、さすがに感動をおさへ切れぬやうすで、

「さア、いよいよ時が来た。あの新聞に約束の文字があつたら、今すぐ行動を開始して待ち合せの場所まで行つてゐなくてはならない」

押しつけるやうな聲でかう言ふと、熱心にテレエズの手をとり、

「最後に、もう一度たづねるが、あなたはどうしても私についてくるつもりなのですか。われわれから離れて、ひとりでモーゼルへ歸つてくれることは出来ないのかい」

と言ふ。テレエズはきつぱりとした顔つきで、アルモアーズの面をふり仰ぐやうにしながら、

「それは、もう幾度も言ひましてよ、マルセル。……最後の時まであなたと一緒に行くんだつて」

アルモアーズは愛しさうにテレエズの顔を眺めながら、

「ほんたうにあなたは不思議なひとだ。……私が危いところを切り抜けて、コフスキーやアリと一緒にモーゼルを逃げ出すと、あなたは私のあとを追つて巴里までやつて来てくれた。……あの日から今日まで、金も爵位もない、一介の亡命者でしかない私のために、あなたはなんといふ心づかひをしてくれたことだつたらう。……あなたは、婚約者のカスタニャリイ侯爵と結婚して、どんなにも幸福になれる筈のひとだつたのに……」

と、嘆くやうに言ふ。



マルセルとテレエズはよく似た生立ちで、どちらも早くから両親を失ひ、また兄弟といふものもなかつたから、二人は子供のときから極く愛し合つて、従兄妹同志といふよりは、むしろ同じ腹から出た兄妹のやうに親しみ、しばらくの間も離れるといふことがなく暮して来た。

マルセルは心の深い淳真なたちで、すこし一向すぎると思はれるほど一本氣なところがあり、どんな小さなことにもありつたけの熱情を傾けつくすといふ風だつたが、テレエズの方は、たいへん落ち着いた控へ目な性質で、たいていのことは自分ひとりの胸にをさめ、思つてゐることや考へてゐることを滅多に口には出さない。辛いことも悲しいことも微笑するだけですましてしまふといつた忍従の心が深いので、マルセルは戯れに、「テレエズ尼」と呼んでゐたところだつた。

しかし、陰氣だとか濕つぽいとかいふのではなく、随分快活な氣性で、はしやぎもすればよく歌ひもする。滅多に自分の意志をあらはさないかはり、一旦かうと決心すると、驚くやうな思ひ切つたことをやつてのける。

マルセルがルーゾア侯の暗殺團の辛辣な追跡を切り抜け、やうやくモーゼルの城館から脱出して巴里へ落ちのびると、テレエズはすぐその翌日、召使どもに行く先も告げず、夜中にそつと自分の城館をぬけ出し、馬に乗つて、たつた一人ではるばる巴里までマルセルのあとを追つて来た。

一方に、こんな氣性も持つてゐることを知らないわけではなかつたが、マルセルは驚いて、言葉を

盡してモーゼルへ歸るやうにすゝめたが、何と言つても歸らうとしない。マルセルや陰謀黨の同志と一緒になつて危険極まる密書の使ひを引き受けてさまざまに奔走し、いよいよ決死黨が組織されることになると、進んでそれに加盟してしまつた。

ルイ十四世の御成りの途中を擁してこれを奪ふなどといふことは、極めて困難な、また非常に危険な仕事なのだから、マルセルは勿論、下僕のコフスキー、馬丁のアリ、ほかの黨士たちもいろいろに遮り止めたが、頑固に首を振つて、どうしても忠告に従はうとしないのだつた。

テレエズは額に垂れかゝる美しい金髪を指で拂ひのけ、

『親族といふものは、辛い時や悲しい時に助け合ふためにあるものなのですよ。……あなたが、理由のないあんな不當な目に逢はなかつたら、あたしは勿論カスターニヤリイ侯爵と結婚してゐたでせう。』

……でも、あなたがあんなことになつたのでどうしても放つて置けなくなりましたの。小さな時からいつも助け合つて暮して来たのですからね』

マルセルの手の上に自分の手をかざねて、

『……ほら、知つてゐるでせう。……子供の時、あたしはいつもあなたの側にくつついてゐて、あなたがあたしの側から離れてどこかへ立つて行くのを何より嫌がつたことを。……それと同じ氣持なのですよ。最後の時まで、あなたから離れたくないと思つてゐるだけのことなのです』



さう言つて、なんとも仄かな眼差でマルセルの眼を見かへした。これは、たぶん何か深い心のあることだつたらう。が、マルセルはそれを察しなかつた。

二、イスナアール男爵  
並に、勝味のない決闘

亭主が居酒屋の入口へ入りかけた時、後からそれを押しのけるやうにして、魁偉な面魂をした一人の騎士が入つて来た。

赧ら顔の、見上げるやうな巨きな漢で、頬に密々と赤髯を生やし、四尺もあらうかと思はれるやうな大剣を負革で肩から吊してゐる。

入口に立ちはだかつて、居酒屋の中をジロジロと見廻してゐたが、ツイと擦り抜けようとする亭主の手の新聞に眼をとめると、

『お、和蘭新聞か、こつちへよこせ』

と、會釋もなく、手を伸して引つたり、大跨で煖爐の方へ歩いて行つて床几に腰をおろすと、マントオの雪を拂ひながら悠々と新聞をくりひろげ始める。

續いて入つて来たのは、つい一時間ほど前、意味あり氣な素振りをして出て行つた死人のやうな蒼

い顔をした男。二人の方を尻眼にかけながら赤髯の騎士の方へ近づいて行き、無言のまゝでその側へ押し並び、引き合ふやうにして「和蘭新聞」を読み出した。

アルモアーズは呆氣にとられてテレエズと顔を見合せてゐたが、何にせよ事情の切迫してゐること、何時までも新聞のあくのを便々と待つてゐるわけにはゆかないから、丁寧にしたのみ込んで借り受けるほかはないと思ひ、テレエズと眼で領き合ふと、床几を立つて靜かに赤髯の騎士の側へ行き、懇懇に一禮して、

『あの、もし、たいへんに唐突ですが』

と聲をかけたが、新聞に読み耽つてゐるのか顔も上げない。アルモアーズは、また一步踏み出して、聲を大きくし、

『實は、その新聞は、私がわざわざ郵便で取寄せたものなのですから、どうか、私に……』

と、物柔かに言ふと、騎士はのつそりと顔をあげ、アルモアーズの頭から爪先まで横柄に二三度見上げ見下し、何の答もなく、足を踏みひらいてまた新聞に眼を移す。そのやうすがあまりにも無禮なのでアルモアーズも立腹したが、胸をおさへ、

『諄くどしく申し上げて恐縮ですが、ほんの一時お貸し下されば、すぐお返ししますから、どうぞちよつとの間だけお見せ下さい』



一層鄭重に頼み込んで見たが、武士は依然として無言、耳のない人のやうに素知らぬ顔。連れの瘠せた男は、上眼でデロリとアルモアーズの顔を見上げてから、連れの武士に、

「おいおい、この方が、それは俺の新聞だから返せと言つてゐられるぜ」

と、馬鹿にしきつた調子で言ふと、赤髯の騎士は肩を揺つて、

「そんなことを俺が知るか。誰の新聞だらうと、読みたければ奪つて読むのが俺の癖だ」

と、飽迄も無禮に構へる。連れの黒マントオは陰気な含み笑ひをして、

「まア、さういつたやうなものだ。どつちみち、自分が愚鈍だから人に新聞を奪られるやうになる。何もつべこべ言ふにア當らないのサ」

と、聞えよがしに呟く。聞き捨てならない言葉だが、争ふほどの相手でもないから、聞き流して、

また騎士に向ひ、

「お読みになつてゐるのを、寄越せと言ふのはなるほど無調法。では、お読み済みになりましたら、

どうか、お渡しを」

と、下手に出ると、赤髯は肩越しにギョロリと睨み上げ、眼を瞋らせて、

「誦い……何イ、読んでしまつたらどうだ。……讀んだ後のことなどがわかるものか。文字を讀むのはあまり得手の方ぢやないが、讀み始めたなら終ひまでとつくりと讀みをさめなければ氣の済まな

い性だ。こゝで讀み終へなければ、宿へ持つて歸つて讀み直すのだから、貴様などには渡されぬ」

「いかに横着な言ひ方だから、アルモアーズも怵へかねて、思はず眼差を鋭くし、

「先程からことをわけてお願ひしてゐるにも關らず、あなたの仰言りやうはあまりにも無禮。さういふことなら私にも覺悟がありますから、新聞をお渡し下さるか下さらんか、はつきりご返事願ひま

す」

と、きつぱりと言ひ放すと、虎髯は肩を揺つて笑ひ出し、連れの肩を叩いて、

「こんな田舎に新聞を讀みたいなどといふ生意氣の奴がある。それもいゝが、渡さねば覺悟があると

はなんとも大笑ひをさせるぢやないか」

と、言ひながらゆつくりと新聞を疊んで衣囊へ納めると、ガイとアルモアーズの方へ向き直り、

「おい、青二歳。新聞は、かうして俺の衣囊へ納めたから、俺を殺す他に取り返す法はない。どうでも腕づくで取つてみるか」

と、空嘯く。

アルモアーズの生れたローレンヌ州は、普魯西と國境を接することから、むかしより尙武の氣風の盛なところで、既に述べた通り、祖父は一五九二年の宗教戦争で、ジャルナック大捷の動機を作つたほどの名劍客。代々武道を重んずる家柄だつたので、アルモアーズも幼少の頃から武術を好み、熱心



に技を練磨し、「ローレンヌの騎士」と言はれるほどの名剣士になつた。

勇氣と果斷を愛し、死よりも名譽を重んずる廉直な北部の氣質を受け継ぎ、まだ血氣で、神のほか  
に物を恐れるといふことを知らないのだから、かういふ恥辱を受けながらおめおめと引き退るわけに  
はゆかぬ。大望を持つ身だが騎士の體面には替へられない。もう後に退けぬ場合だから、命を賭すま  
でもと覺悟をきめ、片頬に笑みを含んで、

「あなたの言はれることは如何にも尤も。どうしても渡さぬと言ふのなら、私も武士、刃にかけて取る  
他はないでせう」

と言つて二三歩ひき退り、スラリと劍を引き抜いた。

赤髯の武士は、この馬鹿がといふ風に、哀れむやうにアルモアーズの顔を眺めてゐたが、伸びあが  
るやうに床几から立ち上ると、ゆつくりと上衣を脱ぎ、手袋をはづし、縁廣の帽子をとり、躓いては  
ならぬといふ用心か、靴の拍車まで取り外す。如何にも落着き拂つた態度で、幾戦場を斬り抜けて來  
た古強者と察しられた。

居酒屋の一同は一齊に席を立つて、水の引くやうに四方の壁際に引き退り、どう成りゆくかと固唾  
をのんで見成つてゐるうち、たゞひとり、黒マントオの蒼褪めた男だけは、壁際の卓の上に攀ち登  
り、

「これは愉快々々」

と、燥がしく叫び立てながら、手を拍ち足を踏み鳴らし、狂したやうに躍り廻る。何とも異様な有  
様だつた。

赤髯の騎士は、四尺に餘る大劍を事もな氣に抜き放すと、劍先を靴の先に當てて二度三度検めたの  
ち、右足を引いて悠然と身構をし、

「さア、青二才、どつからでもやつて來い。ひとつ、刀を持ったまゝこゝで踵ををどらせてやらう。  
……つい昨日、ファイヒンガアの一の弟子だといふ男の心臓を突つ通したばかりで、またその血も磨  
ぎ落してはゐない。貴様のやうなへろへろ劍士の血で上塗りするのはゾツとしないが、これも行きが  
かりで仕様がなない。……見かけるところ、百姓染みた面をしてゐるから、多分、噂にも聞いたことが  
なからうが、この劍はナ「長炎劍」といつて、劍を持つほどのものならさう聞いただけで慄へ上る  
恐しい劍なのだ」

と言ひながら、竿のやうな大劍の鋒銚を、アルモアーズの眉間の方へソロソロと差し伸す。と、居  
合す一同の口から、期せずして、おうツ、といふ恐悚の叫び聲が洩れた。

「長炎劍」といふのは、シャルル大王の炎刃の大劍に擬らへ、フランドルの名劍工フライドラアが  
鍛つた名高い名劍で、それを帯びてゐるとなれば、その主はどのやうな人物か言はずと知れてゐる。



もと、ガスコーニュの慄騎兵隊長で、「五段佯撃法」といふ慄悍極まる劍法を編み出し、サクセンの國室劍道師範ファイヒンガア、親衛銃士隊長シニウルク・タルタニヤンと共に歐洲の三劍士と言はれるほどの大劍客。その名を知らぬものなきジュウル・イスナール男爵。

卅年戦争の時、三千人のプアルツの陣營へ單身斬り込んだほどの剛毅果敢な勇士だったが、賭博と放蕩で身を持ち崩し、何か破廉恥な行ひがあつたとかで聯隊を逐はれ、その後杳として消息が知れなかつた。

イスナール男爵の「五段佯撃法」といふのは如何にも不思議な劍法で、如何なる場合にもこちらからは攻勢に出ない。いはゆる「騙し手」で、鋭く打ち込むと見えるがその實、動くのは僅かに手先ばかり。最初の構へのまゝ水のやうに靜かな姿勢を保つて、最初にして最後の、必殺の一撃を與へる折を待つてゐる。

凡そ劍をとるほどの人間には、一種の憧憬的人物。このやうな町端れの旅籠屋で親しくその秘術を目睹出来るといふのは騎士たるものゝ冥加、後の語り草に、その至妙の技を眼の中に灼きつけて置かうと、居合す一同は、宛ら酔つたやうになつて控へてゐる。

それにつけても、氣の毒なのは相手の青年騎士。面差は凛々しいが、身體つきはいかにも華奢で、骨組もあまり頑固とは見えない。のみならず、その劍は身も細く、長炎劍よりは確かに七寸も短

い。イスナール男爵の方は戰場へでも臨むやうな堅固な革の胸甲をつけてゐるのに、こちらは天鵞絨の短胴衣。また、背丈も二寸ほど男爵より低い。

どう最眞眼に見ても、これでは最初から勝負にはならない。極く巧くいつて七分三分の兼合ひ。それさへも殆んど覺束ない。イスナール男爵の大劍の鋒鈍にかゝつて果敢なくなつてしまふことは、誰の眼にも明かだつた。

必ず殺されてしまふ勝負とわかつてゐれば、勇壯なところなどは少しもない。たゞ氣の毒な氣持がするばかり。まして、年若い女連れがあることは皆も知つてゐるから、如何にも憐れに思はれる。テレエズのそばに立つてゐた白髪の銃士隊長は、さすがに惻隱の情を催したと見え、嘆息をして、

「あゝ、氣の毒なものだ。あの様子では譯もなく殺られてしまふ。十に一の勝味もない。どうやら仕組んだ喧嘩だと分りきつてゐるのに、やはり、我慢が出来なかつたものと見える」と呟いて、テレエズの方へ振り返り、

「……イスナール男爵といへば、以前は氣骨のある立派な騎士だつたが、貧すれば鈍するで、今ぢやルーヴォアの暗殺團の手先に使はれてゐる犬のやうな下劣な奴。どういふ事情があるか知らないが、無理に仕掛けて殺してしまふつもりらしい。かうなつたからは、何を言つても後の祭だが、あな



と、慰めるやうにいふ。

テレエズはちよつと眼を動かして目禮したばかり。もう生きたやうな顔色はしてゐなかつた。

これがイスナアル男爵だとはアルモアーズは知らなかつた。しかし、さうとなれば、これは容易ならぬ場合。防げるだけ防いで身を完うしなければならぬ。何とかして最初のひと突きを入れ、相手の氣勢を挫かうと、必死のうちにも、さすがに迫らぬ餘裕を見せ、眼に見えぬほど膝を折り腰を落とし、拳を低く下げて男爵の咽喉元のあたりに狙ひをつける。

イスナアル男爵は身を反らして充分に頭を後へひき、アルモアーズの長手突の構へも氣付かぬやうに、立つたまゝそこで居睡つてでもゐるやうに、ぼんやりと劍を差し伸してゐる。かうして向き合つてゐると、何とも底知れぬ殺氣に身體を貫かれるやうな氣がして、思はずゾツと總毛立つ。噂にたがはず、なるほど至極なものだと思ふにつけ、追々心が苛立つて來て、誘はれると知りながら、

「えッッ」

と、下手から「長手の突」を突出し、引く間もなく、咽喉元をのぞんでその手を突返したが、男爵は拂ひものけず身も退かない。自分の劍の最強部でアルモアーズの劍の最弱部を軽くあしらひながら悠然と立つてゐる。飽迄も冷靜に構へて相手を焦らせ疲らせようといふ戦法。

アルモアーズにもそれが察しられないことはないが、いづれにしても長く闘つてはこちらの不利。

今のうちにひと突きにとむさんに突き入れる。さすがに「コロレンヌの劍士」と言はれたゞけのことであつて、眼にとまらないやうな早業。アルモアーズの劍はビシビシとすさまじい音を立て、空に鳴り響き、繩のやうに相手の劍に絡みついてゆく、目覚ましいばかりの有様だつた。

男爵は恐れるやうな風もなく、劍尖をアルモアーズの眉間に突きつけたまゝ片頬を歪め、

「ほうう、まるで鍛冶屋が釘でも伸すやうに打つて來る。おい奴、俺の劍を鐵床と間違へては困るぜ」

と、せうら笑ふ面憎さ。アルモアーズは、

「これでもー」

と、軽く打返して置いて、平手突の鴨手で拳も透れと突つ込んだ。見事きまつて、スツボリと脇腹を貫いたと思つたが、劍がすこしばかり短かゝつたばかりに、殘念ながら僅かに劍尖が向ふの胸甲を擦つたばかり。

男爵は頭を反らしてマジマジとアルモアーズの顔を眺めながら、またしても、ふふ、とせうら笑ひ、

「どうやら劍脈だけは出來てゐるが、所詮、師匠に習つた劍術、生命がけの戦場で叩き上げた劍ではない。そんなことではどうして、どうして……いくらじたばたしてもいけまい。それそれ、



この寒空に、貴様の額から湯気が立つてゐる。つがもない』

もうこの邊で切上げようとでもいふ風に、アルモアーズの眉間につきつけてゐた劍尖を微妙に戦かせながらジリジリと心臓の方へ下げてゆく。何の氣合も込めず、たゞゆるゆると劍をゆるがせるだけのことだが、どういふ至妙な技によるのか、劍尖からすさまじい迫力が白氣のやうに迸り出て、側とアルモアーズの心氣に迫る。まるで呪縛にでもかゝつたやうに、仕掛けることは愚か、身動きをすることも出来ない。

アルモアーズの顔は、すつかり鉛色になつて、額から油汗を滴らしながら、ハツハツと肩で大息をつく。今はもう、たゞ劍を構へて立つてゐるといふばかり。

世の中に決闘の数も多いが、このやうに陰惨なものも少からう。男爵の方は、相手を仕止めるのは僅か一擧の動き。こちらはたゞその時の來るのをジツと待つてゐる。決闘といふより、これは死刑といふのに近い。

折角「五段伴撃」の妙技を見ようと待ち受けてゐた一同も、これにはいさゝか拍子抜のてい。飽氣ないこともさうだが、なんとも餘りの悲惨さに、まともに眼をあげて見ようとするものもない。口々に、憐れなものだと呟くばかり。

男爵はアルモアーズの心臓の眞上に鋒鋦を据ゑ、追々に白くなつてゆく相手の顔を見据ゑながら、

憎々しい口調で、

「おい、青二才。先程、何か偉さうなことを言つたナ。俺も武士だから刀にかけて取り返して見せる。……だが、この工合ではそれも覺束なからうから、あの世への土産に俺が知つてゐただけのことを

きかせてやらう。……ええ？ あれほど氣を揉んでゐたのは、一體どの記事を読みたかつたのだ。……

「和蘭新聞」の第一段にはナ、ルイ十四世が近くロンシャンで觀兵式をしようと書いてある。……ほ

ほう、ピクリともしないところを見ると、これではないと見える。……では、第二段……」

男爵は眼の隅からシロシロとアルモアーズの顔を窺ひながら、  
「第二段には、コンデ大公とチュレンヌ元帥がいよいよ和蘭へ攻め入るにつき早急の戦備中と書いてある……」

よもやとは思ふが、事によつたら自分らの企てをどこからか薄々と嗅ぎつけ、こんな手段で探りを入れてゐるのかも知れぬ。もし、さうだとしたら、うっかりした素振りをして洞察かれでもしたらそれこそ由々しい大事。逆に、こちらから計つて、なんとか欺瞞するほかはないと咄嗟に思慮を定め、男爵が第二段と披露したのへ、おッかぶせるやうにして、殊更に驚異の色をつくり、おッ、と鋭く絶叫すると、イスナール男爵は、卓の上に異様な恰好をして蹲つてゐる黒マントオの男の方へチラと眼を向け、



「おいおい、どうもこれらしいぜ。今、あつと叫んだのを貴様も聞いたらう」  
死人面は、フ、ンと鼻の先で笑つて、

「なにを、くだらぬことを。：：今のは、あれアお芝居だ。眞實驚いたのなら聲など上げるはずがない。だいいち、間がちがふ。關はずに第三段目を讀み上げて見ろ」  
男爵は頷いて、

「なるほど商賣だけのことはある。間がちがふとは眼が高い。ほんたうに驚いたものなら、あつと言ふのにあんなに暇がかゝりはしない。」

と言つて、アルモアーズの方へ眼を向け變へ、

「おい、青二才。では、これから三段目を讀んでやる。耳の穴をほじつてよく聞いてゐろ」

さすがにアルモアーズの心は湧き立つやう。第三段は何と讀むであらう。新聞を取り上げられても、それさへわかれば目的は届くと息を詰めて待つうちに、男爵は唐突に口を開き、

「第三段にはこんな風を書いてあつた。：：何でも巴里へ外國から急使が着いたといふのだ。：：さて、その急使はどこから来たかと言へば、すなはち羅馬から来たのだ」

アルモアーズはこの「羅馬」といふ一言をきくと、ちやうど神助でも受けた如く急に心氣をとり戻し、心も遽かに奮ひ立つて、どんなことがあつてもこの相手を突き伏せ、約束の時刻までに同志の十

三人と落ち合はねばならぬと、突然身を翻すと、勢ひも鋭く、踏み込み踏み込み突き立て、行く。

この突然の飛躍に、さすがの男爵も度を失つたやうすで、あしらひ兼ねたやうに二三歩後へ退る。

アルモアーズはこれぞ一期の折と、突き、檔流し、跳反しておいてつけ込み、火になれとばかりに死闘をつゞける。

卓の上でこれを眺めてゐた陰気な男は、おやおやと意外らしい顔をして、

「これアどうもうるさいことになつてきた。氣狂ひに刃物とはこのことだ。ひどく世話を焼かせるぢやないか」

と、のつそりと卓から降り、先程自分が落して行つた「踵挫き」に眼を注ぎ、聞えよがしに、

「おや、妙なものが落ちてゐるぜ」

と、呟きながら、さり氣ない様子で、足でそれをアルモアーズの方へ押しやる。ちやうど、勢一杯に身體を伸し、三段の打ち返に移らうと一步飛び退つたところだつたので、右足が「踵挫き」の眞中に落ち込み、足をとられてヨロヨロとよろけた。間一髪、先程からこの隙をと狙つてゐた男爵の大劍は、一閃、空に翻つたと思ふと、アルモアーズの第四と第五の肋骨の間へスツプリと突き通り、眞背中に二三寸ばかり白い劍尖を現はした。

アルモアーズは、叫び聲もあげず、口と鼻からおびたゞしく血を流して仰向けざまにとつと倒れ



る。  
駈け寄つて来て、テレエズがアルモアーズを抱き起すのを冷やかに尻眼にかけながら、男爵は悠々と劍の血を拭ひ、

「この馬鹿が、血だけは出し惜みをしないでフンダンに振り撒きやがる。見られたざまちやありやしない。さア、行かう、行かう。もうこんなところにもつもらん」と、連れの黒マントオを促し、高笑ひをしながら居酒屋から出て行く。

三、「人でなし」の密偵長  
並に、雪夜の重い荷物

雪は歇んで、雲の切れ間から月の光が射しかけ、蒼白く雪道を照す。

人影のない街道を市の方へ一町ばかりも歩いた頃、黒マントオの男は突然に口をきつて、

「おい、男爵、貴様は、まづいことをやつてくれたな」と、吐き出すやうに言ふ。

「俺ア殺してくれと頼んだ覚えはないぜ。手傷を負はして擣囚れと命令したはずだ。おい、なぜ殺した」

男爵はムツとしたやうすで、  
「殺すことは馴れてるが、手傷だけといふのはどうも不得手でな。つい、いつものやうに深く突つ込んでしまった。これもはづみで仕様がな」

黒マントオの男は耳も藉さず、

「黙れ黙れ。貴様のために政府がどんな損害を受けたか、よもや貴様は知るまい。……おい、よく聞け。和蘭にゐるあいつの同類で裏切りをした奴があつて、それが、昨日手紙を寄越し、アルモアーズが「金の楯屋」で新聞の合圖を待つてると詳しく報せて来た。實のところ、アルモアーズなどは物の數ではなく、政府としては、あいつを捕へて黒幕を白状させる方が大事だったのだ。……この半年の苦心で、陰謀黨の加盟書が手箱に入れて何處かに隠してあるといふことだけは探り當てたが、その手箱の在所も、また陰謀黨の一味の名も、それを知つてゐるのはあいつ只一人。……それを殺してしまつたんぢや今までの苦心は水の泡。陰謀黨の正體はもろろん、加盟書の顔觸れを知ることさへ出来なくなつた。……貴様に殺させるくらゐなら、何もわざわざ「踵挫き」など仕掛けはしないのだ。ジタバタしないやうに押へつけておいて、立たないほどの手傷を負はせてやらうと、かうまで細かく仕組んで置いたのに、貴様の馬鹿のお蔭で、何も彼もお釋迦になつてしまつた。……貴様には手痛い懲罰を喰はしてやるから覺悟してろ」



イスナール男爵は、藝が身を喰ふならひで、今でこそルーヴォア侯の暗殺團の手先にまで身を墮してゐるが、なんと言つても名劍客の名譽を保持する身分。零落れはしても傲岸不屈の精神は失つてゐないから、如何に衣食のためとは言ひながら、見るかげもない、こんな貧相な男にこれほどまでに讒謗されては、さすがに胸がをさまらぬと見え、

「おい、密偵長、なるほど、さういふ事情があつたのなら、殺したのはたしかに俺の手落ち。その點は如何にも深く謝罪するが、しかし、こんな陋劣な仕事をして扶持を貰つてゐるが、魂までは賣らぬ。過失は過失としても、君などから下僕奴隸に對するやうな罵詈雑言を受ける覺えはないのだ。今後

のこともあるから、よく覺えといつてもらうか」

聲を荒らげて敦固くと、密偵長と呼ばれた黒マントオの男は肩を揺つてせうら笑ひ、

「おいおい、男爵。たいそう偉さうなことを言ふぢやないか。……何がどうした？ 俺が貴様を罵詈する權利がないんだと？ ……佛國秘密探偵部長アキール・ナアロオが軍務宰相ルーヴォア侯から密偵一般の生殺與奪の全權を附與されてゐるのを忘れたか。……貴様がマレイ區の陋巷から救ひ出された時、宣誓書になんと書いた。有難涙をこぼしながら、生命を抛つて忠誠をいたすと誓文したではないか。してみれば、一萬リーヴルの扶持で、命ぐるみそつくり貴様を買ひ取つたのも同様。生かさうと殺さうとこつちのまゝ。罵詈雑言する位になんの不思議がある」

と、憎々し氣に言ひ放つ。男爵は思はずカッとなつたが、言はれて見ればなるほどそれに違ひない。

「さう言はれ、ば一語もないが、いつたい君達のやり方は水臭過ぎるよ。こんな陋劣な仕事に唯々諸諾と従つてゐるのも、つまりはルーヴォア侯の恩顧に酬いんがためだ。生命を抛つて信義のために働いてゐるつもりなのだから、さういふ事情があるなら、始ツから打ち開けてくれてもよかりさうなものだ。他の奴はともかく、少くとも、このイスナール男爵は、ルーヴォア侯に全幅の忠誠を捧げてゐるのに、君は一介の下僕のやうにしか扱はぬ。俺はかねがねそれを不満に思つてゐるものだから、それで、つい先刻のやうな口吻が出るのだ」

「貴様がさう言ふのなら、俺の方にも言ひ分がある。……俺の方ではナ、貴様が俺と友達交際をしようとするその態度が氣に入らんだ。密偵長たる俺にとつては、貴様は一介の部下に過ぎん。いはんや、貴様のやうな粗雑な頭を持つた奴に、どうしてこのやうな秘密が打ち開けられるものか。痴けたことも休みやすみ言へ」

アキール・ナアロオと自ら名乗つたこの男は、その名の示す通り、希臘人と佛蘭西人の混血兒で、もとは下級の偵吏に過ぎなかつたが、世に比類のないほど奸黠陰險な男で、檢察の事務に當つては、さながら悪鬼の執念、どのやうな陰微の犯罪でも苛責なく爬羅剔抉する。酌量とか人情とかいふこと



は全然この男の感情にないことで、罪ありと認めれば、たとへ上司肉身と雖も告發するの躊躇することなく、事務遂行の障害となるものはどのやうな残忍冷酷な手段を用ひてもこれを除去する。己れの事務に執著する様は、あたかも狂したかと思ふばかりで、寢食を排して目的に直行邁進するさまは、何か身の毛をよだたせるやうな凄さがあつた。

かういふ工合だから、急速に昇進を続け、ルーヴォア侯が父のル・アリエの後を襲つて軍務宰相になつた時、ナアロオは、一躍大警視兼密偵長の榮職に引き上げられ、ルーヴォア侯の右腕として檢察の全權を委ねられることになつた。

たつた今、墓場からさまよひ出た亡者のやうな沈鬱冷陰な顔つきをしたこの黒マントオの男こそは「無情な男」人でなし」といふ綽名で歴史にその名をとどめた、彼の有名なナアロオ密偵長だつた。

ナアロオ密偵長の冷血無情は、この廣い歐羅巴でも知らぬ者もないほどだが、それにしても餘りといへば餘りな情け知らず、生死を共にしようとする忠實な部下にまで心を許さぬ狭量な猜疑心と、それを高言して憚らぬ傲慢さに、さすがの男爵もつくづくと嫌氣がさし、今までの忠誠の心も遽かに冷めはてるやうな心持になつて、

「なるほど、さういふわけか。上長と輩下の區別位るは粗雑な俺でもよく知つてゐるから、改めて復習はれるには及ばないことだが、たとへ職掌に上下はあつても、生死を共にする以上、それは朋

友。その位るの人情のわからぬやうな奴はとるに足らん。君がさういふ考へでゐるのなら、こちらも料簡を變へねばなるまいて」  
ナアロオ密偵長は雪道の上へ立ち止まつて、冷酷な薄笑ひを浮べながらマジマジと男爵の顔を眺め

やり、  
「なんだと！ 今の一言は聞き捨てならんナ。料簡を變へるとは、一體どう變へるのだ」

「こつちも、さう一向になつて働くがものはないだらうといふ意味だ」

密偵長は、細い射るやうな眸で男爵の顔を睨めてゐるが、やがて、  
「つまり、貴様は寢返りを打たうといふのだナ。もしさうだつたら氣をつけた方がいゝぜ。生優しい

ことでは済むまいからな」

と、沈んだ聲で呟いた。男爵は既に幾度となく戰場を馳驅し、またこれまでに幾百度と數へきれぬほど生死の境を切り抜けて來たことだから、ナアロオ密偵長の脅し文句位るは、むしろ片腹痛く思ふのだが、恐るべきは密偵長の指揮下にある秘密警察の偉力。一萬に餘る密偵を六人づゝの小班に分けて一人の班長を置き、各個の密偵はその本名の代りに、班長の姓の頭文字に入班した順序數字で呼ばれることになつてゐるので、どのやうな人間がどの班に屬してゐるかも互ひにわからぬやうな綿密な組織になり、秘密探偵部は、更に諜報、檢索、暗殺の三部に分れ、なほ必要があれば、警視總監の命



令に依つていつでも出動出来るやうに一大隊の正規兵を包含してゐる。一旦ナアロオ密偵長に睨まれ、この廣汎な警察力の網の中へ落ち込んだら、どのやうに足掻いても最早や助からない。萬一の僥倖によつて、國境を越して外國へ逃げのびることが出来たとしても、辛辣無比な追及を受けて、結局逮捕されてしまふ。

男爵は、客氣に驅られてナアロオ密偵長を怒らせるのは不利と思ひ、強ひて忿懣の情を押へつけ、殊更に笑顔をつくり、

「馬鹿を言つちやアいけない。子供ぢやあるまいし、下手に寢返りなど打つたらどんな目に遭ふか位ゐなことは、この俺だつてよく知つてゐる。毒殺かバスチーユの土牢か、ピニユロールへ配流か。まづこの三つのうちの一つはまぬかれぬところ。假りにその方はどうでも、何より恐いのは扶持放れといふやつだ。一萬リーヴルの年俸を棒に振つてまで、誰に忠義立てして寢返りを打つといふのかい。餘り笑はしちやいけない」

密偵長は、毒のある仕方方で肩を揺り、

「さうさ、それさへ忘れなければいゝのだ。貴様にとつちや、無期徒刑や島流しより、貧乏の方がよつぽど恐いだらうからナ」と言つて、また肩を並べて歩き出しながら、

「密偵の掛替へはあつても、貴様ほどの劍客の掛替へはない。水臭いと思ふかも知れないが、檢察の事務を圓滑に運行させるためには階次の區別をはつきりしてゐなくてはならん。貴様さへそれを守つてくれるならば俸給を倍増しにしてやつてもかまはんのだが」

「いや、よくわかつた。以後きつと氣をつけるから勘辨してくれ。……それにしても、ついつつかりして、飛んだ縮尻をしてしまつたなア」

と、わざと萎れて見せると、密偵長は男爵の肩を叩き、

「まア、いゝさ、いゝさ。さう氣を落さなくてもいゝ。この後の機會に手柄をたて、埋合せをつけることさ。……アルモアーズが死んでしまつても、まだテレエズといふやつが生き残つてゐるからもう術がないといふわけぢやない。あの女の口から加盟書のありかを引き出すことも出来よう……」

靴底に付いた雪を掻き落すふりをして立ち止まり、男爵を四五間先にやつておいて、  
「白ばつてくれて誤魔化してしまつたが、いづれあいつは寢返りを打つ奴。このまゝにして置くものか」

と、凄い笑ひを浮かべながら、男爵の後姿を睨みつけた。

二人は漸くブリュッセル市の目抜の通へ差しかゝり、市廳の前を通つて、屋敷ばかり立ち並んだ物靜かな町の方へ折れ曲つて行く。



男爵は訝しさにあたりを見廻しながら、

「ひどく淋しいところへやつて来たが、これから何處へ行くつもりなのか」

と、訊ねると、ナアロオ密偵長はうるさうに眉を擡め、

「よくつべこべと何でもほじくりたがる男だ。：：今夜の十時になると、ソアッソン伯爵夫人がアムステルダムから早馬車で着くことになつてゐるから、ヴァンデイロ街のローラン伯爵の屋敷へ行つて止宿の準備をしておかなければならぬのだ」

男爵は意外の面持で、

「ソアッソン伯爵夫人といへば、ルイ十四世の前の側室、ロランブ・マンチーニ嬢のことだらう」

「如何にもさうだが、それが、どうした」

「マザラン大宰相の姪ともあるべき高貴の夫人が、どんな急用があつて、この雪に和蘭などから歸つて来るのだらう」

「保養旅行といふのはよくよく、實はド・ラ・ヴァリエール嬢に見替へられたルイ王への意趣返しに、例の陰謀黨を尻押しし、ライゾラ伯爵なども密會して、ルイ王に不平を持つ連中を盛んに煽動して歩いてゐるのだ。：：今度の和蘭行は、陰謀黨の軍資金として和蘭のアムステルダム銀行へ五百萬法といふ大金を預け入れるためだといふことまでちやんと調べが届いてゐる」

男爵は、ほう、と驚いて、

「あの美しい婦人が、そんな大膽なことを企てるのか」

「むかしから、色戀の恨みと食物の恨みは恐ろしいといふが、いくら高貴でも美人でも、この情からは遁れられぬと見える。ルイ王の第一夫人とまで敬はれた身が、名もないヴァリエール嬢に見替へられ、肚立ち紛れにソアッソン伯爵と結婚したが、心はルイ王のところにあるもんだから、夫婦仲ももうまい工合にゆかず、夫婦とは名ばかりで今では離ればなれに暮してゐるといふ始末。この頃では、朝廷の儀式にも夫人だけ除け者にされて招かれぬといふ扱はれ方だから、いよいよ以て腹を立て、家令の倅のロリッブ・トウリエといふヘナヘナ野郎を情夫にして、ひどく血の道をあげてゐるが、そのロリッブは、夫人の眼を忍んで、侍女のロオレンツァといふ娘と乳くり合つてゐるといふわけで、氣の毒と言へば氣の毒なやうなものだが、しかし、身分柄、外國の皇族や王族といろいろ懇意を結んでゐるから、政府としては最も危険な人物。：：しかし、前大宰相マザランの姪で、おまけにルイ王の以前側の側室といふことになれば、さすがのルイ王も閣下と雖も、表面からは手をつけることが出来ぬ。後腐れのないやうな陰密な方法で取り除いてしまふより方法がない。：：つまり、その邊が、今度俺がわざわざブリュッセル市へ乗り込んで来たゆえんなのさ」

ナアロオ密偵長ほどの犀利緻密な頭腦を持った人間が、何のためにこれほどの大秘密を輕々しく口



外するか。いづれ間もなくこの世から姿を消す人間だと思ふので、それで心ゆるして喋舌つてるのだらうが、男爵はそれを氣付いてか氣付かないか、大袈裟に聲をひそめ、蚊の鳴くやうな聲で、

「すると、君はこゝで、ソアツソン夫人を殺るつもりなのか」

ナアロオ密偵長は、憐むやうな眼差で男爵の顔を見返り、

「如何にもその通り。死生を誓つた同志のことだから、貴様に秘し隠ししても仕様がな。如何にも今晚殺つてしまふつもりだ。……俺がどんなことをするか、一緒について来れア分ることだ」

男爵は氣の毒さうに頭を振り、

「さういふ事情があれば已むを得ないが、それにしても、あれほどの絶世の美人をムザムザ殺してしまふといふのはいかにも惜しいものだ」

ナアロオ密偵長はジロリと流眄をくれ、

「では、貴様はソアツソン夫人に會つたことがあるのか」

男爵は頷いて、

「あるある。夫人がまだロランプ・マンチーニ嬢だつた時、ハブスブルグ家の園遊會で會つたことがある。丁度夏で、霞のやうな羅衣を着てをつたツけが、その美しいことゝいつたら非常なもので、俺は魂を飛ばし口を開いて眺めてをつた。あの時の感動は今でも胸の底に残つてゐるよ」

密偵長は、陰氣に笑つて、

「柄にもなくしほらしいことを言ふぢやないか。すると、ソアツソン夫人が貴様の初戀といふわけなのか」

「まあまあ、さういつたやうなわけだ」

男爵としては随分不用意な言葉。聞き捨てにされるはずもないのだが、密偵長は一向氣にも止めぬやうすで、

「十時になると早馬車がやつて来るから、せめて馬車から降りて来るところでも見て、他處ながら暇乞ひをするがよからう」

長い石塀に沿つて猶も二町程歩いて行くと、廣い前庭を控へた、鐵門のある邸の前へ一臺の馬車が降り、五人ばかりの人夫が木箱に入つた大きな荷物を馬車から降してゐる。

ナアロオ密偵長は早速で馬車の方へ近づいて行き、人夫どもを指圖してゐる密偵らしい中年の男に向ひ、

「おい、五十七號、荷物は壊れずに着いたらうな」

と聲をかける。五十七號と呼ばれた長身の男は軍隊式の敬禮をして、

「はい、安全に到着いたしました」



「よしよし、では、手筈の通りにしてくれ」

「畏りました」

餘程重量のある品物と見え、五人の人夫が汗を流しながら邸の中へ運び入れ、正面の大階段から二階の方へ運び上げて行く。

男爵はナアロオ密偵長に向ひ、

「だいぶ重さうな荷物だが、いつたいあの中に何が入つてゐるのだ」

密偵長は、聞えたのか聞えぬのか、それには答へず、雪の小徑を傳ひながら、先に立つて邸の中へ入つて行く。男爵は五間ほど間をおいてその後を續きながら、

「いづれあの中には、何か卑劣な道具が入つてゐるのだらう。あいつらのやり方といふものは實にどうも鬼畜同様。目的の前には涙もなければ血もない。慘虐といつてもこれ以上のことはあるまい……騙討ち、毒殺、誘拐、監禁……この世の卑劣な手段ばかり選んで無辜無實の人間を闇から闇へ葬つてしまふ。陰謀團ばかりか、こちらの側にしてみても素振りが怪しいと思ふと、仲間同志で假借なく抹殺してしまふ。宛ら地獄の沙汰……さつき、ナアロオが靴の雪を拂ひ落すふりをしながら何か呟いてゐるが、察するところ、どうやら俺を殺すことに決めたらしい。さもなければ、ソアッソン夫人のことなどを喋舌り散らすものか……まごまごすると命が危い。至急保身の手

段を講じなくてはなるまい。それにしても忌々しいのはナアロオの奴。行きがけの駄賃に突き殺してくれようか」

と、激した聲で呟きながら、雪の小徑に立ち止まつてやゝ長い間腕組みをして考へ込んでゐるが、やがて思ひ直したやうに、

「止さう止さう。脱走してしまつたらもう赤の他人、何をしようとかつちの知つたこつちやない。あんな虫けらのやうな奴を殺してみたところで、俺にとつては何の益もない。むしろ、忠義立てすると思ひかけて油断させ、うまく逐電してやるに限る。追従位で瞞しをはせる奴ではないが、どつちみち狐と狸の化し合ひ、互ひの肚を知り抜いての上の騙引。いや笑止な話だ」

と、言ひながら、またソソソと歩き出し、

「先程、うつかり口を交らせて、こつちの氣持を見抜かれてしまつたが、あの一言だけは餘計だつた。何しろ狐疑心の強い男だから、寝返りのついでに、俺が戀情にかられて、ソアッソン夫人の暗殺の邪魔をするかも知れぬ位のこと考へたかも知れない。……それにつけてもソアッソン夫人の佛は今でも忘れられぬ。この十年の間、胸の奥に秘めて置いて、辛い貧窮浮浪の間にも生甲斐の目當ともし、孤獨の慰安ともして來たのだが、類ひなく美しい、天使のやうなあの高貴のひとが、密偵づれの手にかゝつて、まるで一匹の蠅でもあるやうに無造作に叩き潰されてしまふのか。どうせあいつらの



することだから、何の證據も残さずうまうま仕終せてしまふことだらうが、それだけに、一層、憐れ  
 が深い。まつたくどうも、氣の毒なものだ』  
 悵然と頭を垂れながら、雪を頂いた糸杉の小徑を傳つて玄關の車寄へ來ると、五十七號と呼ばれた  
 長身の密偵が、人夫共のあとから降りて來て、そゝくさと玄關から出て行つた。

四、「白い寢臺」の夢  
 並に、卅萬金法の取引

男爵は、靴の雪を拂つて正面の大階段から二階の方へ上つて行くと、長い廊下の端の、前庭に向い  
 た廣やかな部屋の中に、ナアロオ密偵長が亡鬼のやうな陰氣なやうすで突つ立つて、壁際に据ゑら  
 れた白塗りの大きな寢臺をジツと凝視してゐる。

男爵は入口に立つて、素早く部屋の中を見廻して見たが、窓の側には化粧卓と長椅子、向ふの壁  
 際には美しい彫刻のある衣裳戸棚。極くありふれた家具ばかりで、一向變つたものも見當らない。先  
 程の木箱の工合では、何か餘程重い大きなものが入つてゐたと思はれるが、どこにもそんなものは置  
 かれてゐない。  
 男爵は密偵長の側へ近づいて行き、

「おい、密偵長、さつきの木箱の荷解きは済んだのか。さつきの話では、何か巧妙な仕掛で、證據が  
 残らぬやうに殺つつけるらしく言つてゐたが、見るところ、寢臺に、化粧卓に、衣裳戸棚。格別、  
 それらしい機械もないぢやないか」

密偵長は薄い唇の端を引き歪めて毒々しく笑ひ、  
 「當り前なことを。仕掛けたと分るやうではまるつきり意味をなさん。何でもないうやうに見えて、そ  
 れが恐ろしい人殺しの道具に早變りするところに仕掛の妙味があるのだわ」  
 「なるほど、そんなものだらうが、俺には一向見當がつかん。まさかこの部屋が吊天井になつてゐる  
 といふわけでもあるまい」

「吊天井でやれば、天井の漆喰に血がつく。誰がそんな間拔けたことをするものか」  
 垂れ下つた臉を押しあげて、上眼でデロリと男爵の顔を見上げ、

「おい、男爵、お望みなら俺の仕掛を見せてやらうか。……われわれを裏切ると、どんな手ひどい目  
 に遭ふかといふ教訓になる。まアよく見てろ」

と、言ひながら、部屋の中を見廻し、煖爐の側の、人間の身丈ぐらゐの箱時計に眼をつけ、  
 「うん、ちやうど恰好のものがあゝる」  
 と、眩き、それを抱へて寢臺の側まで運んで行き、充分埃を拂つてから、丁度人が寝るかたちに、



静かに箱時計を寢臺の上に横へた。

さうして置いて、男爵の側までゆつくりと戻つて來ると、何とも満足の情に耐へぬといつたやうな異様な歡喜の色を蒼褪めた顔の上に漂はせ、キラキラと眼を光らせながらグツと顔をさし寄せ、「え、え、え、どうだ、男爵。これから何が始まるか、もう察しがついたらう。あゝ、面白い、面白い。なんともかんとも、こんな愉快なことはない」と、甲走つた聲で叫びながら、例によつて手を拍ち叩き足を踏んで、さながら狂したやうに躍り廻る。

男爵は、何とも言ひ表し難い惻々たる鬼氣に襲はれ、ゾツと背筋を寒くして寢臺と密偵長をかたみに眺め交してゐるうちに、それから約二十分も経つたと思ふ頃、寢臺の兩側の側板が眼に見えぬほどづゝ微妙にせり上つて來る。例へて言ふならば、白い大きなチューリップの花が夕風に誘はれて、そろそろと葩を閉ぢ合せて眠りにつかうとでもするやうに、少しづゝ、少しづゝ、しばらくで來る。密偵長は憑かれたやうに兩手を打ち叩き、「そら、しばらくで來た、しばらくで來た。實にどうも、申し分のない出來だなア」と、異様な聲で囁し立てるうちに、兩方の側板はいよいよ伸び出して、寢臺の眞上のところで、毛ほどの隙もないやうにキツチリと喰ひ合つてしまつた。ちやうど白塗りの大きな寢棺といつた工合

で、ツラツラと側板を輝かせながら、無氣味に寂然と静まり返つてゐるが、それからまた二十分ほど経つと、固く喰ひ合つてゐた二枚の側板は、除々に綻び始め、ゆつくりと兩側へ沈んで行き、間もなくもとの寢臺になつてしまつた。

巴里の古文書保管所に詳細にその構造のしるされた記録がのこつてゐる。これこそはナアロオ密偵長の發明にかゝはる陰險な「白い寢床」だつた。

餘りの物凄さに、さすがの男爵も、何と言はう言葉もなく、ビッシヨリと冷汗をかいて唇を顫はせてゐると、ナアロオ密偵長は、得意氣に男爵の肩を叩き、「え、男爵。どうだ、うまい工合に出來てるぢやないか。誰かあの寢臺の上へ寝ると、人間の身體の重みで齒車の掛金が外れ、側板が兩側からそろそろと迫り上つて來て、ご覽の通りに隙間もなくピツシリと喰ひ合つてしまふ。側板は頑丈な厚い檜材で作つてあるから、中でどのやうに暴れようが呻き聲を上げようが、絶対に外部へ洩れる氣づかひはない。生きながらに棺へ入つたやうなもので、間もなく息が窒つて死んでしまふ。朝になつて來てみればやア、寢臺はもとのまゝだから、これア卒中だ位で済んでしまふといふわけなのさ。ソアッソ伯爵夫人のやうに、大手からかゝれぬ奴には持つて來いといふ道具だらう。どうだ、男爵、少しは驚いたか」と言ふと、唐突に、劈くやうな聲でカラカラと笑ひ出した。



餘りといへば餘りな辛辣殘忍なやり方に、男爵は押へ難い不快の念を感じたが、表面はさりげなくいかにも感謝した態に頷いて、

「何ともどうも、大したものだ。これならば、まづ絶対に證據を残す氣づかひはなからう」

と、相槌を打つと、ナアロオ密偵長は得意満面の態で、

「絶対、絶対。……貴様か俺か口外する以外には、絶対にこの秘密の洩れる氣づかひはない」

と言つて、急に調子を變へ、糸をひいたやうな細い瞳の奥から男爵の顔をジッと睨めながら、

「かういふ秘密を打ち開けたからには、貴様とても、もうのつびきならぬ破目に陥ち込んだわけだ。

まア、せいぜい用心するがよい」

と、呟くやうに言ふ。凄いとも無氣味とも言ひやうがない。男爵は胸を顫はせながら、強ひて苦笑

し、いかにも恐れ入つたといふ體で、

「確かにそれに違ひない。いや、今夜ばかりは骨身に徹へた」

と、言つてゐる時、やゝ遠くの市廳の時計臺が、カン、カン、と十時を打つた。

ナアロオ密偵長は、急に顔を引き緊め、

「お、十時が鳴つたナ。ぢやア、もう間もなくやつて來るだらう。玄關まで降りて出迎へをしようと

しようか。……男爵、貴様は、出迎へを済ましたら、一足先に宿へ歸つて待つてゐてくれ。俺はロリ

ツプ・トゥリエといふ伯爵夫人の情夫にちよつと用事があるから、一時間程おくれて歸る」

「よしよし、承知した」

寢室の扉を閉すと、肩を並べながら玄關の間の方へ降りて行く。

程なくバンデルロ街の入口の方に早驅けする馬の蹄の音が聞え、官廷用の赤塗の大きな旅行馬車が

轍に雪を軋ませながら、車寄に走り込んで來た。

探偵長が車寄に驅け出して馬車に近づき、慇懃に腰を折り、頭を下げて待ち受けてゐるうちに、馬

車の扉を排してヒラリと飛び降りたのは、年の頃廿五六歳の、見惚れるやうな端麗な面差をした青年

紳士。

頭を下げてゐる密偵長を見ると、鷹揚な聲で、

「あ、ご苦勞ご苦勞。御宿舎の準備は手落ちなく終りましたか」

探偵長は、鄭重に頷いて、

「お、これはトゥリエさん。今度は御保養の御旅行だとうけたまはりましたから、その邊を斟酌い

たしまして、わざと召使共は一人も置きませんでした、それ以外の準備は全部整つてをります」

「いや、その方が結構。明朝は早發ちで、どうせ一夜の宿舎ですから、閑靜なのが何より」

と、言ひ捨てると、トゥリエは馬車の方へ戻つて折疊の階段を下し、馬車のうちへ丁寧挨拶す



る。十八九歳の優し氣な腰元に手を引かれてしづしづと馬車から降り立つて來たのがソアツソン伯爵夫人。長旅のせむか幾分疲勞が見えるが、そのむかし、ルイ王を惱殺して狂するばかりにさせた漆黒の眼は、今もなほ魅はしさを失つてゐない。叔父の太宰相マザランは伊太利の人で、夫人もその血を享けてゐることだから、面ざしにその國特有の一種の凄味があり、顔は少し長めで、眼は深く、唇は強く引き緊り、情に脆く情に激しい南國人の顔容。肩に亂れ落ちた黒髪は、蒼白い顔に映じてこの世のものと思はれぬほどに美しい。

ソアツソン夫人は、侍女のロレンツアを従へ、密偵長に導かれて靜かに二階へ上つて行く。間もなく、庭に向いた二階の窓から明々と灯が洩れて來る。男爵は、その方を振り仰ぎながら、「あゝ、いつ見ても美しい。餘りの美事さに、つい惘然としてゐた。ソアツソン伯爵夫人が、間もなくあの白い寢臺で壓し殺されるのかと思ふと、さすがにどうも安い氣持がしない。せめて、命だけでも助けてやる方法はないものかしらん……」

と、思案にふける様子だったが、やがて首を振り、「どう考へても、俺の力では覺束ない。もう考へまい、考へまい」と、ひとり呟いてゐるところへ、ナアロオ密偵長は、ロリップ・トゥリエと呼ばれた青年と何か睦

じげに話をしながら玄關へ現れ、

「おゝ、男爵、では、あなたは一足先にどうか宿へ」

男爵は頷いて、二人に別れを告げて門の方へ歩いて行く。

密偵長は、ロリップに、

「ちよつと失禮」

と、挨拶して、車寄の傍の灌木の繁みへ向つて、低く三度口笛を鳴らすと、その蔭から影のやうに立ち現れたのは、先程の五十七號と呼ばれた長身の密偵。

ナアロオ密偵長は、その耳へ口を當て、「宿まで男爵の後を尾けて行き、誰とも話が出来ないやうにしつかりと閉ぢ込めてしまへ。絶対に誰

とも話をさしてはならぬのだぞ」と、囁いておいて、小走りに駆け戻り、ロリップの手を取らんばかりにして、

「これですつかり私の任務が終りました。あなたもアムステルダムから乗りづめで、さぞ、えらいことッてしたらう。氣晴しに、その邊へ行つて一口やらうぢやありませんか。ご存知かも知れないが、ボツダム街の「白鳥屋」といふ料理屋に、ちよつといふ酒倉がありましたね。シャトウ・ディケムの甘味いやつを飲ましてくれます。あなたも日がな毎日官仕へで、さぞ氣骨が折れるこつてせう。たまに



は氣晴しもしなくては。……さア、お伴しませう』  
と、腕を取つて歩き出す。ロリップは、うるさく頭を動かして頷きながら、いかにも輕薄な口調で、

『え、さうですよ。何しろ朝の眼覺めから夜寝るまで、ロリップ、ロリップと呼び立て、片時も側を離れると機嫌が悪いといつたふうですから、私の氣骨の折れることゝいつたら並大抵ぢやありません。馬車に乗りやアまた馬車の中で、しつかりと私の手を握つて、膝を押つけるやらしなだれかゝるやら、ほとんど息もつかせぬといふ鹽梅で、眞實クタクタになつてしまひました。……仰言る通り、たまには綺麗な女の子の顔でも見て氣晴しをしなくちやアねえ、とても身體が保ちません』

ナアロオは、この馬鹿が、と口の中で呟きながら、顔には精一杯の愛想笑ひを浮べ、  
『いや、どうもこれはご馳走さま。男も女も綺麗に生れつきやア、五割がた得がいく。まつたくあやかりたいものです。さうまで可愛がられながら愚痴を言つちや、男の冥利につきますぜ』

と、煽り立てると、ロリップは口をすぼめて、ホ、と嫌味に笑ひ、

『いや、愚痴を言ふわけぢやないが、朝から晩まで引きつけの、しなだれのぢや、少々厭氣がさすといふことですよ』

ナアロオはたるんだやうなその横顔へジロリ流眇をくれ、

『とか何とか、うまいことを仰言るが、夫人に隠れて、あの美しいロレンツァと乳くり合ひなどは、少し罪が深過ぎますぜ』

と、ズバリと痛いところを突く。ロリップはひとたまりもなく、眼も當てられない程に狼狽して、

『えッ、えッ、何ですと。いつたい、どうしてそんなことを』

ナアロオは空嘯き、

『他人の秘密を探るのが私の商賣でね。たいていのことは私の眼力から外れませぬのさ』

『それはもう、あなたに見抜かれるのは仕様ないが、まさか、夫人は氣付いてをりますまいね。……萬一、そんなことが耳に入つたら、痲性で、嫉妬深い夫人のことだから、忽ち父親もろともに放逐され、親子二人で路頭に迷はなければなりません。いや、これはどうも困つたことになつた』

と、泣き出さんばかりに愁歎する。ナアロオは慰め顔にその肩を叩いて、

『まアまア、さう心配なさるな。今の一件は私の胸にをさめて、まだ誰にも話しはしません。なアに夫人などは知らぬが佛。あんた可愛さで眼が眩んでゐるんだから、私さへ口を噤んでるれや、覺りつこはありますまい』

と言ふと、ロリップは蘇生の面持で、

『いや、有難い、有難い。それでやつと安心しました。どうか、何分にも、内證にお願いいたしますよ。』



きつと、恩に着ますから』

『心得ました。では、どつさり恩に着せませうかな』

『え、着ますとも、着ますとも』

聲を合せて空笑ひをしながら、大通りから裏道へ折れ曲り、漆喰細工の白鳥を看板に出した料理店の薄暗い入口に入る。

かねて手筈があつたものか、出て来た亭主にちよつと眼くばせをすると、亭主は心得て、居酒屋の側の階段を登り、奥まつた小部屋に二人を案内する。

ナアロオは亭主に飲物と料理を命じて置いて、ロリップの方へ向き直ると、やゝ改まつた口調になつて、

『ねえ、ロリップさん。あたしはかねがね考へてゐたんだが、あなたのやうな、才能もあり、容姿も立派な紳士が、いかに身分の高い夫人とはいひながら、そんなものゝ機嫌氣襖を取つて、あたら働き盛りを無駄にしてしまふといふのは如何にも詰らん話。あんたはソアツソン夫人の機嫌を取り結んで、それで出世をしようと思つてゐるのかも知れないが、以前ならともかく、今は一介の伯爵の奥方。ド・ラ・ヴァリエール嬢に見替へられたのを恨みに思つて、あまりしつこくルイ王に絡むもんだから、王の方でもすつかり嫌氣がさし、この頃では、宮廷の大事な儀式にもソアツソン夫人だけが除

け者にされて招かれぬといふ始末です。言はゞ、誰一人見返らうともせぬ御沈落のひと。そんなものに頼つてゐたつて一生うだつは上らない。いはんや、追々に、あなたとロレンツァの間を嘆ぎつけられでもしたら、それこそ古靴のやうに捨てられてしまはなければならん。……あなたの身をおもつてご忠告申すんだが、どうです、ロリップさん。そんなものに何時迄も喰つゝいてゐないで、誰か、今を時めく大政治家に取りついて、ひと花咲かして見る氣はありませんか』

ロリップは、可笑しげに顔を歪めて嘆息をし、

『それはまア、あなたの仰言る通り、夫人のご沈落振りには私もすつかり嫌氣がさし、何とか身の振り方を決めなければならんと思つてゐたところですが、私のやうな名も傳手もない人間では、どこへ取りつかうにも當はなし……』

ナアロオは膝を打つて、

『なるほどあなたは女を瞞すやうに生れついてゐる。顔つきは男でも惚々するほど美しいし、口前は上手。繪から音楽、小説や詩にも通じてゐて、會話や應待にかけたら天下第一品。それに心が薄情ときてゐるから、これア、實によく出来てゐる。あなたが秘術を盡したら、どんな手強い女でもコロリと参つてしまふでせう。ねえ、ロリップさん』

ロリップは馬鹿にされたとも氣がつかず、



「何を言ふかと思つたら……。あまり冷かさんで置いて下さい。私にしちやア冗談どころの騒ぎぢやないんですから」

ナアロオは急に眞顔をつくり、  
「冗談などは言つてゐない。女を瞞すぐらゐるの男でなければア大きな仕事は出来やしません。その點、私はいつも頼母しく思つてゐたんで」

と、言つて、急に聲をひそめ、

「ねえ、ロリップさん。その氣があるなら、ひとつ大臣にあなたを斡旋して上げませうか」

ロリップは、聞くより身を乗り出し、

「えッ、私を、あの、大臣へ！……そ、その大臣といふのは、いつたい、誰方のことです」

「大臣といふのは、即ち、私が忠誠を誓つてゐるド・ルーヴォア侯さ」

「あの、ルーヴォア侯……」

「ルーヴォア侯が特別に君を見込んで、一働きしてもらひたいと言つてゐるんだが、その氣はないです。矢張り、ソアツソン夫人の方がいゝのかね」

ロリップは疑はしさうな面持で、

「ご冗談を、何の因縁があつて、ルーヴォア侯が私などを」

「さう思ふのは無理もないが、しかし、これを見たら、あなたも納得がいくでせう」

大きな革の紙入の中から四五枚の紙片を取り出して食卓の上にひろげ、

「これをご覧なさい。この紙に、國家に盡したる功勞により……を陸軍大尉に陞進せしむる者なり」と書いてあつて、その下に、ルーヴォア侯の署名がある。……どうです、ロリップさん。ルーヴォア侯は、私の眼鏡にかなつた有爲な人物を雇ひ入れさせるために、こんな白紙の辭令書を私に預けてゐる。……陸軍大尉といへば、一生鐵砲を擔いでアタフタしてもなることも出来ぬ人間がいくらもある。あなたさへその氣になれば、私が辭令書の空白へあなたの名を書き入れる。するとあなたは、現在只今から陸軍大尉、中隊の一つも預つて、存分に花を咲かせることも出来るといふものだ。……ところがそればかりぢやない……」

と言つて、更にもう一枚の紙片をおし擴げ、

「次に、これをご覧なさい。こゝには、かう書いてある。國家に盡したる功により三十萬リーヴルの賞與金を……に與へる者なり。……あなたがちよつとしたことをやつてくれさへすれば、成功の曉に、これに貴方の名を書き込まうといふのです。……陸軍大尉の位階と、三十萬リーヴルの賞與金。

どうです、悪くないでせう」  
ロリップは酔つたやうな面持でナアロオの顔をふり仰いでゐたが、まるで夢現のやうなぼんやりし



た聲で、

『それは本當のことではうか』

と呟くと、ナアロオは笑ひ出し、

『あんたも疑り深いひとだねえ。嘘だと思ふのなら、今この場で辭令書の方へあなたの名を書き入れてもよろしい。しかし、餘り氣が進まないといふなら……』

と、氣をもたせると、おツ、おツ、とロリップは見苦しくうろたへて、

『と、飛んでもない。な、何で私に不足などありますものか。いかにも承諾しました、など言つては勿體ない。平に平にお願い申し上げます。何分どうか、さういふことに……』

夢中になつて手を合せる。ナアロオは冷然と頷いて、

『これで話が決つた。……しかし、その仕事がああなたの氣に入るか、どうか。……仔細はこれから申しますが……』

ロリップは逆上あがつて、

『陸軍大尉にしてみたらへるんでしたら、たとへどんな辛い仕事でも厭ふこつちやありません』

ナアロオは、垂れ下つた臉の間から、細い瞳を光らせながらジツとロリップの顔を眺めてゐたが、唐突に口を切り、

『しかし、口先だけの誓ひだけでは困る。何しろ國家の大秘密を打ち開けることでもあるから、あなたがどんな苦痛にも耐へるといふ證據を現實に見せてくれなくては。……私が充分に試験して、これでよしといふ見極めがつかなければこの辭令書にああなたの名を入れるわけにはゆきません』

『いや、よくわかりました。……さもなくば、私のやうな何の取柄もない者を藪から棒に陸軍大尉にしたり、三十萬リールといふ大金をくれたりするわけはない。さうあるのが當然。今迄は、あなたのお話を半ば疑つてをりましたが、これで信用することが出来るやうになりました。どのやうな辛い試験にでも必ず耐へてお目にかけますから、どうか今すぐやつて下さい』

と、案外に潔く言ひ放つ。ナアロオは頷いて、

『今のあなたの言ひ廻しで、先づ試験の半分は通過したと思つてよろしい。では、やりますから、左手の掌を開いて、この食卓の上に載せなさい』

ロリップが命じられた通りにすると、ナアロオは上衣の衣囊から小刀を取り出し、ロリップの掌の真中に假借なくズブリと小刀を突き刺してしつかりと手を食卓に縫ひつける。密偵長は、あつといふロリップの悲鳴を聞き流し、冷然たる口調で、

『私が時計を見てをりますから、かうしたまゝで、十分だけ休ませてごらんください。首尾よくそれが出来たら、即座に辭令書にああなたの名を書き入れます』



手の掌から溢れた血が、手頸を傳り、陰惨な音を立て、點々と床のうへに滴り落ちる。ロリッブはこれが一期の折と思ふから、紙のやうに白くなつた額際から油汗を流し、一分を一時間と數へながら死んだ氣になつて、氣の遠くなるやうな疼痛を怵へ怵へてゐるうち、待ちに待つた規定の時間の十分が終る。

ナアロオはロリッブの掌から小刀を抜き取り、靜に血を拭つて衣囊へ納め、

『いや、よろしい。あなたは試験に合格しました』

と言つて椅子をすゝめ、觸れるほどにロリッブの方へ顔を近よせ、

『さて、かうなつた上はすべてを打ち開けてお話するが、近頃ルイ王とルーヴオア侯を恨む者が互ひに氣脈を通じて王位轉覆の陰謀を企ててゐる。ところで、その陰謀黨一味が署名した加盟書と、互ひの間で往復した文書が鐵の箱に納めて何處かに隠してある』

ロリッブは掌の傷口にコニヤックを噴きつけ、ハンカチで繻帶をしながら、いそがしく頷き、

『成程、成程』

『その隠し場所を知つてゐるのは、決死黨といふ陰謀黨の先鋒隊長の従妹テレエズ・ヴァンダムといふ娘。つまり、あなたはその娘を色仕掛で蕩し込んで、是非とも手箱の隠し場所を探り出してもらひたい』

『成程。それで、その娘にどういふ方法で近づきますか』

『實は、和蘭にゐる陰謀黨の一味で、ひそかに裏切りをした奴が一人ゐる。これは陰謀黨の中でも相當重要な位置にある男なのだから、その紹介状を持つて行けば容易く近づくことが出来る。……そこで、ひとつの仕事は、それを手蔓にして、先鋒隊の一味と行動を共にし、先鋒隊が何月何日、どの間道を通つて巴里へ忍び込むか、充分に探り出して素早く謀報してくれ給へ。念を押す必要もなからうが、君の行動に少しでも腑に落ちぬところがあると、すぐに逮捕してバスチーユ監獄へ叩き込み、生涯陽の目を見られないやうにしてやるから、それも豫め充分心得て置いてもらはうか』

と、言ひながら、小部屋の入口の方へ向つて二三度軽く手を打ち叩くと、顔が半分隠れるやうな大きな黒眼鏡をかけた二人の男が闕際に現れた。ナアロオはロリッブに向ひ、

『ロリッブ君、つまり、この二人の紳士が君の身邊を離れずに、絶えず君の行動を監視することになる。尤も、そればかりが能ではない。必要があれば、いつでも君を射殺出来るやうにその方の用意もしてあるはずだ。……君の方からこれらの紳士を利用出来るのは、たゞ一度きり。……つまり、間道と日時の謀報をする時だけだ。それ以外には、一切君の依頼には應じないことになつてゐる。では、紹介して置かう。右の方が「百十六號」、左は「六十六號」といふのだ』

二人の黒眼鏡の男は、交る交る手眞似で何かロリッブに話し掛ける。ロリッブは呆氣にとられて、



「密偵長、この人達は一體何の真似をしてゐるのですか」

「ナアロオは素氣ない顔で、

「あの紳士達は、君に初対面の挨拶をしてゐるのさ。何しろ二人は、舌が無いのだからナ」

「えッ、舌がないといふと」

「さういふ必要があつて剪り取つてしまつたのだ」

さう言つて、如何にも可笑しくてならぬといふ風に、クツクツと喉を鳴らして笑ひ出した。

### 五、林から洩れる話聲

### 並に、要塞の緑の洋燈

佛蘭西ノール州のバヅエいの谷間は、白耳義の國境から五十軒ほどのところにあつて、白耳義領から流れて来るエスコオといふ河が、ひつそりと谷底をひたしてゐる。

三月の末、まだ春も浅いので、枯草の上を吹き渡る風も冷い。

河の岸からすこし離れたところに、雑木林に取り囲まれた廣い草地があり、馬を立木に繋ぎ、十四五人のひとがそこに坐つて雑談をしてゐた。その中に、眞新しい軍服を着た廿五六の青年が草の上を足を投げ出し、身體を斜にして、その頃、反路易黨の間に流行した「壓制の嵐吹きすさび…」とい

ふ歌を低い聲で唄つてゐる。

その聲は清しく、節廻しはいかにも巧みで、聞くものを思はずうつとりとさせる。聲ばかりではない。その面は貴公子のやうに端麗である。後へ跳ね上げた帽子の縁から、ブロンズの卷毛がはみ出して柔かく額に波打ち、時々赤い唇の間から現れる齒の美しさ。婦人にしてもこれほどの容貌を持つてゐるものはまづまづ少からうと思はれた。

やがて、美貌の士官が一節を唄ひ終ると、みな口々にほめ讃へる。

アルモアーズは、大負傷後まだ充分に恢復しきらぬ蒼白い頬を、目立たぬほどに染めながら若い士官に向ひ、

「オビリエ大尉、いつ聴いてもあなたの歌は巧みなものです。和蘭のボーデン君が、紹介状にあなたの武術と馬術のことしか書いてよこしてくれなかつたことを甚だ不服に思ひますよ」

さう言つて、その傍にひと團になつてゐる三人の方へ振り返りながら、

「こゝにゐる、テレエズ、コフスキー、アリの三人の手厚い看護もさうですが、私がブリュッセルの宿屋で傷の痛みに悩んでゐる六週間の間、あなたの優しい歌聲は、どんなに私の心を和けてくれたか知れませんか」

テレエズは、深い眼差でオビリエ大尉の顔を覗めながら、



「マルセルばかりではありません。あたしもさうでしたわ。……夜通しの濕布の取換へで、身體が綿のやうに疲れてしまつた時でも、あなたの歌を聴いてゐますと、氣持がしやんとして疲れもなにも忘れてしまふのです。あなたの歌は、ほんたうに不思議な力を持つてゐます」

オビリエ大尉は顔を赧らめて、  
 「そんなに仰言られると、咽喉がつかまつて聲が出なくなりなす。師匠について習つた歌ではなく、自分の思ひ任せに唄つてゐるので、格別、面白いか上手だとか言はれるところはあります」  
 コフスキーと呼ばれた、頑丈な身體つきの、見るからに朴訥さうな男は、うるさいほどに首を振つて、

「いやいや、それは違ひませう。よほどの技巧がなければ、かうまでひとの心をひきつけることは出来ません。わたくしのやうな朴念仁でさへ、つい恍惚となつてしまひますから」  
 大尉の向ひの切株に腰を掛けてゐた、アリといふ色の淺黒い、敏捷さうな小柄の男は、すぐその後を受けて、

「歌もさうですが、それよりも何よりも、あなたのやうな智略のある方が、われわれの仲間に加はつて下すつたといふことは何より心丈夫。わたくしとこのコフスキーは、畢竟、馬丁と下僕、忠義の氣持はあつても氣が利かず、力はあつても才覺が足りない。なにしろ、かういふ實に危い企てなのです

から、二人で心を合せても、手落ちなくお護り出来るかどうかと、そればかり案じてゐたのでした  
 が……」

アリがさう言ふと、十人の隊士たちも、代る代る口を開いて、機略の才に乏しい自分たちの中へ、オビリエ大尉のやうな操兵の經驗のある士官が加盟してくれたことは、われわれの計畫が半ば成功したやうなもので、こんな心強いことはない、と言つた。

オビリエ大尉がボーデン男爵の紹介状を持つて入黨を希望して來たとき、すこしでも疑ふ氣持があれば、これはナアロオが差廻した密偵だと譯もなく看破くことが出來た筈だつた。

ボーデン男爵は、つい最近まで決死黨先鋒隊の副大將格として活躍をつゞけてゐたが、いよいよ巴里へ進發するといふ間際になつて、急病のために參加出來なくなり、自分の代人としてオビリエ大尉を推薦して來た。

進發の間際になつて俄かの發病も訝しいし、また、オビリエ大尉その人もアムステルダムやブリュッセルの秘密會で嘗つて一度も見かけなかつた顔だ。のみならず、軍隊の叛亂を企て、發覺し、危く身を以て脱れて來たといふ簡単な經歷が記されてあるばかりで、その他のことは何もわからない。

ボーデン男爵の紹介状には、南佛蘭西のラングドックの人だと書いてあるが、言葉に訛がなく、生粹の巴里の、然も上流の典雅な言葉づかひなのも怪しい。



このやうに、疑はうとすればいくらでも疑へるところがあるのだが、二人の従僕は一途の主人思ひで、アルモアーズに優しくする程のものならどんな人間でも喜び迎へるといふ風、アルモアーズにしろテレエズにしろ、また、十人の若い同志達も、ひたすら反抗の意氣に燃えてゐるだけで、根は博愛と忍従の訓を守る信仰の篤い新教徒達ばかりだから、ボーデン男爵の紹介状をそのまゝ信用して、露ほども疑はうとしなかつたのも、また是非もない次第だつた。

さて、休憩がすむと、一同はアルモアーズを中心にして圓座をつくり、巴里郊外のマルレエ村迄の進路を協議することになつた。

アルモアーズは最初に口を切つて、

『ルイ十四世のサン・ジェルマン宮お成の日取は四月朔日。今日は三月の廿四日ですからまだ八日の餘裕があります。普通ならば三日で行かれますが、この頃は秘密警察の密偵が街道を厳しくとり堅めてをりますので、本道をはづれて間道傳ひに迂廻して行かねばならず、従つて、ざつと倍の日取はかかるものと思はなくてはなりませんまい』

オビリエ大尉は口をさし挟み、

『ご承知の通り私は南佛の生れで、この邊の地理には餘り明るくありませんが、大體どのやうな道筋をとるのでですか』

アルモアーズは頷いて、

『さう、あなたはラングドックの方だから、萬一われわれとはぐれた場合の用意に、とりわけ詳しく申し上げておかねばなりません。……いまこゝを流れてゐるのは白耳義から來たエスコオ河で、あのだつと向ふの山を越えると今度はオルネエ河の流域へ出ます。……最初の困難は、このオルネエ河の渡河なので、なぜかと申しますと、渡場の向ふにはクスノアの堡塞があり見張りが非常に嚴重ですから、その近くを渡ることは出来ません。止むを得ませんから、河に沿ひ上手のセブウル村の横へ出、その水車小屋を目標にして行くのです。水車小屋の主人はわれわれの同情者で、要塞の哨兵の交替がすむと、直ぐ軒へ松火を出すことになつてゐますから、われわれはそれを眼當てに進んで行けばよいわけです。その晩は水車小屋に一泊し、翌日の夜、折を見てオルネエ河を渡ると、翌日は、ソム州の州境へ着きます』

『よくわかりました』

『第二の難所は、このソムム河の渡河で、對岸には有名なペロンヌの堡塞があり、クスノアよりも兵士も多く、見張りも嚴重なばかりか、こゝにはわれわれを導いてくれる同情者もないので、勢ひ非常な危険を冒して河を渡らねばなりません』

『非常な危険と言ひますと』



「こゝならば渡れまいといふので見張りもつけずにあるやうな、流れの激しい深い淵を渡つて行くのです」

「それは、どのやうな場所ですか」

「ペロンヌの堡塞から八軒ほど河上に、「半獅神の淵」と呼ばれてゐる、流れの強い淵があります。水勢が激しいばかりでなく、河底に危険な隠れ岩が澤山あつて、時々河舟が舟底を割つて沈むので、それでさういふ名がついてゐるのです。舟でも、泳いでも、容易く渡れるやうなところではありません。んから、ペロンヌの要塞でも安心して、その邊にだけは哨兵を置きません。つまり、それがこちらのつけ眼なので、幸ひ我々は皆馬を持つてゐますから、馬に頼つて何とか向岸まで泳ぎ渡らうといふのです」

オビリエ大尉は、快心の態で手を拍ち、

「なるほどそれならば必ず成功するでせう。原則からいふと、われわれの操兵の経験では、相當急な流れでも比較的容易に渡河出来るものなのです。これだけ言ふと奇妙に聞えるかも知れませんが、尤も、それにはその方法がなくてはならんことです」

と、言つて、馬丁のアリ・ペーの方へ振り返り、

「君は永らく馬を扱つて知つてゐるだらうが、騎兵が急流を渡河する場合は、相當の間隔をおいて二

列縦隊になつて、河と三十五度の角度で斜行進をする。何のために二列縦隊になつて行くかと言へば馬術に熟練した偏強の者を河上へ配し、餘り熟練しない半數を掩護して無事に渡河させるのが目的なのだ。この場合、上流の半數からは多少の犠牲者を出すこともあるが、下流の半數は無事に渡河を完了することが出来る。今度の場合は、われわれの中で馬術に熟達したものが上手を渡り、まだ経過の充分でないアルモアーズさんやテレエズさんを掩護するやうな方法をとれば、必ず成功すると思ふが君はどう考へるか」

と、熱心にたづねかけると、アリは感服して、

「なるほど、さすがは操練の實際家だけあつて、如何にも着實な計劃です。子供の時から馬丁で、馬を扱ふことは馴れてゐますが、それはたゞ馬を知つてゐるといふだけのこと。さういふ急な淵を渡る場合の心得などはありませんでしたから、場合によつては、馬を捨て、私とコフスキイが旦那さまとテレエズさまを背負つて渡る他はないと覺悟してゐたところでした。いや全く以て敬服いたしました」

アルモアーズはそれに繼いで、

「それこそ、萬全の方法です。では、「半獅神の淵」を渡る時には一切あなたの指揮に従ふことにしますから、どうぞ存分にお願ひします」



オビリエ大尉は、潔く頷いて、

「よろしうございます。及ばずながら充分に御嚮導いたしませう。上流の先頭にはアリ君が行き、萬一アルモアーズさんやテレエズさんが溺れかゝつたやうな場合にすぐ救助の出来るやうに、私が下手の組の殿に行きませう。私が殿にさへついてゐれば、お二人のみならず、同志の危険を必ずお救ひしてみせます。一人でも溺らすやうなことは絶対にいたしません」

と、頬を紅潮させて頼母しげに言ひ放つた。テレエズは感謝の色を眼に現はし、

「マルセルは、あたしが萬一淵を渡れぬ時は、みなの手繋ぎになるから、諦めて一人でモーセルへ歸るやうにと申すのです。あたし一人のために他の方々に餘計のご苦勞をかけるのでは申し譯ないことです。ですから、どうしても渡れないと決つたら、マルセルの言ふ通りにしようと思つて決心してゐたのです。あなたさへ殿について見張つてゐて下さるのなら、どんな急な淵でも渡り越えて、この先もマルセルについて行くことが出来ます。どんなにお禮を申してもお禮しきれないやうな氣がします」

コフスキーは實直に頭を下げ、

「實にどうも有難いことで、私も及ばずながら旦那さまとテレエズさまをお護りしますが、どうせ百姓の俄馬術、存分な働きは出来まいと思ひますから、後のところはあなたさまに願ひいたします。かうなれば、あなたさまだけがお二人の命の綱、何分とも、よろしく」

と、涙を浮べて頼み入つた。

一同の指揮に當るのはナアロオ密偵長の腹心。これに導かれて激しい淵を渡るとなれば、一同の運命はもう知れてゐる。これもまた酸鼻な話だつた。

さて、一行十五人は、アルモアーズを先頭にして、エスコオの谷間を出發し、道もない間道を辿り、翌日の夜の七時頃、オルネエ河の水車小屋に到着した。その夜はそこで二泊し、次の日の曉方ことなく河を渡つて、それからミスレエの山路へさしかゝる。

このあたりは荆棘ばかり生えて、道らしい道もなく、一行は尾根に上つては地理を按じ、西南へ方角を取つて、灌木と荆棘の間を分けて行く。こんな風にして、ミスレエの山で二泊し、三日目の夕暮近く、やうやくペロンヌの河のそばまで出た。

一同は林の中に馬をとめ、木の葉越しに、遙か向ふの堡塞の方を窺ふと、見張臺の上に、一點、星のやうな緑色の灯が輝いてゐる。

アルモアーズは不審げに首を捻りながら、

「不思議なこともあるものだ。どうしてあんなところに灯など点けてあるのだらう。ついぞ、今迄なかつたことだが」

と、呟くと、オビリエ大尉は、これも仔細らしく腕を組んで、



「なるほど合點のゆかぬことですな。しかし、この頃は、ソナム州ばかりでなく、ノルマンディ、ブルターニュなどの邊鄙なところにある堡塞にもそれぞれ増員され、遽かに警戒が嚴重になつたと聞きますから、思ふに、城外の哨所に信號するためにあんな灯を出してあるのではありますまいか」と、言ひながら馬から降り、偵察でもする風に、一同から離れて河の岸まで進み、わづかばかりの草地にとつかりと腰を下すと、繪に描いたやうな美しい唇を鬼々しくひき歪め、

「ヘン、馬鹿めが、あれは信號燈でも何でもない。六十六號」に手渡した密書が、要塞のナアロオ密偵長のところに届き、申し越した通り「半獅神の淵」の岸に兵士を伏せ、銃口を揃へて待つてゐるから安心しろといふ報せなのだわい。……そんなこととは夢露知らず、河の中段まで渡つて行くと、向ふの岸からは一齊射撃の雨霰。一人残らず胸板をやられてあへなくなつてしまふ。あゝ、氣の毒なものだなア。……こちらは河下へ廻つて殿について行くのだから、命の方は安全無事、後に残つた仕事といふのは、テレエズの口から手箱の隠し場所を聞き出すだけだが、どうも、シヤアつくばつたやうで、さすがの俺にも手が出せない。ナアロオの奴は、アルモアーズが死んだとばかり思つて、それで、テレエズをと言つたのだらうが、アルモアーズが生きてゐる以上、あんなしちめんど臭い娘にかゝり合つてゐるテはない。アルモアーズには、これで三日がかりでうまく持ち掛け、萬一生き残つたら弔ひ合戦をすると吹き込んで置いたから、こゝに待つてゐれア、そのうちに向ふから、ノコノ

コやつて来るだらう。どいつもこいつも馬鹿かと思はれるやうな善人揃ひ、あんな奴等を嵌め込むのは、この俺にとつちや、赤兒の手を捻るより容易いことさ」

と、言ひながら、雑木林の方を振り返り、アルモアーズが、一同から離れてこちらへやつて来るのに眼を止めると、

「それそれ、かう言つてゐるうちに、もうやつて来た。あの顔は、何か必死に思ひつめてゐる顔。まだ傷も充分癒つてゐない身體で、自分一身の成行きも分らないから、俺が吹つ込んで置いた通り、萬一の場合は後事を俺に託さうと決心したのだらう」

と、呟いてゐるうちに、アルモアーズは葦麻を跳ね越えながら、オビリエの傍に近寄つて来て、

「オビリエ大尉、まことに唐突ですが、實は、折入つてお願いしたいことがあります。これはわが黨の機密で、絶對他人に聞かれては困るのだから、恐れ入りますが、あそこの水際まで一緒に持つて戴けますまいか」

ロリップのオビリエ大尉は、胸の底からこみ上げて来る北夷笑みをおし隠し、殊更重々しい口調をつくりながら、

「どのやうな重大なことか知りませんが、私の出來ますことでしたら、骨が舍利になつても貫徹してお眼にかけます。では、あそこの水際へ」



これで大願成就と、躍る足を踏みしめながら、自分から先に立つて、西洋蘆の繁つた河の岸へ降りて行く。

二人は蘆の中へ蹲み込んで、三十分程の間、何かしめやかに語り合つてゐるが、間もなく肩を並べて戻つて来た。

オビリエ大尉は、包まうにも嬉しさが包み兼ねるといつた態度で、

「どうぞ、ご安心願ひます。あなたの仰言つたものは、不肖ながらこのオビリエ大尉が命にかけてお預りしました。萬一、あなたが討ち死をするやうなことがあつたら、早速それを取り出して、滞りなく焼却してしまひます」

「やつと私も安心しました。これで心置きなく働かれるといふものです。私の命などはどうなつてもかまはないが、そのために色々な人に煩累を及ぼすことが如何にも心苦しく、たゞ、それだけが私の心残りだつたのですが……」

ひそひそと語り合ひながら、一同のゐる雑木林の方へ歸つて来る。林の入口のところまでくると、

オビリエ大尉は、

「何しろ、これから十人分位の働きをしてもらはなければならぬのですから、失禮して、馬に充分に飼料をやつて來ます」

と、挨拶して、ゆるい斜面になつた方へ、そゞくさと降りて行つた。

アルモアーズはその後を見送りながら、

「われわれは、たゞ逸るばかりで、どうも沈着を缺くが、あの人は稀に見る綿密な人だ。なるほど、これから充分な働きをしなければならぬのだから、大尉にならつて馬の手入れをしておかう」

と、林の中へ入つて来て、一同にその命令を傳へ、また林の入口まで出て來ると、テレエズが後を追つて来て、アルモアーズの腕に手を掛け、さり氣なく河の岸までつれて行き、いつにない沈痛な面持で、マルセルの顔をふり仰ぎながら、

「マルセル、いよいよ最後の時が來ましたねえ」

といふ。アルモアーズは決然とした眼差でテレエズの眼を見返し、

「さう、私もさう思つてゐます。たぶん、今日が私の最後だらう」

テレエズは深く頷いて、

「オビリエ大尉が私達二人を護つてくれるはずだし、「半獅神の淵」には哨兵のゐないことがわかつてゐる。それなのに、どうしてこんな感じがひき起されるのでせう。それが不思議でたまりません。……マルセル、あたしもこれが長い別れになるやうな氣がして仕様がありません。どうしても、その氣持から遁れることが出來ませんの」



「實はね、私もさつきからそれを不思議に思つてゐるのだ。私は氣後れがしたのだらうか。そんなこととはない。私がそんな臆病者でないことはあなたもよく知つてゐるだらう。……この奇妙な氣持はあの緑色のランプを見た瞬間から始まつたやうな氣がする。……しかし、今更こんなことを言つたつて仕様がな。今度の計畫は、ルイ王の奪取に成功することもさうだが、むしろ、われわれの壯烈な意氣で全佛蘭西の反路易黨を鼓舞し刺戟することの方にもつと意義があるのだから、すくなくとも、私は死ぬことを懼れてはゐない。たゞ心残りなのは、私が死ぬと加盟書の始末が出来なくなることだ。……あなたにそれをやつてくれと頼んでも、結局無駄なこととせうから、萬一、私が死んだら、あそこから手箱を掘り出して、加盟書や往復の書全部焼却してくれるやうに、たつた今オビリエ大尉に依頼して置きました。オビリエ大尉は誠實な人だから必ず約束を果してくれるでせう」

と言つて、厳しい眼付で素早くあたりを見廻してから、

「……私は大尉を疑つてゐるわけではないが、しかし、加盟書にないあの方の名だけは口外せずに置きました。私がこのやうな大膽なことを企てたのも、偏へにあの方を愛し、祖父以來の恩顧に酬いるためだつた。……われわれが死んだ後で、あの方にさへ煩累を及ぼすことがなければ、それで露ほどの心残りもない」

アルモアーズはしつかりとテレエズの手を握り、

「あの方が、われわれ陰謀黨の盟主だつたことを知つてゐるのは、天にも地にも私とあなたの他はないのだから、もし、あなたが生き残つたとしても、この秘密だけはどうか死ぬまで守り通して下さい。……コンデ大公の名だけは……」

「よく分りましたわ。たぶん、そんなことはあるまいと思ひますけど、萬一、そんなことになつたら、死ぬまでこの秘密は守ります。お誓ひしてよ、マルセル」

「これで安心した。もう何も思ひ残すことはない」

「いよいよ、ね」

「いよいよむづかしい時が來たやうな氣がする。ひよつとするとほんたうにこれがお別れになるかも知れない」

「それは覺悟してゐますわ」

「では、最後に一度抱かせておくれ、テレエズ」

アルモアーズとテレエズは、蘆の間で堅く抱擁した。

これが、この日から三十年に亘る、陰慘悲痛な生涯の始まりにならうとは、夢にだも察することが出来なかつた。



六、渡されない覚え書  
並に、流れついた二人

オビリエ大尉は、馬に飼料をかつた後で、鞍を締め、蹄を調べ、鞞を直し、やゝ暫くの間は、念入りに乗馬の手入れをする風だったが、やがて谷へのぞむ斜面の端まで歩いて行き、あたりを見廻して人氣のないのを見さだめると、

「なんとも物騒な野郎が二人も、二六時中、附かず離れずといふ工合に俺のまはりにうろろして、絶えず俺の舉動を見張つてゐる。どこへ行つてもナアロオの眼と耳があるといふわけで、少しも氣がゆるされず鬱陶しくてたまらなかつたが、昨日、先鋒隊決死黨が「半獅神の淵」を渡るといふ諜報をやつて、充分に忠義なところを見せたものだから、それで安心したものか、「百十六號」も「六十六號」も俺の監視をやめてペロンヌを引き上げてしまつたらしい。……何しろ、うっかりしたことをするかどうかから彈丸が飛んで来て俺の頭を撃貫くか分らないやうな工合で、しよつ中肝を冷してゐるが、これでやうやく人間らしい氣持になつた」

と、ひとりブツブツ呟きながら、また馬の側へ戻つて来て、鞍の後の革囊から墨壺と驚ペンを取り出し、紙を鞍におし當て、ほのかな残陽の光を頼りに、ソ、クサと手紙を書きかけたが、何を思つ

たか、急にペンをとめ、

「おつと待つた。いまこの手紙で手箱の在所をナアロオの奴に知らせてしまふと、あゝ、よくやつたと一言褒められたゞけで軽く突つ放されても文句は言へない。三十萬リヴルと引き替へでなければ、なかなかこの在所は教へられない。そればかりではない。色々考へ合せると、この加盟書には、皇族とか王族とかいつたやうな意外な連中が署名してゐるらしい。政府としてみれば、何百萬リヴルにも代へ難い品。それをたつた三十萬リヴルで捲き上げようといふのは少々押しが太い。持ち込むところへ持ち込んだら、自分の首にかゝはることだから、三十萬リヴルの十倍、百倍、ことによつたら千倍と吹つ掛けても、否應なしに買ひ取るだらう」

と、言つて、遽かに顔を笑み崩し、どつかりと草の上に尻を下して、  
「これやアどうも、えらいことになつたぞ。安く踏んでも百萬リヴル。……いや、どうしてなかなか。ざつとしたところで、五百萬リヴル、うまく行けば千萬リヴルは動かないところ。これだけの金があれば榮耀榮華はしたい放題。假りに、毎月一萬リヴルづつ使つたとしても、ざつと八十三年。……ところが、どうしてどうして、そんなもんぢやない。五分に廻るとして、利子だけでもざつと一年に五十萬リヴル。月に割つて四萬リヴル。湯水のやうに使つてみたつて、俺の一生にはとても使ひ切れやしない」



と、酔つたやうになつて宙に眼を据ゑてゐるが、突然、バラリと腕を振り解き、  
 「これほどの値打のある寶物を、一年の利子にも足りない三十萬リヴルなんぞで渡せるもんか。お  
 まけに、こいつをナアロオに知らせたとなると、まるまるあいつの手柄になり、こつちはたゞ口裏を  
 ひいてうまく聞き出したといふだけの功勞。さつきも言つたやうに、御苦勞だつたの一言で、千か二  
 千の眼腐れ金で追つ拂はれたつて文句は言へない。こいつア、うつかり渡されぬぞ」  
 二行ばかり書きかけた手紙を細かく引き裂いて土に埋め、靴で充分踏んでおいて、また腕を組み、  
 「さうなると、邪魔なのはアルモアーズとテレエズ。ナアロオの命令では、出来るなら馬を撃つて  
 一人でも多く生擒らうといふ方寸らしいが、あの二人に生きてゐられちゃ、大きにこつちに不都合。  
 『半獅神の淵』を渡るころには、どうせトップブリ暮れるだらうから、闇に紛れて、後から短銃で撃  
 ち殺しまはう。それに限る、それに限る」  
 と、聞く者もない氣安さで、あたりを憚らぬ高聲。一人で受け答へしてゐる時、林に續く斜面の上  
 の方に人の聲音がするので、ギョツとして急に口を噤み、周章て、馬の側へ進み、馬の脊を掻き掻き  
 甲斐甲斐しく手入れする眞似をしてゐるところへ、斜面の上の方へ姿を現したのがアルモアーズ。急  
 ぎ足で近寄つて来て、  
 「オビリエ大尉、用意がよろしかつたら、そろそろ出發しませう。夕食の交替時間までに渡河點まで

行つてゐないとならぬわけですから。……一同の方はもう準備が整つていつでも出發出来るやうにな  
 つてをります」  
 オビリエ大尉は頷いて、  
 「私の方も、もうとづくに準備が出来てをります。では、いよいよ進發するとしませう。……かねて  
 の手筈通り、私が殿につきますから、あなたはどうか先頭に立つて……」  
 「承知しました」  
 「さうとなつたら、少しも早く……」  
 オビリエ大尉は馬を曳きながらアルモアーズの先に立つて、凜々しい足取りで斜面を上つて行く。  
 二人の姿が林續きの中へ隠れてしまつたと思ふと、今までオビリエ大尉が馬を繋いでゐた樹の  
 梢が、風もないのにサヤサヤと動き、こんもりとした葉繁みを分け、幹を傳つてスルスルと降り立つ  
 て來たのは「百十六號」と呼ばれた、眼のキヨロリとした、淺黒い例の密偵。地面に膝をついて、つ  
 い今し方オビリエ大尉が埋めたところを素早く掘り返し、細かちぎつた紙片をひと片づつ丁寧に拾  
 ひ集めて紙入にをさめると、斜面づたひに谷間の方へ降りて行つた。  
 先鋒隊の一同は雜木林の入口で勢捕ひをし、テレエズを兩側からおし包むやうにして二列縱隊をつ  
 くり、ペロンヌの河に沿つた嶮道を肅々と進み始めた。



行くほどもなく、日はとつぷりと暮れ、空には星の影もないのでたゞ一面の闇。片側は崖、片側は切り立つたやうな絶壁。まれに獵師が通るほか、絶えて人通りもないところ。道といつても、崖の上から河の中へ落ち込んでしまふ。危いことは譬へやうもない。まして炬火の類は一切使はれぬのだから、互ひに低く呼應しながら、手探りするやうにして進んで行くほかはない。

そのあたりが峠だつたとみえ、そこから追々下りになり、道も少しひらけて、河に沿つて道は迂りうねる。一時間ほどの後、やうやく「半獅神の淵」の岸に着いた。

兩岸は、こゝで急に狭まり、流れは矢を射るやうに急になつて、河の中で鋭い齒を剝く大岩にせかれて百雷が一時に落ちかゝるやうなすさまじい音を立ててゐる。淵といつても、谷川のことだから、馬の脊が届かぬほど深くはないが、岸をも押し流すほどの急流が、白い泡を噴いて岩を噛み、その物妻さは言はうやうもない。

一同は勢にのまれて惘然とし佇んでゐると、アルモアーズは聲を上げまし、

「流れは急だといつても、向ふ岸までは僅か一町足らず、死力を盡して泳いだら、渡れぬことはない。私とアリが先頭になつて行くから、どうか諸君も續いてくれ給へ」

と言ひ放つと、アリ・ベールと響を並べてザンプと流れに馬を入れ、急流に逆ひながら、必死の勢ひ

で馬を進めて行く。オビリエ大尉は大聲をあげ、

「隊長に遅れてはならん。進め、進め」

と、號令を掛けると、一同もこれに勵まされ、テレエズを底ひながら、ザアン、ザアンと流れに馬を乗り入れる。

オビリエ大尉は闇の岸に立つて、一同の様子を眺めてゐたが、悠々と下手へ廻り、流れに馬を浮かせ、五間ほど間をおいてゆるゆると一同の殿について行く。

一同は泡立つ激流に身を揉まれながら、凡そ半分ほどしてやうやく難所を過ぎたので、同勢一塊になつて向ふの岸に押し渡らうとする時、アルモアーズは七八間ほど先を渡つて、早くも岸に馬を乗り上げ、一同の方へ向つて片手を上げながら、

「さア、諸君、もう少しの奮發だ。頑張れ、頑張れ」

と、大聲で勵ます。

その聲の終らぬうちに、岸の小高い堤の蔭から、突然眼も眩むばかりの光が射したと思ふと、忽ち轟く一斉射撃。

アルモアーズは眞つ向を射たれて、

「残念！」



と、叫びながら馬から逆落しになり、ザンブリと水の中へ落ち込む。

一同は、

「伏勢があるぞッ、後へ引つ返せ」

と、叫び合ひながら、急に馬首を返して、もとの岸へ渡り歸らうとする時、岸の堤の蔭でドッと上る笑ひ。

「大將を落したから、今度は雑兵の方だ。一人づつゆつくり狙ひ撃ちに撃ち落せ。なアに急ぐことはない。どうせ急に戻れやしないのだから、籠の中の鳥を撃つよりも容易い。一人落せば五十法の賞金。こんな甘い話はなからう」

「ちや、俺が一番にゆくぞ、……ソレ俺の腕前を見てをれ」

「なアに、手前の腕前なら知れたもんだ。雀も撃てない手並だもの。大したことはあるめえ」

などと残酷な冗談口を叩きながら、流の途中に揉み合ふ一同を、無情にも、一人づつ狙ひ撃ちに撃ち落す。

テレエズは、さすがに女の身で、追々に押し流され、一同から二十間ばかりの下手を泳ぎ渡つてゐたが、アルモアーズが馬から逆落しになり、河下へ流れて行くのを見ると、

「コフスキー……ア……マールセルを……マールセルを……」

と、狂氣のやうに叫びながら、岩根も流れもかまはず跳ね越えて、アルモアーズが流れて行く方へ進んで行くうち、飛んで来た一弾が馬の横腹に當つたので、アッといふ間もなく、馬と一緒に横倒しになり、たちまち十間ばかり押し流される。

水はさほど深いといふのではなく、漸く乳のあたりに届くほどだが、何しろ三月の末で、雪解けの水の冷さはまるで氷のやう。手も足も凍えて思ふやうに動かさず、流れに押されてまた七八間を押し流されるうち、ふと何か手に觸れるものがあるので、最後の力をふり絞つて必死にそれに獅噛みつく。それは堤の崩れたところから、河の中へ横倒しになつた大きな朽木の枝で、テレエズが縋りつくと同時に、その重みと水の勢ひで、自然にテレエズの身體を岸の方へ引き寄せた。

テレエズはどういふ次第でかういふ始末になつたか見極める暇もなかつたが、見ると、岸はすぐ一間ほど前にあるので、夢中で蘆の繁みの中に這ひ上つたが、寒さにはげしくて手足も千切れるかと思はれるばかり。骨の髄までキシキシと痛み、精魂盡きて蘆の根元に倒れたまゝ氣を失つてしまつた。それから、どれほど経つたか。ふと我に返ると、寒さは以前の通り、齒の根も合はぬ程だが、氣を失つてゐるうちに、いさゝか精氣を取り戻したとみえ、どうやら歩かれさうなので、蘆の中に立ち、河上の方を眺めやると、すでに殺戮は終つたとみえ、あたりはひっそりとしづまりかへり、黒々の闇の中に流れの音が轟くばかり。わづか幾時間か前に、こゝで砲聲が轟き、屠殺の修羅場を現出したとは



どうしても思はれない。あの無慚な出来事は、實は、夢ではなかつたか、とさういふ氣もされるのだが、口惜しい哉それが事實であつた證據には、全身岩根で擦つた擦り傷で蔽はれてゐる。卑怯な闇の一齊射撃に、馬から逆落しになつたマルセルが、激しい流れに揉まれながら河下の方へ流れ去つてしまつた、あの譬へやうもない無念な有様もマザマザと眼の底に甦つてくる。この様子ではコフスキー、アリを初め、オピリエ大尉にいたるまで、哀れ十四人の命は「半獅神の淵」の藻屑と消え去つてしまつたに相違なく、生き残るとも思はなかつた自分だけがたゞ一人、この闇の岸に残されたと思ふと、言ひやうのない口惜しさが胸にこみ上げて来る。

ルイ王の侍従として今を時めく、婚約者のカスタニヤリイ侯爵を振り捨て、巴里に潜伏しゐるアルモアーズの後を追つてロオレンヌ州を出てから、今日まで三年の間、和蘭や白耳義と、心細い旅の空で、筆紙に盡されぬ苦勞をして來たが、それといふのも、たゞの一度の素振りにも表はしたことの無い、マルセルへの遺頼ない愛情のせるであつた。

そのマルセルは、もう死んでしまつた。露ほども自分の心を悟らずに、永劫に會へないところへ行つてしまつた。マルセルに對する秘かな愛情は死ぬまで口には出さまいと心に誓つてゐたのだが、いよいよ死なれてみると、せめて、たつた一度だけでも、自分の愛をうちあけて置きたかつた。いづれ冷酷な死が二人の仲を引き裂くであらうことは、初めから覺悟してゐたのだから、その方は左程心を

悲しませはしないが、この想ひだけが遺瀨なかつた。

追々、夜が更けるにつれ、河から吹き上げる風は濡れしほれた衣服を透し、ぢかに骨に感じるほどで、いつ迄もこんなことをしてゐたら凍え死ぬほかはないから、せめて歩き出しでもしたらすこしは暖くなるだらうと思ひ、河岸に細く續く道の方へと歩み入らうとする時、五間ばかり河上の水の中から、そろそろと岸に這ひ上つて來る黒い人影がある。

要塞の哨兵なら河からなど上つて來るはずはなく、とすれば、いづれ同志十四人のうちの一人に相違ないので、テレエズは胸を轟かせながら蘆の間からジツとその方を窺つてゐると、小山のやうな巨漢は、流れの中から上つて、岸の岩に腰を下し、

「敵の眼を眩まさうと思つて、流の中を這ひずり廻つてやうやく切り抜けて來たが、炬火の光も見えないところをみると、諦めて引き上げて行つたのだらう。水を潜るのはさして不得手ではないが、何しろこの冷さでは身體が痺れ上るかと思つた」

服の裾を絞りながら、ひとり呟くのを聞くと、まさしく下僕のコフスキーの聲に相違ないので、テレエズは嬉しさの餘り、夢中になつて蘆の間から駆け出し、押し殺した聲で、

「コフスキー」

と、呼び掛けると、コフスキーは振り返りざま岩の上から躍り立つて、



「おう、これは、テレエズさま。あなたは生きておいでになつたか。あゝ。有難い、有難い、こんな嬉しいことはない」

と、河原に跪いて涙を流さんばかりに喜ぶ。テレエズの方も、夢かと思ふほどに嬉しく、また、

「コフスキー」

と、言つたまゝ、言葉も續かない程だつた。

テレエズは木の枝に縋つて岸まで這ひ上り、今まで氣を失つてゐたまでのことを手短に話をし、

「あとの十三人はどうなつた」

と、たづねると、コフスキーは、無念遣る方ないといつた顔付で、

「残念ですが、一人残らず撃ち殺されてしまいました」

「では、アリ・ペーやオビリエ大尉までも」

「左様でございます。……御承知の通り、私の馬はクスノアで買ひ入れた百姓馬ですが、水をこはがる奴とみえ、河に乗り入れたと思ふと、ひどく怯えてぐるぐる廻るばかり。血の出るほど鞭を當ても、進むどころか後へばかり退る。さうかうしてゐるうち、殿についていらしたオビリエ大尉までがわしの側をすり抜けて前へ進んで行かれる。これでは埒があかぬと思ひ、思ひ切つて馬を捨てて河の岩傳ひ、深いところは泳ぎ渡つて段々河の中程まで行くと、突然、岸の向ふから炬火をかざし、俄

に撃ち出す鐵砲。これはと、岩根に掴まつて眼を据ゑてゐると、あのやうな無慚な有様。……さうするうちにアリの聲で、返せ、返せ、と叫ぶのが聞えましたが、行くだけでもやつとだのに、何しろこの急な流れ、互ひに馬を打ちつけ合つて揉み合つてゐるうち、次々に狙ひ撃たれ、河の上には一人の人影もなくなり、最後にはたうとうオビリエ大尉まで筋斗うつて河の中へ落ち、私の七八間前を俯伏せになつて流されて行きました」

「オビリエ大尉まで」

コフスキーは頷いて、

「はい。……實は、ちと思ふ仔細あつて、何とかしてオビリエ大尉の死體をと思ひ、急いでその方へ追ひ掛けてみましたが、流れの早いのと暗いので思ふやうにゆかず、みすみすすこし先を流れるのを、どうすることも出来ない。あんな残念なことはありませんでした」

「それにしても、あれからだいぶ時が経つてゐるが、その間お前はどこにゐたの」

コフスキーは膝を進め、

「さて、岩根に掴まつて私がつくづく考へるところ、哨兵がをらぬ筈のこの場所に手厳しい伏勢があるといふのは、たしかに身方の中に敵に内通した者があつた證據。しかし、オビリエ大尉を除くわれわれ十四人は、この三年以來、共に肝膽を砕き合つた誠實な人ばかり。そのなかに内通者があらうと



はどうしても考へられませんか。……ところで、オビリエ大尉の方は、われわれと行動を共にするやうになつてから僅かたつた一月半。紹介状をつけたボーデン男爵その人にしてからが、今にして考へれば少し腑に落ちぬところがある。巴里進發の間際になつて遽かに發病したといふが、誰もそれを確かめた者はない。……かういふ風に色々思ひ合せますと、オビリエ大尉の身上には色々腑に落ちぬ點がある。道々も、馬に水を飼ふといつては列を外れ、半刻ばかりして追ひついて來たり、忍んで行かねばならん場合に高聲で歌を唄つたりする。その歌の文句も、時々は一言も通じぬ外國の言葉。殊に今夜などの場合、渡河を指揮する大將が殿につくなどといふことはない。そればかりか、私が見てをりますと、一同からもの甘間も河下のところをゆるゆると馬をやり、進むと見せて實は立ち停り、殊更に暇をとつてゐる。また、落馬した當時の様子もすこぶる不審で、彈の音が聞えると、さながら待ち兼ねてゐたやうに自分から落ちた如くにも見えます。……その時は咄嗟の場合で、かうまで細かくは考へませんでした。如何にもその素振りが怪しいから、ひつ捕へて泥を吐かせようと、懸命になりましたが、今いつたやうなわけで、たうとう捕へることが出来ませんでした」

「あれほどまでに信用してゐられたのですから、そのお疑ひはご尤もですが、實はまだ後がございませぬ。……さて、口惜しくなりません、今更どうすることも出来ませんので、流れに逆らつてそう

そうに岸へ登り、蘆の根方へ身をひそめてゐますと、それから一時間ほど経つてから、岸の蘆の繁みの向ふ側を、五人ばかりの兵士が口々に何か言ひながら河下の方から上つて參ります。それを綴り合せますと、士官の服を着てゐた二人のうち、一人は彈に中つて河へ落ち、死骸はまだ上らないが、一人の方は手傷を負つて岸に流れついて氣を失つてゐるのを、つい今し方見付け出して、繩を掛けて鎮臺へ運んで行つたといふやうなことを申してをります。……申し上げるまでもなく、我々先鋒隊十五人のうちで、士官服を着てゐるのは旦那さまとオビリエ大尉の二人だけ。それがくゝられて要塞へ連れて行かれたとあれば、間諜か内通者かと思つたのは私の通り。たとひ暫くの間でもそんな風にお疑ひ申したのは申し譯のないことだと思つてをりますと、また岸の方で聲があつて、「さうかさうか、それが首領のアルモアーズといふ奴か、ナアロオ密偵長の腹心のオビリエ大尉といふ奴かどちらか知らないが、士官の服を着た奴だつたらかまはず嚴重にひつ括れといふ命令なんだから、それは随分うまくやつた」と、こんなことを言つてをります。矢張りさうであつたのか。こちらの油断もあつたといへ、われわれの朴訥をいふことにしてうまうまといふと、旦那さまを始めわれわれ一同をこんな無慚な目に遭はしたかと思ふと、口惜しさで胸が張り裂けるばかり。岩を掻き捲つて呻いてをりますうちに、士官らしい人間は岸の兵士を取りまとめ、要塞の方へ歸つて行つてしまひました』

と、言つて言葉を切り、



『今もお聞きになった通り、士官の服を着た男を一人、手傷のまゝ要塞へ連れて行つたといふ話。ここで一息入れましたら、何とかして要塞へ忍び込み、それが旦那さまなのかオビリエ大尉なのか、是非でも見究めなければならんと決心をしてゐたところでした』

テレエズはまだ疑ひのとけぬ顔で、

『繩を掛けて連れて行つたといふなら、それはもうマルセルに決つたやうなものではないかしら。話の通り、オビリエ大尉がナアロオの腹心だつたのなら、何も繩など掛けるに及ばないことだもの』

コフスキーは首を振り、

『使ふだけ使つて後は邪魔だとなれば、殺してしまふか、バスチーユへ投げ込むかするのがナアロオのいつものやり方。現に、どちらでも關はぬから嚴重に繩を掛けてしまへといふ命令だつたといふのが、何よりの證據でございます』

テレエズは初めて納得して、

『なるほど、さういふわけなら、お前の言ふ通りに、これから要塞へ行つてどちらか見究め、もし、マルセルだつたら、何とかして救ひ出す方法を講じなくてはなりません。さういふうちにも夜が明けたら、とても忍び込むことなど出来ないから、東の白まないうちに要塞まで辿り着かなくては』

と、立ちかゝるのを、コフスキーは狼狽して引き止め、

『飛んでもない。ペロンヌといへば、巴里の北の固めのうちでも名代の堅固な要塞。兵隊の數も多く見張りも嚴重ですから、とてもあなたが忍び込むなどといふわけには参りません。……何しろ、敵にとつては掛け替へのない重大な犯人。こんな邊鄙な要塞などで取調べるはずはなく、必ず近いうちに巴里に護送されるにきまつてゐますから、もしそれが旦那さまならば、取り返す機會はいくらでもありませうから、見究める方はどうかこのコフスキーにお任せなすつて下さい』

と、熱心に事をわけたが、テレエズは頭を振つて、

『いゝえ、それはいけません。どつちみち、あたしの命はマルセルと一緒に捨てるといふことに、巴里へ進發する時から決つてゐる。同志の人達がみな撃ち殺されて、あたし一人が生き残つたのをどんなにか辛く思つてゐるのに、捕へられたのがマルセルかオビリエ大尉かどちらか見究めようといふ大事な時に、お前一人をやつて、あたしが闇の中につくばつてゐられやうわけがない。どちらであらうとわたしの正眼で見るのでなければ、あたしの心は納得しません。餘計なことを言つてゐるに、今から直ぐ駆けつけませう』

コフスキーは膝に手をおいて思案にくれてゐたが、やがて急に面を上げ、

『なるほど、あなたのご氣象としては、さう仰言るのは尤も、ご自分の眼で確かに見究めるまでは承知出来ないと言はれるのも如何にもご道理。では、お言葉に従つてお伴ませう。萬一の場合は、



私の一命を捨て、必すあなたさまだけはお落し申します。もし、それが旦那さまでありましたら、私の亡い後は、ソアツソン伯爵夫人やアントアンヌの家内のラ・ヴォアザンなどの力を借り、是非とも旦那さまをお救ひなすつて下さい。さうと決つたら時が惜しい。さア、これから直ぐに」

コフスキーはテレエズの先に立つて、道しるべをしながら河岸の細道傳ひ、河下に見える一點の常夜燈を頼りに急いで行く。

七、釣臺の上の假面男  
並に、要塞諸共の焚刑

二時間餘りも歩くと、行く手の闇の中に、高々と聳える要塞の胸壁が見え出して来た。もとフオントネ伯爵の古城をそのまゝ要塞にしたもので、城壁の上には矢狭間があり、城塞の周囲には深い濠を繞らしてゐる。城の四隅には高い物見櫓があつて、剣を持った四五人の哨兵が厳しく巡視してゐる。どこからといつて入り込めるやうな隙もない。

二人は濠の岸の土手の後に身を隠し、さまざまに考へ廻らしてゐるうち、ふと翻轉橋の傍を見ると、要塞に運ばれる食料と見え、野菜や鷺鳥の籠、鶏卵などを山ほどに積んだ大きな馬車が停つてゐる。城門の開くのを待ちかねたか、二人の農夫體の男が馭者臺の上で居睡りをしてゐる。

コフスキーはテレエズの耳に口をあて、

「あの馬車は要塞へ入るのに違ひありませんから、あの中へ藻繰り込んでゐたら、見とがめられずに城門の哨所を通れるかも知れません。萬一見とがめられたらその時はその時、どうなるものか、ひとつ思ひきつてやつて見せませう」

テレエズを後にかばひながら、土手の裾の闇だまりを傳つて蟲の這ふやうにそろそろと馬車の後尾に忍び寄り、覆布を捲つてテレエズを鶏卵の籠の隙間へ押し込んで置き、續いて自分にもじり上り、頭からスッポリと覆布をかぶり、息をひそめてゐると、それから一時間も経つたかと思はれる頃、胸壁の物見櫓の上で唳々と吹き鳴らす號音喇叭。

それが開門の合圖であつたとみえ、ガラガラと鎖の音がして、すさまじい地響をうたせながら翻轉橋が降される。城門の方から何やら叫び交す兵士らの聲が聞えはじめ、覆布の隙間から夜明け眞近い朝の光がほの白く流れ込んで来る。ほどなく馬車が引き込まれると思つてゐると、

「さア、門が開いた。行くとするか」

「やれやれ、勤めとはいひながら、どうも眠くてかなはねえ」

と、欠伸まじりの洞間聲で呟き交しながら、馬にひと鞭。野菜車は砂利に轍を軋ませながら城門の方へ走り出す。



テレエズとコフスキーは、さすがに安い心地もないうち、馬車は轟くやうな音を立て、翻轉橋を渡り終へ、いよいよ城門へ差しかゝる。こゝが命の瀬戸際と、身體を堅くしてゐると、案ずるより生むは安く、馭者は城門の番兵と二言三言冗談口を交しながら、そのまゝ營庭の中へ走り込み、石疊の上をしばらく驅けたのち、突然馬車が降り、二人の馭者は御者臺から下りて、何か聲高に語り合ひながら近くの建物の中へ入つて行つた。

もう白々と明け始め、人の姿もはつきりと見わけられる。今のうちに馬車から逃げ出さなくてはならないと、覆布の隙間から周囲を見廻すと、そこは營庭の奥の水飼場で、その左手に炊事場らしい平家建の建物がある。幸ひ人影らしいものも見えないから、コフスキーはテレエズを馬車から抱へ降すと、腕に抱いたまゝ後先もかまはず、むさんに炊事場の横手の暗溜の中へ走り込み、ホッと一息を吐いて冷汗を拭ひ、

『やうやく危いところは切り抜けましたが、これからが大變。何しろ、廣い要塞のことで、どの建物の中に囚はれてゐるのか、とんと見當が付きません。どこか風抜穴のやうなものがあつたら、そこを破つて忍び込み、盲探しに探さなければなりません。何にせよ、警戒嚴重な要塞の中へ這ひすり込んで来て、そこで擒囚を探さうなどゝいふのは餘程無謀な話。急いで事は破る。少くとも二三日はかゝるものと思はなくてはなりません』

と、嘯きながら、そこから伸び上つて營庭の中を見渡すと、はるか向ふ端に城門の方へ抜ける暗道の口が見え、營庭を三方から圍むやうにして、それぞれ時代のちがふさまさまな建物が建つてゐる。そのうちに、煉瓦作りの天主塔のついた際立つて莊重なひと構へがあり、二階の窓が一箇處だけ明々と灯がついてゐる。

あそこまで出かけて行つたら何か手が、りがあるかも知れぬと、炊事場の裏手を廻つてその方へ這ひ寄つて行くと、入口の櫺の大扉は開け放され、哨兵らしいものもあるやうすがないので、そろそろと建物の中へ入りこんで見ると、そこは天井の高い廣間になつてゐて、その取付きに大きな親柱を持つた階段が見える。こゝまで来たならもう後へは退けない。手を引き合ひ、雲を踏むやうな足どりで一段々登音を忍ばせながら踏み上つて行く。

上りきつたところは長い廊下で、奥まつた方の部屋から、何か聲高に言ひ合ふ人聲が聞えて來るの書かれた札が打ちつけられてある。で、誘ひ寄せられるやうにそちらへ近づいて行つて、扉の上を見ると、欄間のところに「要塞長」と

思ひもかけぬ俸せを、心の中で喜び合ひながら、話聲に耳を澄ますと、内部の一人は、極く沈んだ陰氣な聲で、

『おい、要塞長。いやさ、サンマルス。貴様がほざくことはそれだけか。さうならさうとはつきり言



つてみる』

と、絡みつくやうに言ひ掛けると、よく響く別な聲で、

『さうです。萬事私が自分で指揮してやつたのに相違ありません』

『貴様が、ちきちきに指揮をしてナ』

『それは、今申し上げました』

『よし、よくわかつた。つまり、先鋒隊の一同を擧殺しにして、死體は河へ投げ込んだといふのだな』

『さやう』

『死體は一體幾つあつた』

『數へるほどのことはありません。あのほかに一人として生き残つたものはないのですから』

『やかましい。貴様の辯解などを訊いてるのぢやない。幾つあつたと訊いてるのだ。こつちの訊いたことに返事をすればそれでいゝのだ』

『格別數へもしませんでした。二十位はありましたらう』

先の聲は、毒々しい含み笑ひをまぜながら、

『ほ、う、不思議なこともあるものだな。……先鋒隊は十五人しかゐらないのだけ。そのうち一人は手

傷のまゝで生擣つた。それで死體が二十もあつたといふのはどういふわけなんだらう。眼が霞んで物が二つに見えたのか。それとも、例の通り喰ひ酔つてよぼけてゐるたのか。他のことならいざ知らず、これほどの大事件をそんな輕卒に取扱つたのでは、どつちみち貴様の首はこのまゝ繋つてはゐないぞ』

要塞長と呼ばれた方の聲は急に頭へを帯び、

『あなたのやうに、さう頭ごなしに仰言つても、……何しろ、二十位と思ふほどですから、十五は確かにあつたはず。……數はともかく、一人残らず殺したことは間違ひがないですから……』

先の聲は、突然、

『馬鹿ッ』

と、叫ぶと、拳で力まかせに卓を叩き、

『氣狂ひ！ 阿呆！ 役立たず！……誰が擧殺しにしろと言つた。馬を撃つて、一人残らず生擣りにしろと書いてよこしたぢやないか。貴様、あの命令書をなんと讀んだ』

要塞長はしどろもどろに舌を縛らせながら、

『はい、……いや、それは、よく心得てをりましたが、……何しろどうも、星の光もない闇の夜で、それに、しかも、急な場合でもあり、こちらは、せいぜい馬を狙つたつもりですが、流れの早い河の



中で揉み合つてゐることですから、さう思ふやうにはゆかず、……』

と、くどくどと言ひかけるのを、先の聲は、激しく遮つて、

『闇夜は夕方から知れてゐる。それならそのやうに、なぜ早くからその手筈をしておかんのだ』

『私として、なんでそこに抜かりのありますものか。昨日の朝から土手の後に大きな差掛を作り、上に土を掛けて芝を植ゑ、差掛の中の炬火の光が絶対に敵から見えぬやうにして待つてゐたのです。』

『それからどうした』

『河の岸に馬の嘶きと人聲が聞え始めましたから、咄嗟に差掛を打ち壊して、河の中を照しかけました。その時、敵はまだ河の中程にをりましたので充分に光が届かず……』

『だから痴だと言ふのだわ。なぜ充分に岸に引き寄せてから照しつけなかつたのだ。貴様のだらしないのことは巴里までも響いてゐるが、よもや、これ程までとは思はなかつた』

ペロンヌといへば、佛蘭西の一等要塞。その要塞を頭ごなしに叱りつけるのは、いつたいどんな男だらうと思ひ、テレエズが銃穴に眼をあて、覗いてみると、胡麻鹽頭の軍服の男と向き合つて突つ立つてゐるのは、ひと目見たら死ぬまで忘れないだらう、ブリュッセルの旅籠屋でイスナール男爵と連れ立つてゐた、死人のやうな、なんともいへぬ無氣味な顔をしたあの陰氣な男だつた。

して見ると、あの時も、また今度の闇討ちも、みなこの男が仕組んだことだつたのだらう。ど、す

ると、この男こそは、「人非人」と綽名される、あの陰險なナアロオ密偵長に相違ない。

テレエズは我ともなく、ゾツと背を慄はせながら覗いてゐると、要塞長は深く垂れてゐた首をそろそろともたげ、

『密偵長、あなたの仰言り方は、それは、餘りに酷といふものです。……副官さへ一言も今度の事情はあかさず、しかも、敵の方は一人残らず撃ち殺してしまつたのですから、先鋒隊の十五人が「半獅神の淵」で全滅してしまつたといふことは、私のほかに誰一人知つてゐる者もありません。進發したはずの先鋒隊が行方不明になつてしまつたといふことになれば、ひと月ふた月と経つうちに、今か今かと待つてゐる反路易黨の氣勢も挫け、王位轉覆の陰謀などは、いつの間にかウヤマヤになつてしまふに決つてゐます』

ナアロオ密偵長は、またしても卓を叩き立て、

『やかましい。何をつべこべと……。いよいよ以て馬鹿氣たやつだ。反路易黨の氣勢がどうしたと？ なんてあらうと、鑿殺しにするつもりなら、何も貴様などの手を煩はす必要はない。われわれ秘密警察の手でもつと雑作なくやつつけてしまふわ。手数をかけてこゝへおびき寄せたゆゑんは、一人残らず生擒りにして相連拷問にかけ、陰謀黨に加盟してゐる貴族王侯の名を一人残らず吐かせようためだつたのだ。どうだ、やうやく納得がいつたか』



要塞長は、うらめしさうな聲で、

『さう仰言いますが、よく事情に通じた奴を一人生擒にしたことですから、たいしてその方の不都合はありませんまい』

『うるさい？ 一人ぐらゐるでは役に立たぬ。相連拷問をすゑたためにテレエズ・ヴァンダムといふ娘を是非とも生擒りにしなければならなかつたのだ。……貴様のために政府は莫大な損失をした。後々のこともあるから、貴様のやうな奴に、この大事な要塞は任して置くわけにはゆかぬ。懲罰として、名もない堡塞へ突落してやるからさう思つてゐろ』

このひと言を聞くと、要塞長はあわて、椅子から下り落ち、見栄も張りもなく床の上に兩膝をつき胸の上に手を組み合せて、

『密偵長、……それは、……あなた、あんまり……。なにとぞ、特別の御慈悲を……。この年齢でそんな邊鄙なところへ追ひやられましては、もう二度とこんな地位に昇ることは出来ません……。……何卒、幼い私の二人の娘に免じて、特別の御憐愍、……特別の御慈悲……。』

と、狂したやうに膝でにじり寄り、両手でナアロオの脚を抱きながら涙交りに掻き口説くと、ナアロオは情け容赦もなく、それを靴で突き放し、

『なアに、さうクヨクヨするには及ばないさ。保養がてらに、邊鄙なところでもうひと辛抱して来る

サ。そこで何か手柄を立てたら、また、こゝの要塞長にしてやらう』

床に額を押しつけて涙にくれてゐる要塞長を、突つ立つたまゝ冷々と見おろしながら、

『おい、サンマルス。望があるなら、言つて見ろ。……聖マルグリートのあの離れ小島か？ それともチュランのピニユロール要塞か？ どちらも佛蘭西のとつ端れだが、聖マルグリート島では、貴様にはまだ格がよすぎる。アルプスの、あの岩山ばかりのピニユロールの方が至當だ。……さうだ、さうだ。ピニユロールがいゝ。……いま、仕事が一區切りついたら、この卓で辭令書を書いてやるから、有難く待つてゐろ。……何だ、何だ。何が悲しくて泣く。小皺の間を涙が傳ひ落ちるところなんざア、二た眼と見られた態ぢやない。……本來なら、バスチーユの地下牢へでも投げ込んでやる場所なんだが、お慈悲を以てピニユロールで勘辨してやらうといふのだ。……おい、不服か。不服なら不服といつて見ろ。俺にも考へがあるから』

要塞長はあわて、身を起し、

『あなた、……あなた、……ナアロオ密偵長……。……なんで不服など申しますものか。この度のことは、なるほど私の落度でありましたから、懲罰を受けますのは當り前。ピニユロールへ行けいと仰言るのでしたら、喜んで御命令に従ひます。……はい、その代り、……どうぞ、わたくしのことを御記憶の端に止め置かれまして、いつかの時、また世へお出しくださいますやう。……切に、御憐愍をお願い



いたします」

ナアロオは空嘯いて、

『くどく言ふには及ばない。このナアロオは情知らずだと思つてゐるらしいが、それは大變な見當違ひだ。貴様が手柄を現しさへすれば、バスチーユの典獄にでも取り立ててやる』

要塞長は、ワツと聲を上げて泣き出し、

『…あの、バスチーユ!…あの、巴里の大バスチーユの典獄!…そ、それは、本當のことで』  
『あゝ、本當だ。誰が嘘など言ふものが。まア、それを樂しみにして、せいぜい辛抱するがよい。…おゝ、もう、すっかり夜が明けてしまつた。下らないことで大分暇どつた。…おい、サンマルス。これから「鐵假面」の取調べをするから、早く行つてこゝへ引きずつて來い』

『はい、はい』

と、要塞長は奴隸のやうに腰を屈めながら、急ぎ足で扉の方へやつて來る。

二人は驚いてあわてゝ身を隠さうとしたが、一眼で見渡せる長い廊下の中程のところ、咄嗟に身を隠すところもない。切羽つまつて、隣り合つた扉の把手に手を掛けてみると、これがすつと開く。何も考へる暇もなく、一と足で飛び込んで扉を閉め、やうやく、ホツと息をついた。

そこは、書類の置場と見え、壁の三方に大きな書類棚があり、紐で括られた古文書や反古が天井の

近くまで積み上げられてゐる。久しく閉められたまゝだつたとみえて、微臭い、濕つた臭ひが立ち罩めてゐて息もつかれぬほどだが、隣の部屋へ續く扉には、直径一寸ほどの換氣孔が三つほど開けられてあるので、鍵穴よりは自由に隣の部屋の様子が覗かれるから、むしろこの方が仕合せと、換氣孔に眼を押しつけて息を凝らしてゐると、それから十分ばかり経つた後、廊下の端の方から三四人の重さうな蹙音が聞えて來た。生擒りにされたのは一人だといふことだから、多分護衛の兵でもついて來たのだらうと思つてゐると、蹙音は二人のゐる部屋の前を通り過ぎ、隣の部屋の扉を開け、それでやうやく二人の視界の中へ入つて來た。見ると、それは釣臺に乗せられた、人の身丈ほどの大きさのものが、頭から爪先までスツボリ白い覆布で蔽はれてゐるので、何であると言ひ定めることも出來ない。

そのうちに、二人の兵士は釣臺を置いて出て行つた。

ナアロオはその側に立つて、腕組みをしたまゝ長い間チロチロと見おろしてゐるが、やがて釣臺に近寄り、そろそろと覆布を剥ぎかけるやうすだから、今こそと、瞳を凝らして眺めてゐるが、釣臺のこちら側にナアロオと要塞長が衝突のやうになつて立つてゐるので、顔はおろか胴體さへ見定めることが出來ない。もどかしく氣を苛立たせてゐるうち、ナアロオは口を開き、

『傷は腰のあたりを擦つたゞけだから、一週間も経つたら癒つてしまふだらう。…それはさうと、これを見ろ。この假面はいかにもよく出來てゐるぢやないか。…この蝶番を合せる二つの鍵は、佛



蘭西一の鑄掛屋に特別に作らせ、鑄型はすぐ壊してしまつたから、歐羅巴廣しと雖も斷じて同じ鍵はない。……その鍵もサ、先程、俺が人の氣がつかぬやうなところへ捨て、しまつたから、どんなことをしてもこの假面を脱がせることは出来ん。どうでも脱がせようとするなら鑿で打ち切るより他はないが、假面と顔の肉は寸分の隙間もないほど喰ひ入つてゐるのだから、そんなことをしたら、假面を脱がせる前に頭を砕いてしまふわ』

と、言つて、異様な聲でカラカラと笑ひ出し、

『え、え、え、……どうだサンマルス。見事な細工ぢやないか。まあ、この口蓋の仕掛けを見るがい。……この蓋の裏に、こんな工合に長短四本の針が出てゐる。下手に聲など上げようとしたら、こいつをビッシヤリとかう閉めてしまふ。すると、長い針が咽喉の近くまで入つて行つてギョツと舌を押へてつけてしまふし、短い方はこんな風に上下から唇を狭み込むから、たゞもう、鼻から息が出るばかり。猿轡を喰ませたと同様、グウとも言へるもんぢやアない。……いや、愉快々々。世にこんな奇抜な話はなからう』

と、身體を二つに折り、釣臺の縁につかまつて笑ひこけてゐたが、堪能するだけ笑ふと、また腕を組んで、薄い唇の端を無情に引き歪めながら、

『しかし、考へて見れやア可哀さうなもんだ。こんな鐵の假面を被つたまゝ長い長い生涯を終へねば

ならん。それといふのも心柄。大それたことを企んだ罰でこれも仕様がなない。……どうだ、おい、囚人。假面の工合が氣に入つたか』

と言ふと、拳でどこか假面のあたりを突き上げた。

痛さのためか、それとも無念の叫び聲か、擔架の上の人物は、

「うーん」

と、呻き聲を上げる。

ナアロオはせゝら笑ひ、

『何だ、どうした。苦しいのか、切ないのか。それとも、肚が立つとでもいふのか。そんな小さな聲では勢がない。元氣よくもう一聲鳴いてみせろ』

と、鬼々しく言ひ放つと、拳を固めて、顔と思はれるあたりを力まかせに打ち据ゑた。釣臺の上の人物は、さながら、地の底で靈魂が呻くやうななんとも慘憺たる聲で、

「うーん」

と、また呻く。

テレエズとコフスキーの二人は、もう一言呻いてくれたら、アルモアーズかオビリエ大尉か聞き分けることが出来よう、せめて、もう一聲、と息をのみ、耳を澄ましてゐると、ナアロオ密偵長はそれ



で堪能したのか、要塞長に向ひ、

『今度は、ひとつ後の方を調べてみよう。蝶番の工合はどんなになつてゐるか、もう一度見て置く必要がある。背中の方へ廻つてこいつを抱き起せ』

要塞長は、釣臺の上の人物の肩に両手を掛けて、そろそろ引き起す。

さて、釣臺の上に引き起されたその人の姿といふのは、まさにこの世のものとも思はれぬ。残忍といはうか、非道といはうか、地獄の苛責も、これほど苛酷ではあるまい。さすがの二人も聲をのみ、いま現在、自分の眼で見るとこの有様が、眞實のこととはどうしても思はれぬのであつた。

衣服が目印とならぬやうにといふ抜目ない思ひつきなのであらう。白い布で簡単に縫ひ合せて作つた袖長の長袍のやうなものを着せられ、その裾は長く床に曳いてゐるので、爪先さへ覗くことが出来ぬ。両手は後手に固く縛られ、足には鎖を結びつけられ、頸から上全體が、ちやうど古代の鐵の水壺のやうなかたちをした、丸い黒い鐵の假面で被はれてゐる。眼に當るあたりには瞼甲のやうなものがつき、口に當るあたりに奇妙な形の穴が黒く口をあけてゐるだけで、あとはたゞ一面にテラテラと輝りわたり、白い長袍と照應して、その無氣味なことを言つたら何と形容のしやうもない。さながら海の底に棲む怪魚の化物かと思はれるばかり。餘りに陰慘怪奇なやうすに、さすがに氣丈なテレエズも、思はず、

『あれッ』

と、恐怖の叫びをあげた。

コフスキーは仰天して、咄嗟に右手を伸してテレエズの口を塞いだ。ナアロオほどのものが、なんでこの叫びを聞きのがすはずはない。遽にキツと眼差を鋭くして、

『おや、隣の部屋に誰かゐるな』

と、呟いてゐるが、みるみる悪鬼のやうな形相になつて、

『おい、サンマルス。どつちみち貴様の譴責は逃れられぬところだ。この要塞の規律が弛緩してゐるから、貴様の部下があんなところに隠れて立ち聴きをしてゐる』

と、言ふと、二人のゐる扉の方へ正面をきつて、

『このナアロオを憚りもなく、そんなところにひそんで國家の大秘密を盗み聴きするなどは容易ならん大罪。グレーアの刑場へ曳きずつて行つて首を絞めてやらねば肚が癒えん。さア、こつちへ出て来い』

と、さながら狂氣したやうに足を踏み鳴らして絶叫する。

こちらの二人は、どうしよう思ひつきもなく、書類棚の蔭に隠れて息を殺してゐると、ナアロオはキリキリと凄しく齒軋りをしながら、



「さ、十秒だけ暇をくれてやるから、その扉を開けてこつちへ出て来い。十秒経つても出て来なければ、扉越しに犬のやうに撃ち殺してやるからさう思へ」

こゝは警戒嚴重な要塞の中だから、下手に走り出したりしたなら、却つて破滅を早めるばかりだ。コフスキーは逸る心をじつと押しつけ、忙しく頭を働かして、何とかこの窮地を逃れる方法はないかと思案してゐたが、咄嗟に思案を凝らし、聲音を忍ばせて壁際の書棚に近寄ると、天井までも届くやうな大書棚に両手を掛け、驚異に價する金剛力を出してジリジリと合の扉の方へ曳きずつて行き、そこへ立て掛けて遽かには向ふから入りかねるやうにして置き、さて、逃げ道はないかと慌しく部屋のうちを見廻すと、これこそは神の加護か、大きな書机の傍の床の上に、四尺四方位の押し蓋のやうなものがあるから、そこへ走り寄り、両手を掛けて引き上げてみると、それが安々と上る。果してそこは切穴で、真下に當る部屋から、大廻りをせずこの部屋へ上れるやうに設けたものらしく、垂直な鐵梯子がついてゐる。

隣の部屋では、いよいよ猛り立つて、

「よし、出て来ぬな。どうしても出て来ぬといふなら、こつちから行つてやる。どう逃げ廻つたところが袋の鼠、こゝで非常喇叭をひと吹ふいたら、どうジタバタしたところで逃げる道はない。阿呆！ 氣狂ひ！ どぶ鼠！ ……さア、行くぞ。どんな面で、こんな大それたことをしやがつたか、よツク

見届けてやる」

と、聲音も荒々しく扉の方へ近づいて来る。

もう猶豫してゐる場合ではない。コフスキーはテレエズを肩にかけ、さて降りたその先はどうなるのか、思ひを凝らす暇もなく、細い鐵梯子傳ひ、黒い口をあいた階下の方へ降りて行つた。

ナアロオは、扉に身體を打ち當て、打ち當て、しきりに扉を開けようを試みてゐたが、どうしても開かぬと見極めると、身を返して扉口から廊下へ走り出し、飛ぶやうにして文書室へ入つて来て、忽ち切穴の口に眼を止め、

「畜生、こんなところから逃げやがつた」

と、地團駄踏む。要塞長も、さすがに顔色を變へ、

「この切穴はまつ直ぐに審に續いてるのですから、こゝへ逃げ込んだとすれば、急いで手配をせねば……」

と、遽かにうろたへ廻る。

ナアロオは、物凄いい眼付で切穴を見下してゐたが、急に要塞長の方へ振り向くと、  
「要塞長、すぐ非常喇叭を吹いて、翻轉橋を上げさせ、地下道の出口々々を固めて審を限なくあらためさせろ！ それでも見つからなければ、この要塞に火をつけて焼き拂つてしまふつもりだ。さう



すれば曲者は地下室で焼け死んでしまふだらう。秘密の漏洩を防ぐためには、要塞の一つ二つは惜しんでおられぬ。さ、早く非常喇叭を！」  
要塞長はアタフタと部屋から走り出す。間もなく、消魂しく吹き鳴らされる非常喇叭。それについて、空をどよもすやうな凄じい音を立てながら、城門の大翻轉橋が、ガラガラと引き上げられ始めた。

### 八、夫人の長い獨白 並に「ラ・ヴォアザン」

白耳義ブリュッセル市、ブラバン街。外國の皇族や大貴族の常宿になつてゐる「マキシミアン」といふブリュッセル第一の旅館。露臺の大理石の手摺に肘をつき、物思はしげに庭を眺めてゐる凄艶な婦人があつた。

銀糸で刺繍をした空色の服に、ティシユ織の豪華な襦袢の裳裾を長く曳き、蝶々飾のついた薄紗の頭帕をつけてゐる。

顔は、白といふより、薄い檸檬色といふのに近く、いつたいに大柄な顔立ちで、眼は深く黒く、やや大きめな唇は早咲きの深紅の薔薇のやうにも紅い。漆黒の眼は、長い睫毛に蔽はれて烟つたやう

に妖しく光り、如何にも情熱の激しさを思はせる。あり餘る黒い髪は頭帕からあふれ出して肩の上で波打ち、胸のあたりは豊かに盛れ上つてゐる。ひと眼で伊太利か、またはその邊の國の高貴な婦人だとわかつた。

丁度四月の半ば頃のこと、黄水仙の盛り、リラの花も綻びそめ、人の心も何となく浮立つのに、どういふ物思ひがあるのか、時々悲しげな深い溜息を洩らしながら、惱みに満ちた眼差で噴水盤の水を眺めてゐる。

ほのかな春の風は裳裾をゆるがせ、小鳥はチ、と鳴いて露臺を訪れるが、この麗しい春の姿も婦人の眼に映らず、また耳にも訴へぬ風で、化石でもしたかのやうに身動さへしない。しかし、眠つてゐるのでもなく、凍りついてしまつたのでもないことは、長い深い溜息と共に、時々、

『ロリップや、ロリップや』

と、啜り泣くやうな呟きが聞えるによつても知られる。

貴婦人は、そんな風に長い間凝りかたまつたやうになつてゐたが、やがて、小さな身軀をひとつずつと、袖の間から薄紗のハンケチを取り出し、何ともいへぬ典雅なやうすでそれを眼に押し當てながら、

『ロリップや、お前はいつたいた何處にゐるの？ ……こんなにも焦れてゐるあたしを捨て、何處へ



行つてしまつたの？…あの晩、ローラン伯爵の屋敷から出て行つたきり歸つて来ないので、この二月の間どんな思ひでお前を探し續けたことだらう。あの町は及ぶ限り探させたが手がうりがないからひよつとして、巴里へ先に歸つてゐるのかと思つて、馬を五頭も乗りつぶすほど急いで巴里へ歸つて見たが、そこにもお前の姿はない。何でも密偵長のナアロオと二人で出掛けたといふことだつたからナアロオを呼んで訊いてみたが、何とかいふ酒場で別れた切り後のことを知らないと言ふ。黙つてあつたしを捨てて行くやうな男でもなし、行くなら行くで必ず一筆位る書き残して行くはずだから、もしかすると、ブリュッセルにうろろしてゐる浪人崩れなどに喧嘩を賣られ、名も知れないやうな宿屋の二階で深傷に喘いでゐるのではないかと思ひ、人をやつてもう一度探させたが、それでも矢張り消息が知れない。ほんたうにどんなに悲しい思をしたか知つてゐるかしら。喰べる物さへ咽喉に通らないやうになつて、明けても暮れてもお前のことばかり。しまひには痩せ衰へて影のやうになつてしまひ、床についてお前の名ばかり呼んでゐた』

また眼を押し拭つて、

『さうしてゐるうちに、三月の末頃、お前も知つてゐるだらう、イスナアール男爵といふ劍客が突然訪ねて来て、ロリッブ・トウリエといふ人のことについて少しお話ししたいことがあると言ふ。轟くやうな胸を押へながら聞いてみると、何でもナアロオ密偵長がお前を嘯して自分の腹心につけ、オビリ

エ大尉といふ名で決死黨先鋒隊の密偵に入り込ませてしまつた様子だが、もし密偵だと思破られたら先鋒隊の一味に有無を言はず撃ち殺されてしまふことだらうし、また、ナアロオの命令通りに無事に決死黨の秘密を探り出しても、用事が済めば、こいつは秘密を知つてゐるから生かしてはおけぬといつて事に託して殺してしまふのは、ルーヴォア侯やナアロオの今までのやり方だから、どつちみち命はありますまいと、藪から棒にこんなことを言ふ。あたしは、もう生きた空もなく、ロリッブといふ男は格別深い智慧もなく、それほど勇氣もある男でもないのに、どうしてそんな恐しい仕事に使はれてゐるのかとたづねると、イスナアール男爵は露骨に笑つて、夫人さま、つまり適材適所といふ工合に使つてゐるのです。ロリッブさんに、テレエズ・ヴァンダム嬢を蕩し込ませ、加盟書の入つてゐる手箱の隠し場所を探り出さうとしてゐるのです。これで御納得がいきましたか、と言ふのだ…何しろ、テレエズはあんな美しい娘だから、お前のやうな浮氣な男は進んでも引受けさうなことだと思ふと、あたしも悲しくなり、恥も外聞もなく泣き出してしまふと、イスナアール男爵は慰め顔に、しかし、まあ、さうお泣きになることはありません。従兄妹とは言ふものの、戀人同志のやうな間柄のアルモアーズがゐるのですから、ロリッブさんがどのやうな女蕩しでも多分成功はしないでせう。この點だけは、確かにナアロオの見込み違ひでした—と云ふのです』

貴婦人は、その時の悩みをまた思ひかへすやうに、惱ましさに肩のあたりを曇らせ、



「……そんな風に慰めてくれるけれど、あたしの心は落着かない。もしやと思ふと、居ても立つても  
 られぬ氣持。そればかりぢやない。決死隊の行動が何も彼もさう筒抜けに分つてゐるのでは、あれ  
 らを利用して、ルイがあたしを見捨てた仕返しをしてやらうといふ計劃も水の泡になる。そこで、ど  
 ういふ筋道から露見したのかと尋ねると、和蘭にゐる決死隊の副大將ボーデン男爵が寝返りを打ち、  
 何も彼にもナアロオに密告したのだといふ。そこで、ロリッブさんの働きで先鋒隊が何處を通るのか  
 分つたら、その道に伏勢を置いて一人残らず生擒りにし、加盟書に署名した人の名前を白状させたら  
 後は用がない。先鋒隊の一同が變節して途中から行方不明になつたと思はせるやうに、生涯顔の知ら  
 れぬやうな仕掛を施し、人眼に觸れぬところに死ぬまで幽閉してしまふつもりだといふことでした。  
 とここで、先鋒隊の方はそんなことは夢露知らず、後四五日すると、ブリュッセルを進發して巴里  
 へ乗り込む手筈になつてゐるやうに聞きましたから、かうして、取るものも取り敢へずお知らせに上  
 つたのです。實は、この私は、ナアロオのやり方が餘り酷薄無情なのですつかり嫌氣がさし、不用意  
 にそれを口吻に現したためナアロオに睨まれ、何時なんとき闇討ちにされるかも知らないやうな危い  
 身になつたので、逸早く暗殺團を脱走し、今では天下の浪人、誰のために働かうと心のまゝだから、  
 今まで無慚な手に掛けた多くの志士にお詫びするため、また、私が祕に愛してゐるさる貴婦人に忠節  
 を盡すために、これからすぐブリュッセルに駆け戻つて、先鋒隊の出發を喰ひとめるか、もし、それ

が出来なければ、ナアロオの伏勢を一手に引受け、自分の命にかへても先鋒隊の人々を護るつもりで  
 す。しかし、お断りしておきますが、私も義を重んずる武士の端くれだから、ナアロオと密通してゐ  
 るロリッブさんまで助けて上げることは出来ない。ロリッブさんを助けたいと思つたら、あなたが  
 出かけなさい。ロリッブさんの消息を傳へたのは、せめてものあなたへの心盡し、どうかそれだけで  
 御諒承願ひます、と言つて歸つて行つた」

貴婦人は、切なさうに手で胸を抱きながら、  
 「さあ、その後のあたしの心配といつたら、今にも氣が狂ひ出すかと思ふばかり。一分の猶豫もなく  
 早馬車を言ひつけて、日夜の分ちもなく繼ぎ立て繼ぎ立てブリュッセルへ乗りつけたが、その時はも  
 う、先鋒隊の一同が出發した後。あわて、巴里街道を追ひ掛けたが、勿論世を忍ぶ一同だから、こん  
 な街道を通るわけがない。さう氣がついて、小さな二輪馬車を借り入れ、あちらの間道、こちらの裏  
 道といふ工合に探し廻つたが、何處を通つて行つたものやら皆目見當がつかぬ。半狂亂になつて、二  
 週間程の間、ノール州とソナム州とを探し廻つたが、どうにも手懸りがないから、もしや、もうバ  
 スチーユにでも護送されたのではないかと思つて、また巴里へ駆け戻り、様々に探りを入れてみたが  
 どうもその様子はない。何しろ激しい旅行と氣疲れでまた床へつくやうになつてしまつたが、さうす  
 るうちに、ブリュッセルでお前を見掛けたといふ噂を聞いたので、まさかと思ひながら矢張り心が惹



かれ、またかうしてブリュッセルに戻つて来たが、矢張り根のない噂だつたとみえ、どうしてもお前に會ふことが出来ない。ほんたうに悲しくて仕様がな。この世でもうお前に會へぬ位なら、あたしはいつそ死んだ方がましだと思ふのだよ。：：ロリップや、可愛いロリップや、お前はいつたい何處にゐるの』

と言ふと、たまりかねたやうにさめざめと泣き出した。

春の露臺で、薄情な愛人のうへを思ひ、偲び泣いてゐるのは、あの雪の夜、ローラン伯爵の屋敷の車寄に、馬車から降り立つて来たソアツン夫人だつた。

伊太利第一の名家マンチーニ家に生れ、ルイ十四世が西班牙の皇女マリア・テレエズと結婚する以前、ルイ王の愛人として、その美貌と明眸でルイ王を惑溺させ、政治の端々にまで權威を振ひ、宮廷のうち、誰一人その顔をまともに仰ぎ見る者もなかつた程に時めいたその人も、王弟オルレアン公の妃アンリエッタの侍女ド・ラ・ヴァリエールに寵を奪はれ、いまは見返られもせぬ身になつたといへ、佛蘭西の數多い貴族の中でも第一に推される程の高貴な身が、如何に戀ゆゑとはいへ、名もない家令づれの倅の姿を追ひ求め、つくづくに身を賣れせてゐるさまは、見る眼にもなかなか哀れ深かつた。

ド・ソアツン伯爵夫人は、長い呟きをやめ、露臺に頰杖をついて悲しげな眼差で行く雲を追つて

ると、軽く扉を叩いて入つて来たのは、年の頃廿八九、きつぱりとした眼鼻立ちの、如何にも才けた面持の婦人。白絹の長い服の上に、旅行用の黒い薄紗のマントを羽織り、淀みのない足どりで夫人の側へ近寄つて来ると、人の氣を外らさぬはきはきした口調で、

『夫人さま、案の定こんなところにおいででしたね。餘りお歸りが遅いので、このクレメンテが巴里からわざわざお迎ひに上りましたよ』

伯爵夫人はゆつくりとそちらへ振り向くと、夢から覺めた人のやうな聲で、

『おや、クレメンテ、お前はまたあたしを連れ戻しに来たの。どうかあたしにかまはないでしてくれ。あたしはロリップの居所が分るまでは、巴里へは歸らないつもりなのだから』

クレメンテと呼ばれた婦人は、おだやかな微笑を浮かべながら、伯爵夫人と向き合つた椅子に腰を下し、

『ロリップさんが必ずこゝにゐると分つてゐるなら、決してお迎ひになど上りませんが、一度自分の秘密を打ち開けた者をナアロオがこんなところへ放しておくはずはないのですから、もう一度よくバスターユを調べた方が早道だと思ひます。こんなところで當てもなく日を送つてゐて、どこか人里離れた要塞へでも送られてしまつたら、それこそ探す手蔓がなくなつてしまふわけですから、少しも早く巴里へ歸つて手を盡してみなければ』



伯爵夫人は悲しげに首を振つて、

『クレメンテ、あたしはもう諦めてゐます。お前の言ふ通り、あれ程の國家の大秘密を打ち開けた以上、ナアロオがいつまでもロリップを生かしておくはずがない。監獄へなど入れずにきつと殺してしまつたに決つてゐます。これだけ手を盡して探つても、ロリップの居所の知れないのが何よりの證據です。ナアロオといふ男には、血もなければ涙もない。名もないロリップを殺すことなどに何の遠慮をするものですか。あの恐しい「白い寢臺」でこのあたしまで押し殺さうとしたほどの男ですもの』

『でも、夫人さま。あなたはあの「白い寢臺」を大變上手に御利用なさいましたわ』

伯爵夫人は、あッ、と驚きの叫びを上げて、

『クレメンテ、お前は どうしてそれを……』

クレメンテは謎のやうな微笑を浮かべながら、

『夫人さま、このクレメンテは歐羅巴第一の女易者ですよ。それをお忘れですか』

伯爵夫人は急に紙のやうに白くなり、手の中のハンケチを引き裂かんばかりに押し揉みながら、

『でも、あのことは、あたしより外に誰も知らぬはずなのに』

クレメンテは、ホ、ホ、と笑つて、

『さうお考へになるのは未だまだあたしの力をよく御存知ないからですわ。今までにしる、ありとあ

らゆる森羅萬象、人の氣性の裏表まで、見抜けなかつたやうなことが、たゞの一つもありましたらうか』

このクレメンテといふのは、佛蘭西の歴史の上では、「ラ・ヴォアザン」といふ名で有名な婦人。ソアツソン伯爵夫人の領地に生れ、幼い時から夫人の侍女になり、その後、ルイ十四世の主馬頭のアントアンヌ・ル・ヴォアザンと結婚したが、小さな時から頭腦が鋭く、人の心を見抜くのに妙を得てゐたので、追々手相見、女易者としての評判が高くなり、あらゆる貴族の家に出入りしてその内情に觸れるものから、上流世界の秘密でラ・ヴォアザンの知らぬことはないといふ程になつた。ラ・ヴォアザンは占の方ばかりでなく、エキジリ侯爵に毒藥學を學び、その死後は、歐羅巴第一の毒藥學の博士とされ、歴史の上では、一六八〇年に、毒殺者ブランヴィリエ侯爵夫人の連累として、グレートの廣場で生きながら硫黄燒の刑に處せられたことになつてゐる著名な婦人である。

『そんなにお驚きになることはありません。このあたしくしが、あなたのために悪しかれと計るわけもなく、また、ひとに洩らさうはしませんから、これはあなたとあたしくしの二人の秘密、決してひとに知られるやうなことはありません』

伯爵夫人は、やうやく頬に生氣をとり戻し、ハンケチで額の汗を拭ひながら、



「あゝ、どうかこのことだけは秘密にしておくれ」

と、言つておづ／＼とラ・ヴォアザンの顔を見ながら、

「ほんたうに、お前には何も隠しておくことは出来ぬのだね。隠さうなどと浅墓なことも考へてはゐなかつたが、思ひ出す度にあの晩の恐ろしい有様が眼の底にマザマザと浮んで来て、それが辛くてたまらなかつたからだ。どうか、氣を悪くしないでおくれ」

「どうして氣を悪くなどいたしますものですか」

伯爵夫人は、恐ろしさに身慄ひをして、

「……ラ・ヴォアザン、お前が見抜いた通り、あたしは、あの「白い寢臺」で腰元のロレンツァを殺してしまつたのだよ。いくら嫉妬に眼がくらんだとはいへ、よくあんな恐ろしいことが出来たもんだ。自分で自分の氣持が分らない」

ラ・ヴォアザンは頷いて、

「そのあとはあたしが申しませう。……そんなことをなさつた起りといふのは、ロリップさんがロレンツァといふ仲になつてゐるといふことを感付いたことにもよるのでせうが、それよりも、あなたはロレンツァの若さが妬ましかつたのです」

「えゝ、その通り」

「あなたほどの氣位の高い方がロレンツァにロリップさんをみすみす寝取られてしまつたとお考へになるはずもなし、ロリップさんの心があなたから離れて、ロレンツァにすつかり傾いてしまつたともお思ひになるはずがない。いつもの浮氣癖でからかつてゐるのだ位のことにはよく御存知のくせに、ロレンツァを殺さうとまでなさつたのは、ロレンツァが憎いのではなく、今言つたやうにロレンツァの若さが妬ましかつたのです」

「たしかにさうです。今になると、自分はなぜあんなことをしたのかはつきりと分ります」

「勿論、あなたは、あの寢臺にあんな恐ろしい仕掛があるとは、思つてもいらつしやらなかつた。自分の部屋へ歸つて寝たいと言ふのを、無理矢理引きとめ、叱りつけるやうにして御自分の寢臺にロレンツァを寝かせたのは、夜中にそつとロレンツァがロリップさんの部屋へ忍んで行くのを防ぐおつもりだつたのです。」

「えゝ、その通り」

「……そのうちに、旅の疲れでロレンツァはすやすや眠つてしまふ。と、思ふ間もなく不思議なことが始まりましたね」

「えゝさう、不思議な事が始まつた。寢臺の兩側の板が眼に見えぬほど少しづつ迫り上つて来て……」

「……迫り上つて来て、そして間もなくピツシヤリと喰ひ合つてしまつた」



ラ・ヴォアザンは、腹の底まで見透すやうな不思議な眼差で夫人の眼の中を覗き込みながら、  
 『あなたは咄嗟に、今なにが起り、どういふ目的でこの寢臺がこゝに置かれてあつたか直ぐ悟つてしまはれた。ナアロオがルーヴォア侯の命令を受けて、少しも證據を残さずにあなたを殺すために、こんな恐ろしいものを持ち込んだといふことをね。そして、氣の毒なロレンツァが今自分の身代りになつて死にかけてゐると、』

『え、その通り』

『そのうちに、寢臺の中からロレンツァの苦しきやうな呻き聲と、無我夢中に側板を叩く音が聞えて来た』

『さう、聞えて来た……』

『あなたは思はず寢臺の側まで走り寄つた。が、そこで立ち停つてしまはれたのですね。このまゝにしておかうと思つた。助ける氣はなくなつた。邪魔な女、自分よりも若い女が一人、手を動かさずに片付くわけだから、いつそいゝ都合だ。……凄じいロレンツァの唸り聲を聞きながら、助けようと思へば助けられるのを、さうせずに見殺しにしてしまはれたのです』

伯爵夫人は両手で顔を蔽ひ、呻くやうな聲で、

『あ、どうか、それは言はないでおくれ。恐ろしい、恐ろしい』

ラ・ヴォアザンは、またしても妖しい微笑を浮かべながら、

『確にその通りだつたでせう』

『え、さうです、さうです。確かにあたしは見殺しにしました。あ、つらいこと。こんな思ひをするくらゐなら、あゝした恐ろしいことをするんぢやなかつた。それといふのも、ロリップが可愛いから。ロリップのためなら、地獄へ墮ちても決して恨めしいと思ひません。どうか察しておくれ』

『夫人さん、あたしはお責めしてゐるんぢやありません。いろいろと御恩を受けたくせに、あなたの眼を掠めてあなたの大事な人を盗まうといふのは不届。あんな死に方をするのも當然なことです。いはんや、あなたが企んでやつたといふわけではなし、そんなにお惱みになることはありません。あなたが毒や刃物を使つて殺したといふのではなし、いはゞ天の配劑といつたやうなものですからね。ロレンツァの方から言はせれば、今まであなたの眼づまを忍んだ代りに、あなたの身代りになつて死んだので、せめてもの罪亡しが出来たと思つてゐることです』

と言つて、ホ、ホ、ホ、と笑ひ、

『ロレンツァはそのお蔭で、今頃は天國へ行つてのうのうしてゐることです。さうから、ロレンツァの話はこれ位にして、ロリップさんの居所を探る手蔓を、どうつけるかその方を考へなくてはなりません。先程も申したやうに、あたしの意見では、如何にナアロオでも、下手にロリップさんを殺しなど』



すると、その後のあなたの仕返しに恐ろしいから、さういふ場合の抜道をつくつて、殺さず何處かに幽閉してあるのに違ひないと思ひます。そればかりではない。あたしの感じではロリッブさんは何處かに生きてゐるやうな気がするんです。あなたはあれだけ手を盡してバスチーユを探したんだからもう殺されてしまつたのだと仰言いますけど、バスチーユばかりが監獄ではなし、この廣い佛蘭西にはロリッブさん一人を押し込めるところ位は何處にだつてあります。ロリッブさんがバスチーユにゐないのは、未だあそこへ護送されて來ないからなのかも知れないのですから、萬事につけ、その邊の消息を探るには、こんな處でまごまごしてゐたところで始まらない。何といつても巴里へ歸つてルーヴアアなり、ナアロオなり、またそれに絡み合つた筋を動かして、少しも早く探り當てるより他はありません』

と、子供に聞かせるごとく、嚙んで含めるやうに言ふと、伯爵夫人も頷いて、

「なるほど、お前の言ふ通り、バスチーユだけが監獄ぢやない。何處か遠い遠いところに流されたのだとしたら、こんなところゐたんではとても駄目。少しも早く巴里へ歸つて調べなくては。……では、ゾアザン。わたしは今直ぐ出發するから、帳場へ早馬車を言ひつけておくれ」と、足もとから鳥が立つやうに周章で始めた。

### 九、河のほとりの密會 並に、陰慘な卅年の始り

急ぎに急がせて、二日目の夕方、ソナム州ペロンヌの町に程近いロアーズといふ村に着いた。近頃街道の取締が厳しくなり、ペロンヌの取締を嫌ふ人々は、この宿場で一泊し、偽造の關所手形を買つて、次の朝早くペロンヌの關所を通り抜けるならはしになつてゐた。

ラ・ゾアザンはこの邊の事情によく通じてゐるので、先を急ぐ伯爵夫人を宥めてこの宿に早泊りすることにし、村端れの「海鳩屋」といふ宿場旅籠屋へ馬車を停めると、近頃の街道筋の取締の厳しさに怯えたものか、旅客は至つて少く、旅籠屋の中は閑散を極めてゐる。

ラ・ゾアザンは先に立つて居酒屋の中へ入つて行き、亭主に部屋の支度を命じながら、ふと中二階の方を見上げると、その小部屋のカーテンの隙間から、見たやうな若い女の横顔が覗き出しているのに目をとめて、おや、と思つて眺めかへすと、それは決死黨先鋒隊長マルセル・アルモアーズの従妹。一同と一緒にブリュッセルを出發したはずのテレエズ・ヴァンダムだつたから、さすがに驚いたが、咄嗟に胸を押へ、さりげない様子で伯爵夫人のところへ戻つて來て、夫人を馬車から降して中庭の隅の方へ連れて行き、つとめて穩かな口調で、



「夫人さま、あたしは今ちよつとしたことを申し上げますが、決して騒いだり大きな聲を出したりなすつてはいけませんよ。何しろ、ナアロオの密偵が至るところに鶺鴒の目鷹の目でゐるので、下手なことをして嗅ぎつけられたら百年目。せつかくの手蔓もフイになつてしまひます。よう御座いますね」

と、充分に念を押してから、いつそう聲を低め、

「夫人さま、この旅籠屋の二階にテレエズ・ヴァンダムがをります」

伯爵夫人は、あつ、と聲を上げて、

「すると、ロリップも……」

と、騒ぎ立てるのを、ラ・ヴォアザンは両手で制止止め、

「静かになさらないといけません。テレエズに訊けば、勿論わけなくロリップさんのこともわかりませうが、それはとにかく、テレエズがこんなところに隠れてゐるといふのには相當な仔細があることに違ひないから、こちらもそのつもりになつてかゝらなければいけません」

と言つて、充分にあたりを見廻し、人氣のないのを見定めてから、

「あたしはこれからテレエズのところへ行つて、それとなく連れ出して來ますから、あなたは向ふの堤のところへ行つて、河でも眺めてゐるやうな風をしてゐて下さい」

と、言ひ捨てて、また旅籠屋の中へ入つて行く。

伯爵夫人は、ラ・ヴォアザンに命じられた通り、河岸の草の中に腰を下し、騒ぎ立つ胸をおさへながら待つてゐると、間もなくラ・ヴォアザンがテレエズの手を引いてやつて來た。

伯爵夫人はテレエズが坐るのも待ち兼ね、両手で抱きかゝへるやうにしながら、

「おゝ、テレエズ、どうおしだつた。あたしは、ある人から、ナアロオの奴がお前たちを待ち伏せして生擒りにし、この世から抹殺してしまはうと手ぐすねをひいてゐると聞き、出發を見合せようと、思つて急いでアリユッセルまで行つたが、その時はもう皆が出發した後。それから、あの道かこの道かと探し廻つたが、たうとう追ひつくことが出来なかつたが、お前の顔を見て安心しました。皆は無事にマルレエ・ル・ロアまで行つたのだらうね」

と、息せききつてたづねると、テレエズは悲しさうに首を振つて、

「無事なところか、ベロンヌ要塞の十軒ほど河上の「半獅神の淵」で敵の伏勢の闇討ちに會ひ、生き残つたのは、あたしとコフスキーのたつた二人。一人は生擒られ、後の十二人は皆撃ち殺されてしまひました」

と言ふと、伯爵夫人は、満面に喜色を浮べ、狂したやうに手を打ち叩きながら、

「一人だけ生擒りになつたと？ あゝ、それこそロリップだ、ロリップだ」



と叫び出した。

ラ・ヴォアザンは、手で伯爵夫人を制し、テレエズに、

『かまはず話を續けて下さい。どんなことで、そんな始末になつたのですか』

テレエズは言葉を續け、ブリュッセルを出發する當時の様、途中の様子、オビリエといふ大尉が和蘭の同志ボーデン男爵からの紹介状を持つて先鋒隊に加入して來たこと、半獅神の淵で突然一齊射撃を受け、アルモアーズ始め一同が撃ち拂はれてしまつた悲惨な有様。思ひ掛けなくコフスキーと廻り合ひ、生擒りにされた俘虜がアルモアーズかオビリエ大尉か見究めるために、ペロンヌの要塞へ忍び入り、鐵假面を被された囚人を一瞥したこと。それから、目的を遂げぬうちにナアロオに氣付かれ、地下道を逃げ走つて堡塞の角塔の下へ逃れ、濠を泳ぎ渡つて九死に一生を得たまでの顛末を仔細に物語り、

『それといふのは、オビリエといふ大尉がわれわれの中に入り込んだ密偵だつたため。それに氣付かなかつたのは、勿論われわれの不明ですが、それにしても、その一人のために、この長い間苦心を重ねた同志が、皆淵河の藻屑にされたかと思ふと、それが無念で、居ても立つてもゐられぬやうな氣持がします。憎いのは、そのオビリエといふ大尉で……』

伯爵夫人は忽ち激昂して、

「憎い？ 憎い？ 例へ何であらうとお前などにロリップのことをそんなに罵られるいはれがない。……テレエズ、そのオビリエ大尉といふのは、あたしが死ぬほど愛してゐるロリップといふ男なのだよ』

テレエズは呆つ氣にとられて、

『ロリップ……あのオビリエといふ偽名を使つてわれわれのところへ入り込んで來たナアロオの腹心の部下が、あなたの愛人ですつて。それはまア本當のことなのですか』

伯爵夫人は、もう物の見境もつかなくなつたやうに、

『さうとも、さうとも。あたしがこの世で愛するたつた一人の男だよ』

テレエズは急に顔を引き締め、

『われわれ決死黨の加盟書に署名までなすつたあなたが、現在われわれの心を盗み、われわれを裏切り、われわれの同志を敢へなく河藻の底へ沈ませてしまつた犬のやうな卑劣な男を、この世で一人の愛する男などと放言なさるのには、いつたいどのやうな思召しなのでせうか』

さすがに恨みと輕侮の情を包みかね、恩のある人とは知りながら、語氣も鋭く言ひ詰めると、伯爵夫人は怒りの餘り熱狂して、

『なに、それはロリップが悪いのではない。あのやうに人の好い男だから、うまうまとナアロオに瞞



されて、心にもないことをやつたのだ。何もロリップが咎められることはない」

と、身體を慄はせ、涙さへ浮べて叫ぶので、テレエズも呆つ氣にとられて暫くの間は言葉もなく伯爵夫人の面を眺めるばかりであつた。餘りの浅ましさにこちらも泣き出したほどの氣持になり、「瞞されたのか瞞したのか知りませんが、男の魂がある者なら、誰があんな卑劣なことをしませう。あたしならば、ありつたけの自分の愛情にかけても、そのやうな男は愛しません」

伯爵夫人は頑是ない子供のやうに首を振つて、

「ロリップに對するあたしの愛情がどんなに深いものだから、お前になど話したつて分るものか。……あたしならさうぢやない。自分の愛する男が罪を犯したなら、あたしも共に罪を犯す。命にかけて好きになつた後で、たとへ心が卑しいからといつて、どうして一旦ゆるした愛情が取り返せるものか。それが本當の女の愛情。これ位のことに分らなければ、テレエズ、お前は女ぢやない」

と、止めどもなく言ひつゝの。今まで控へてゐたラ・ヴォアザンもさすがに堪りかねたものか、伯爵夫人に向ひ、

「ロリップさんに對する愛情は、それはあなただけが知つてゐること、どうでも他人に分らせようとしたつて、それは無理なことです。殊に、今は埒もないことを言つてゐる場合ぢやありません。アルモアーズとオビリエ大尉の二人のうち、どちらが死んでどちらが生き残つたか、その判断をしなければ

ならぬといふ大事の場合。たとひどちらにせよ、助け出すことには違ひありませんが、先づそれから決めてかゝらなければ、萬事の行動が取りにくい」

伯爵夫人は、またしても狂つたやうになつて、

「なに、判断も何もいるものか。生き残つた方はロリップに決つてゐる。ナアロオがあたしを「白い寢臺」で殺しそくなつた肚癩せに、そんなものを被せてロリップを苦しめようとしてゐるのだ」

ラ・ヴォアザンが宥めるやうな口調で、

「あなたがさうお思ひならそれでもかまひませんが、どちらかと分るまでは互ひに助け合つてゆかねばならぬはず。こんなことばかり言ひ合つてゐては切りがないから、あたしが指圖いたします。夫人さま、あなたはこゝからすぐ巴里へ歸り、及ぶ限りの傳手を求めて鐵假面の正體を聞き出すこと。それから、テレエズさん。コフスキーには今迄通りペロンヌの要塞を見張らせ、鐵假面が何處へ送られるか突き止めさせるやうにして下さい。何しろ、奸智にたけたルーヴォアやナアロオのすることですから、いつの間になんか思ひ掛けない遠いところへ持つて行つてしまふか知れたものではありませぬ。鐵假面の行方を見失つてしまふと、何も彼もそれまでですから、さうとなつたら、世界の涯まででも、見え隠れについて行かなければならぬ。これはコフスキーでなければ出來ない仕事です。……それから、テレエズさん。あなたは巴里へ歸つたら、すぐ手箱の隠してあるところへ行つて、加盟



書やその他、反路易王黨に關する一切の書類を焼き捨て、下さい。これはわれわれの陰謀の證據をル  
 ヲヴォアに渡さぬばかりではなく、あたしの考へるところでは、その手箱の有る無しが、鐵假面は誰  
 だかといふことの分る手筈になると思ふのです。……今のところでは、手箱のあるところを知つて  
 のはアルモアーズとオビリエ大尉の二人つきりです。伯爵夫人の前ですが、あの人はとても拷問など  
 に堪へられる人でないから、もしも手箱が無くなつてゐたら、鐵假面はオビリエ大尉に決つたやうな  
 もの。ところで、アルモアーズの方は、たとへ水火の責苦に遭つたつて同志の名はおろか、手箱の在  
 所などは舌の先にものせるはずはないから、もし手箱がそのまゝだつたら、鐵假面は確かにアルモ  
 アーズだと思つて間違ひありません』

さすがは才智を以て謳はれる婦人だけのことはあると思ひ、テレエズもその理のあるところに心か  
 ら感服してゐると、ラ・ヴォアザンは、また言葉を續ぎ、

『たゞ、もう一つ考へておかねばならぬことは、ことによると、ナアロオの密偵が手箱を掘り出しに  
 來るのがあなたより後になるかも知れないから、手箱がそのまゝ残つてゐたとしても、それだけで  
 く、鐵假面がアルモアーズだと決めてしまふわけにはゆきませぬ。勿論、あたしは何處に手箱があ  
 るのか知りませんが、もし手箱が見つかつて、一日位の間は、その近くに見張つてゐて、ナアロオ  
 がそれか掘らせに寄越すか寄越さないか、それを突き止める必要がありません』

テレエズは深く頷いて、

『なるほど、仰言る通りです。あたしにすれば、鐵假面がどちらなのか、それを突き止めるのが大事  
 なことなので、あなたのお指圖に従つて、たとへ一ヶ月でも二ヶ月でも、はつきりと納得のゆ  
 くまでそこで見張りをすることにしませう』

と、言つてるところへ、コフスキーがつかつかと近づいて來て、伯爵夫人とラ・ヴォアザンに會釋  
 するより早く、うろうろと舌を縫らせながら、

『今日まで色々骨折つてみましたが、たうとう分りました。鐵假面は今夜の十二時にペロンヌの要塞  
 を出て、この街道を通り、巴里へ護送されるのださうでございます』

と言つて、恰度自分へも言つて聞かせるやうに、

『何しろ二百三百と護衛がついてゐることだから、こゝで客氣に逸つてつもらぬことをすると、元も  
 子もなくしてしまふ道理。はい、確かにそれに違ひないのでございます』

そして、道理は分つてゐるが、護送されるのを知りながら、みす／＼手も足も出せぬのが口惜しいと  
 でもいふ風に、小山のやうに頑丈な肩を激しく揺ると、眼に大きな拳を當ててシクシクと泣き出し  
 た。

その夜の一時近い頃。雨催ひの暗い街道を、黄泉から出て來たやうな黒い行列が、肅々と巴里の方



へ進んで行つた。

長槍を持った騎馬の一隊が先頭を行き、その後には抜剣をした一小隊の兵隊が徒歩で続き、その次に三十人ばかりの銃士。また一小隊の龍騎兵。殿には要塞兵が厳しく武装して、右手を劍の柄に掛けてゐた。

その一團の兵士たちは、隙間なく黒い覆布を掛けたたつた一つの輿を衛つて、闇から出て闇の中へ消えて行つた。

四人の男女が旅籠屋の二階の窓の鏡扉の隙間から、たとへやうのない感慨で、これを見送つてゐた。テレエズが囁くやうな聲でコフスキーに言つた。

『コフスキー、あたしは今から五年かゝつても十年かゝつても、きつとマルセルを奪ひ返してみせます』

コフスキーは、無言のまゝ頷いた。

五年、十年はおろか、史實のしるすところによると、鐵假面は一七〇三年までの卅年の間、僻陬の、名もない要塞監獄を次から次と、轉々と移されてゐたのだから、この二人の誓ひより、よりまだ長かつたわけである。

第二部 死の牢獄



一、十六本目の櫛の下  
並に、汗を拭く鬪體男

ブリュッセルの聖ジャン・クスルグーデンベルヒといふ寺院は十五世紀の末頃に由來した古い建物で、廣々とした庭を圍む石塀のうしろはすぐ教區墓地になり、墓地の奥は何町歩とも知れぬやうな深い林で、楢や櫛の巨木が參々と枝をまじへ、晝でさへ陽の目も透さぬほど。まれに寺僕が枯枝を拾ひに来るほか、絶えて入り込むものもない。

四月も末に近い月のない夜、墓地の小徑づたひにそろそろと林の方へ歩いて行く細つそりとした黒い人影があつた。

もう眞夜中に近いので、聖堂の大扉はことごとく閉され灯影ひとつ洩れて來ない。

空からくる微かな星明りで小徑だけは僅かに見わけられるが、その徑とても半ば雜草にとざされてゐるので、黒い人影は如何にも歩み憚むらしく手で墓碑をさぐりさぐり這ふやうに進んで行く。

王族近親まで署名してゐる大陰謀の加盟書を埋めることだから、念を入れた上にも念を入れ、たとへこの林と感づかれ、心當りを掘返されても絶対に本當の宝箱の所在がわからぬやうに、寸分違はぬ五つの鐵の箱を造つてそれぞれ思ひつきの場所へ埋め、本物のほうは一番外れの墓から林の奥のほう

へテレエズの齡の数だけ立木を數へ、今度は左へアルモアーズの齡の数だけ立木を數へ、そこからまた右へ、その年にあたる「一六七二年」の一・六・七・二を加へた十六本目にあたる櫛の樹の根下へ深く埋めた。……この數字さへ知つてゐれば手搜りで順々に立木を數へ、闇夜でも雜作なくその櫛へ辿着ける便宜のためだつた。

さて、テレエズは次の朝、三人に別れを告げ、粗末な田舎娘に服裝を變へ、巴里街道を白耳義の國境のほうへとつてかへした。

ロアーズの旅籠屋で買った偽の手形と鄙びた服裝のお蔭でペロンヌの關所も事なく通りぬけ、七里ばかり歩いて、その日の暮方、シデルポオといふ小さな村に着いた。

街道の外れ 粗末な旅籠屋に宿をとり、夕食をすませるとすぐ寢床へ入つたが、長い間の心勞と疲れが一時に出たものか、夜半すぎからひどい熱につかれ、夜が明けたが身動きさへ出来ぬ始末になつた。

醫者の診斷で肺充血といふことで、一と月ほどの間は生死の間を彷徨つてゐたが、幸ひ死にもせず、旅籠屋へ着いてから四十日目にやうやくそろそろと歩けるところまで恢復した。

この分では手箱はもうルーヴォアの手先に掘出されてしまつたかも知れず、鐵假面がオピリエ大尉なのかアルモアーズなのかそれを知る手掛の方も覺束なくなつたわけだが、手箱の有無だけは確かめ



て置かなくてはならないと思ひ、まだ恢復しきらぬ身體を引曳りながら翌々日の夕方プリユッセルに到着した。

夜が更けるのを待ちかねるやうにして聖ジャン寺の墓地へ忍び込んだが、三年前に一度来ただけの場所だからどの道をどう折れ曲るのだったかはつきりと思ひ出せない。

道は蜘蛛手のやうに錯雑り、よく似た石碑があちらにもこちらにもあつて、同じところを堂々廻りしてゐるやうな気がしてならない。

行けども行けども墓ばかり。暗さは暗し、眞夜中なり、濕氣をおびてソヨソヨと吹きつける風も盡きぬ怨みをこめた死人の息吹かとあやしまれる。

突然、叢の中から裾を引止めるものがあるので、アツと聲を嚙んで星の光をたよりに眺めて見ると、それは無縁の荒墓から露れだした人の骨。夥しい肋骨やら脛の骨、前歯を剝出したすさまじい髑髏が嗽々たる鬼氣を含んで草の中にあちらにもこちらにも轉がつてゐる。

時たまギヤツと消魂しく鳴くのは何といふ夜鳥か。一と聲鳴いたそのあとは以前にも増して閑々然。ヒタヒタといふじぶんの蹙音が妙にはつきりと耳につき、背後から誰かが尾行てくる蹙音のやうにも聞える。

梢を吹く風の音にも心をそよがせながら右へ曲り左へ曲りしてゐるうちに、やうやく墓地のはづれ

まで行きつゝいた。

ホツとして最初の立木を掌で撫て見ると、ちやうど手の届くあたりの枝の附根に樹皮が寄つて瘤のやうに高くなつてゐる。二年前に眼をつぶつて幾度も擦つて見て覚えのあるその手觸りである。

テレエズは、思はず涙含んで、

『二年前にこの樹に觸つたときはマルセルと一緒にだったが、今日はそのひとの生死の消息をたづねてたつた一人で林の中へ入つてゆく……』

二年前にこゝへ手箱を埋めに來たときは、ジャン・ブリガンベールといふ實直な下僕がちやうどこの邊で見張の役をつとめてゐたことを思ひ出す。

ブリガンベールは巴里の同志のところへ手紙を持つて行つたまゝ行方知れずになつてしまつたが、もし萬一、手箱がまだ椶の樹の下に埋まつてゐたら、マルセルが生きてこの世にゐることだけははつきりする。

どうぞさうであつてくれと一心に心の中で祈りながら、順々に立木を數へて進んで行くと、行手の林の奥から、何ともつかぬ微妙な物音が聞えてきた。

テレエズは、何ともつかぬ戰慄に身のうちを貫れながら、全身耳になれとばかりにその方へ聴き入ると、それは、どうやら、林の中に堆高く落ち積もつた木の葉を掻き分ける音のやうである。



林の深い奥なので、吹き入るほどの風もなく、樹の枝は密々と交へ合つてゐるから葉の間を通して滴り落ちる露の音もない。森閑としづまりかへつた林の静寂を通して聞えてくるのはためらひ勝ちにカサコソと落葉を掻き分ける音。

人か、野の獸が小夜更けに餌を漁り廻はる音か。ときどきフト杜絶えては、また、カサコソとつづく。

もしそれが人なら、こんな夜更けにこんなところで一體何をしてゐるのか見届けてやらうと思ひ、勇氣を揮ひ起してソロソロと進んで行くと、物音はだんだん際立つてきて、鉄のやうなもので地面を掘返してゐる音が本物の手箱を埋めた樹の下あたりからはつきりと響いてくる。

テレエズは、ハツと胸をつかれ、騒ぎ立つ胸を押へて耳を澄ましたが、幾度聞いても確かに地面を掘つてゐる音。鉄の音ばかりかハツハツといふ息づかひまで手にとるやうに聞える。

かうまでにはつきりと手箱の所在を知つて、それを掘出さうとする以上、それはナアロオの配下にちがひない。

これで鐵假面はオビリエ大尉だといふことにきまつた。鐵假面がマルセルならばどのやうな拷問に逢つても手箱の所在などを白状するわけはない。士官の服を着た二人のうち、一人は死んで一人は捕はれたといふことだつたが、すると、死んだ一人といふのはマルセルの方だつた。

マルセルは死んだ！

鐵假面はおろか、たとへどんな残忍な取扱ひをうけようとも命さへあればと、たゞそればかり念じて今日まで辛苦に堪へ、心を張詰めて來たのだつたが、マルセルはあの夜、「半獅神の淵」で死んでしまつたといふのなら、今更、何を望みにこの上苦勞をつむことが要るものか。……今日まで支へてゐた氣丈な心が一時にゆるんで、立木の幹に喰ひついて聲を忍ばせて泣いてゐると、鉄を使ふ音は追焦り氣味になつたが、間もなくあぐねた風に急に手を休め、

『……はて、どうしたものか。いくら掘つても箱らしいものも出て來ない……』  
と呟いた。

その聲はたしかにどこかで一度聞いた覺えがある。テレエズは、ハツとして忙しく記憶の中を探つてみたが、いつどこで聞いた誰れの聲だつたかはつきりと思ひ出すことが出來ない。

それもその筈、いま獨語したその聲は人間の五音を外れた何とも異様なもので、たとへいふならば、土の下から聞える地蟲の聲か洞穴に吹きこむ風の音。抑揚だけでおぼろげに人間の言葉らしいものになつてゐる。なんとも言ひやうのない異様な聲だが、その抑揚はたしかに耳の底に残つてゐる。もう一と聲聞いたら思ひ出すこともあらうとジツと耳をそばだててゐると聲の主は、またしばらくして、



『これア燈火をつけなければとても始末にいかぬ。……こんな夜更けの林の中、いはんや、かうしておけば、たとひ燈火をつければとて、顔を見られる氣遣ひはない。何しろかう暗くは足掻きがつかぬ。ともかく、燈火をつけることだ』

枯枝に木枯が吹きつけるやうなゴツとするやうな聲でかう呟くと、闇の中に躡つて何やらカサコソ言はせてゐたが、そのうちにパツと燧石を擦つて糸蠟燭に火をつけた。

ともしい灯のなかに浮びだしたその姿は、頭から爪先まで黒一色の、影のやうな男。袋のやうに裾のひろがつた釣鐘型の黒い大マントを着、厚手の黒頭巾を頭からスツポリと被つてゐる。さながら闇が凝つて人のかたちになつたかと思はれるばかり。

かうして置けば顔を見られる心配はないと呟いたのはその頭巾のことを言つたのであらうが、闇にも顔を見られるのを怖れるとはよくよくのわけがあるのに相違ない。ペロンヌの要塞では無残な鐵假面を見、ここではまた物々しい黒頭巾。どうして誰れもかれもこんなふう顔ばかり隠さうとするのか？ あつた鐵假面とこの黒頭巾の間に何か疎通した關係でもあるのではなからうかと考へながら、木立の蔭から眼だけ出して窺つてゐると、闇の化神のやうな黒頭巾の男は、これでよしといふふうに頷いて、また鉄を取上げて檜の樹の根下を掘り始めた。

いま黒頭巾が掘つてゐるところは手箱を埋めた場所から一尺ほど離れてゐるが、この檜の樹の根下

をその場所と知つてゐるからには、いづれ間もなく掘出されてしまふにちがひない。現在、加盟書を入れた大切な手箱をムザムザと持去られるのを見ながらそのまま見過してゐられるわけはない。たとへかよわい女の身でも手箱だけはどんなことがあつても奪ひ返さねばならないと心を定めてゐるうちに、黒頭巾の男は、

『あゝ、暑い暑い。こんなものを被つて鉄など振りまはしてゐると息が詰まりさうになる』

と言ふと、カラリと鉄を投出して枯葉の上に胡座をかき、汗を拭くつもりかソロソロと頭巾をはづしはじめた。

さて、糸蠟燭の光に照らし出されたその顔は！

それは顔などといふやうなものではない、まさしく一箇の骷髏。ついさつき無縁墓地で見た骷髏そのまゝ。

眼瞼が無くなつて、眼窩からいきなり眞丸い大きな眼玉が二つキヨロリと現はれ、鼻のあるべき場所には、細長い三角形の暗い孔があるばかり。

頬の肉も唇もあとかたもなくなつて、三角の孔のすぐ下で七八分もあらうかと思はれる馬のやうな長い歯がニュツと伸び出してゐる。

骨の色は泥のやうに蒼黝く沈んで、頬や颧のあたりにところどころ僅かに残つた皮膚は乾涸びて



干貝のやうにチリチリと振れてゐる。

すさまじいといはうか、物凄いと云はうか、あまりの怖しさに、さすがのテレエズも、ひツと息をひくと、ズルズルと枯葉の上に崩れ落ちてそのまま氣を失つてしまつた。

それからどれほど時刻が経つたか、どこからともなく吹きくゞつてくる冷たい夜風に吹かれてフツと我にかへり、ソツと身體を引起して林の間を透して見ると、さきほどの觸體男はもうそこから立去つたと見えて、風に舞ふ微かな枯葉の音が聞えるばかり。

それにしても、あの凝然たる一瞬にじぶんの眼が見たものはいつたい何者であらう？

人のやうで人ではない。半は死身、半は生身。首からは冥府に屬し、身體だけはこの世の人のかたちを具へてゐる。實に奇とも怪とも言ひやうがない。

テレエズは立木の根下に坐つてさまざまに考へて見たが、それがはたして人であつたのか或ひは魔物であつたのか、はつきりと辨別することが出来ない。

かうして坐つてゐる自分にしてからが、實は、もう魔界の間の中に閉ぢ込められてゐるので、二度と再び陽の目を見ることが出来ないのだといふやうな氣がし出してきて、何とも心細く、身動きさへ出来ずに凍んでゐると、そのうちに、どこか遠いところからかすかに鶏の聲が聞えてきた。

『あゝ、鶏が鳴いてゐる』

思はずさう呟いて、葉繁みの間から空を見上げると、はやもう拂曉とみえ、梢の上がほのぼのと白くなつて来た。

やれ嬉しやと、凍んだ膝を伸して立上り、さつきまで觸體男がゐた樫の根方まで行つて見ると、すぐ傍で自分が氣を失つて倒れてゐることに氣づかず、セツセと掘りつゞけたものと見え、木の根下は深い穴になり、埋めて置いた筈の宝箱はもうそこには無かつた。

もう一日早かつたら、事なくじぶんが掘出してゐたものを、病のためとはいひながら四十日も空しく日を費してしまつたことも不運なれば、現在、眼の前で宝箱を掘出されるのを見、それを押し止むべき寸前に氣を失つてしまつたといふのもこれも不運。今更嘆いて見ても仕様のないことだが、それにしても、訝かしいのはそれを持去つた男の素姓である。

ラ・ヴォアザンは、手箱を掘出しに来るものがあつたら、それは必ずナアロオの手先にちがひないと言つてゐた。あのやうな凄じい男が政府の役人などあらう筈もなく、ルーヴォアアやナアロオの手先であるとも思はれないが、假りにさうとすれば、わざわざ真夜中を擇んで顔を包んで忍んで來なければならぬいはれはなく、まして、闇の中で鉄を使ふやうな真似をする筈もない。

あの男がナアロオの手先でないとする、従つて、鐵假面がマルセルかオビリエ大尉かといふこの問ひは依然として謎のまゝに残されてゐる。



この林へ手箱を掘出しに來たのは、加盟書を焼捨てる用向のほか、マルセルの生死の手掛を得たといふ必死のねがひがあつたのだが、手箱を奪はれたばかりではなく、そのねがひも空しくなつてしまつた。

これから先、どういふ手段で鐵假面の正體を探らうか？ 果して、「死の牢獄」とまで言はれる嚴重なバスターユへ送られたのだつたら、多寡の知れた女の力では、そんなことを望むさへ既に覺束ない業なのであらう。

世の中の同じ年頃の娘たちは何の屈託もなく楽しく日を送つてゐるのに、じぶん一人はどういふ不幸な星の下に生れて來て、かうまで苦勞をしなければならぬかと思ふと、悲しみは胸に充ちて來て、誰れ聞くものもない林の中をせぐりあげて泣きながら、トポトポと出口のはうへ歩いて行つた。

## 二、若い富裕な未亡人

並に、殺さぬといふ誓

佛蘭西巴里府の西端、聖タントアンヌのバスターユ監獄の近くにジャン・ボウジールといふ町がある。

水藻の浮いた錆色の濠の水を隔て、苔の蒸したバスターユの堡壁がいきなり空衝くやうに立ちあが

り、朝々の號音喇叭や夕の閉門合圖の小太鼓の音が手に取るやうに聞えてくる。

その町の小ぢんまりとした邸へ、この二た月ほど前からボオフォールの田舎から出て來たラ・ハイエと名乗る年若い美しい富裕な未亡人が住むやうになつた。

結婚して一年経つか経たぬうちに主人に死別れた不幸な身の上さうで、コフスキーといふ四十二三の頑丈な身體つきの下僕を使つてのどかさうに暮してゐる。

年の頃はやうやく廿歳ぐらゐだと思はれるのに、身のこなしにどこか老けたところが見えるのは、やはり歸らぬ人の追慕に朝夕こころを奪らせてゐるからであらう。

暮近い午後の陽がマロニエの葉繁みを透して薄緑の光を斜に部屋の中へ射しかける。窓のそばに伊太利風の長椅子があつて、喪服をつけた美しい婦人が屈託あり氣にひつそりと掛けてゐる。

卵型の優雅な顔の輪廓に沿つて軽々とした髪が金の泡のやうに縁取り、新月のやうな細い眉の下に夢見るやうな大きな眼が深々と見開かれてゐる。たとへどのやうな婦人が身につけても薄鼠の喪服がこれほどよく調和はしまい、簡素なこの装ひがかへつて本來の美しさをひきたて、溢れるやうな若さに程のいゝ落着きを與へてゐる。

扉が開いて、肩や胸に力士のやうに筋肉を盛上げた四十ばかりの頑丈な下僕が入つて來て、叮嚀にお辭儀をしてから、



『そろそろベスモオ典獄の晩餐にお出かけになる時刻でございます。云ひつけの馬車も、もう参つて居りますから……』

と、告げた。

ラ・ハイエ夫人は懶さうに頷いてから、

『これで、もう五度の上も食事に招かれてゐるけれど、いつ行つてもとりとめない話をして歸るばかり。こんなことではいつになつたら埒が明くのか……』

歎くやうに言ふと、下僕は、心深げな口調で、

『私とてもゐても立つてもゐられぬやうな心持がいたしますが、しかし、一方からかんがへますと、普通の手段では、近づくことも取入ることもならない典獄夫妻のお茶や食事に招かれるやうになつたといふのは、いはば、成功の第一歩。どうか撓まずお努めになつてください』

と、宥めるやうに言ふ。

ラ・ハイエと名乗る若い婦人は、あの夜、聖ジャン寺の林のなかで鬪體男に鐵の手箱を盗み去られたテレエズ・ヴァンダムだつた。

あの朝、聖ジャン寺の門を立出でると、すぐその足でグラン・ブライースの廣場へ行つて巴里行きの一歩の驛馬車に乗込んだ。

巴里へ着くとラ・ヴォアザンを訪ねて、あつた通りのことをくはしく物語つたが、人並外れて頭腦の鋭いヴォアザンも、その男が果して何者か確かな判断を下すことが出来ない。この上は焦らずに氣長に詮索するほかはない。もし、それでも力の及ばないときは、たとへ鐵假面がどんな嚴重なところに閉籠められてゐても一夜で助け出すことが出来る方法もあるのだから力を落すには及ばないとさまざまに慰めた。

伯爵夫人のはうは、ほかに誰れも手箱のことなどを知つてゐるものはゐないのだから、凄まじからうと鬪體のやうだらうとその男こそはナアロオの手下にちがひない。誰れではあれ、手箱を掘出しに來たといふ以上、鐵假面はロリツプにちがひないのだから、じぶん一人の力で助け出してみせると、テレエズの愁ひ色も氣にかけずに嬉しさうに高笑ひをするのだつた。

コフスキーは鐵假面の送られた先を捜るためにペロンヌの要塞へ入りこんでゐるが、辛辣陰險なナアロオ密偵長がルーヴォア侯の意を受けて、先鋒隊十五名の消息を佛蘭西の歴史の外へ葬つてしまはうと必死の智能を傾けただけあつて、コフスキーの努力をもつてしてもたやすくは手掛りが得られなうとみえ、はや五十日も過ぎたが、まだ何の便りもない。

テレエズは、ルヴォアザンの家の奥まつた部屋に身を潜めて瘦せるやうな思ひで待つてゐると、それから半月ほど経つてから前觸もなく突然コフスキーが歸つて來て、鐵假面はバスチーユにゐること



が確かにになりましたと報告をした。どれほどひどい辛苦を重ねたのか、まるで別人のやうに憔悴して、見るさへ涙を催さずにはゐられぬほどだった。

バスチーユに程近いジャン・ポウジュール街に空家があるのを幸ひ早速その家を借り、ポオフオールから出て来た金持の未亡人といふ觸込みで近所の衛兵士官の家族や監獄に出入する判事などに如才なく懇意を結び、この界限で愛想のいゝ奥さまといへばテレエズのことを指すほどになった。

何かの時の用意にとモーゼルの城館を拔出すときに衣服の裾へ縫込んで来た寶石があるので、誰彼なしに贅澤な食事に招き、懇意になつた監獄の使丁などには無理から理由をこしらへて少からぬ心づけをするので、ラ・ヘイエ夫人をそやさぬものは一人もない。

この家へ移住んでから今日でちやうど四月、これと思ふところへは抜きなく手蔓を求め、及ぶかぎりの努力をしたが、どの牢番も衛戍士官も假面などをつけた囚人は一向に見かけぬといふ返事。手掛なるほどの消息も得られぬものだから焦つてはならぬとは思ひながらつい心が苛立つてくる。

主従がしめやかに話合つてゐるところへ、門の前に馬車がとまる音がし、目立たぬ服装で部屋へはうつて来たのはラ・ヴォアザン。

いつもの沈着にも似ず、挨拶もそこそこに二人のそばに近づき、

『お喜びなさい、鐵假面はたしかにバスチーユにゐます。……ベルト・オウジエール塔の第二號監房

にゐるのです』

おゝ、それはとテレエズとコフスキーが一時に椅子から飛びあがるのを、ヴォアザンは手で押へ、

『いま順々に話しますから、まア二人ともその椅子へかけて……』

じぶんも椅子を引寄せ、例の底知れぬ深い眼差でゆつくりと二人の顔を見比べながら、

『テレエズさん、今までさまざまに骨を折り少からぬ金も使ひ、また、あれこれと手蔓をたくつても一向消息が知れなかつたのも道理。さすがナアロオのすることには抜目がない。今日まであなたが逢つた牢番どもは、みなほかの塔や地下牢の係で、鐵假面のあるベルト・オウジエールの塔には縁もゆかりもない者ばかり。……オウジエール塔の二人の牢番はルーヴォア侯とナアロオの命令で塔のなかに特別の詰所をあてがはれ、寝ることも喰べることも何もかも一切その詰所ですませ、塔の外へは一步も出さぬ規則なのでほかの牢番のやうに居酒屋へなぞやつて来ない。牢番の中にもその二人の顔を知らぬものが多勢ゐるくらゐなのですから、牢獄の外であなたがどんなに手を盡しても逢ふことも見ることもなかつたといふわけです』

コフスキーは、うるさく頷いて、

『なるほど、なるほど。そのくらゐの要心は當り前。そこに氣がつかなかつたのがをかしくらゐ。……すると、ソノ何ですか、ほかの牢番たちは、眞實、鐵假面がバスチーユにゐることを知らぬので



「ごさいますか」

「それは知りません。眞夜中に嚴重の覆ひのかかつた興で塔のなかへ運びこみ、典獄が自分で監房の鍵を持つてゐて、二人の牢番さへ、監房の近くへは寄せつけないくらゐにしてゐるのだから、ほかの牢番などは見ようにも鐵假面の姿などは見られぬわけせう」

テレエズは、不審さうな面持で、

「それほど嚴重に取仕切つてあるといふのに、どんな方法であなは鐵假面がゐることをお突きとめになりましたの」

「私ではありません、ソアツソン伯爵夫人が典獄の年金の二倍にも當る大金を使つてその二人の牢番を抱込んだのです。……そればかりではない、いざといふ時にその高い塔の窓から逃出させる巧妙な道具まで手に入れてしまひました」

コフスキーは、思はず身を乗出して、

「巧妙な道具と申しますと？」

「第二の第二監房といへば塔の最頂上の部屋で、その窓から地面までは少くとも二百三十尺はありませう。さういふ眼も眩むやうな高い窓から抜出すのは容易な手段ではいきませせん」と言つて、ニツコリと笑ひ、

「巴里といふのは不思議なところで、さういふ種類の忍び道具を専門に造つてゐる細工師がをります。……それはどんなものか、ひと口にいふと、總體、極めて丈夫な絹糸で作つた細い梯子なのですが、二百三十尺にもあまるその絹糸の梯子は丸めると掌のなかへ隠れてしまふといふ精巧なものです。……それで、私の考へを申しますと、かうしてゐたつて、いつになつたら鐵假面の正體がわかるか知れたもんじゃない。このやうな國家の祕密に屬する極秘の囚人は、あちらの島こちらの牢獄と無闇に居所を變へ、どこにゐるものやら所在がわからないやうにしてしまふのがルーヴオアのいつもの遺口なのですから、こんなことをしてゐるうちにソツとどこかへ移されてしまつたら手も足も出せぬやうになります。ともかく、鐵假面はアルモアーズかオリビエかなどと悠長なことを言つてゐないで手近なバスターユにゐるうちに救出するのが第一。……救出しさえすれば、否でも應でも、どちらかはつきりするわけですから」

テレエズには、もちろん否はなく、

「救出す工夫があるといふのでしたら、何も正體がわかるまで待つてゐることは要ないことですわ。あたしにしたつて、すぐにも救出したい位の氣持です」

「これで意見がまとまりました。……ところで、前以つて申しておきますが、ご承知の通り、わたしはソアツソン伯爵夫人の領地に生れ、まだ小さなときからお傍へ上つていろいろお世話を受けた身の



上。伯爵夫人は、つまり、あたしの主筋。たとへ鐵假面がはつきりとロリツプだとわかつてゐてもやはり救出さねばならないのですから、それは、豫めご承知置きねがひますよ』

と言つて、二人の方へジロリと流眄をくれ、

『……牢番の話ですと、鐵假面はときどき苦しうに呻いたり、大聲でわめき散らしたりするさうです』

コフスキーは、鸚鵡返しに、

『なに、鐵假面が呻きますと？……あゝ、それならば旦那さまではありません。旦那さまなら、どんな辛い場合でも聲を出したり呻いたりなさるやうなことはありません』

ラ・ヴォアザンは、落着拂つて、

『多分さういふだらうと思つてゐました。……ところで、また後があるのです。鐵假面はときどきソアツソン伯爵夫人の名を呼んで、俺がこんな辛い思ひをしてゐるのに、なぜ夫人は救つてくれないのか、せめて、それくらゐの情けがあつてもよかりさうなものだなどと呟くさうです』

ここまで聞けば、鐵假面はもうオリビエ大尉に極まつたと、テレエズとコフスキーは無言のまゝ同じ思ひで眼を見合せてゐるのをヴォアザンは氣のつかぬさまで言葉をつづけ、

『……鐵假面がわれわれが送つた道具を使つて無事に塔から拔出したとしても、濠の幅は十五間もあ

るので、あの重い假面をつけたまゝではとても一人で濠を渡り切ることは出来ません。これを介錯するのは、やはり男のコフスキーの役。……それで、テレエズさん、あなたはどういふ役に廻りますか』

テレエズは、ちよつとの間、眼を伏せてかんがへてゐたが、何事か思ひ定めたふうで急に顔をあげると、

『あたしは濠の岸で待つてゐて第一番に鐵假面のそばへ行き、それが、マルセルかオリビエ大尉か見分ける役をつとめませう。こちらが聲をかけて向ふが返事さへしてくれたら、あたしなら、たつたひと言でどちらかはつきりと判定出来ますから』

ラ・ヴォアザンは、ホ、ホ、と笑つて、

『問ふに落ちず語るに落ちるとはこのことね。多分さういふ返事をなさるだらうと思つてちよつと氣を惹いて見たのです。……テレエズさん、あなたは第一番に鐵假面のそばへ行き、それがオリビエ大尉だとわかつたら夫人の手へ渡さずにその場で刺殺してしまふつもりなのでせう？』

キツパリと言ひ當てられ、テレエズは顔を染めて、

『そこまで洞察されたら、正直に申します。オリビエ大尉だつたらその場で殺してしまふつもりでした』



「あなたの氣持はよくわかりますが、でもね、テレエズさん、伯爵夫人の身になつてかんがへてごらんさい。これまでさまざまに骨を折つて鐵假面を救出し、じぶんの腕のなかへ搔抱くその寸前にあなたに殺されてしまつたとしたら、その心はまアいつたいどんなでせう。それではどうにも諦め切れません。……われわれの眼から見たらあんなつまらない男でも、そこが下世話にもいふ戀は思案のほか。佛蘭西で一といつて二と下らない高貴の身分でゐながら、無事にロリツプを救出することが出来たら家柄も屋敷もみな振棄て、兩人で外國へ駈落し、人目のつかぬ片田舎で半生を送るのだと言つてゐます。……さうまで思ひつめてゐるものを、ムザムザあなたに殺させては夫人に對する恩義が立ちませんから、この話はこれつきりにして、あなた方の知らぬ別な方法で鐵假面を救出することにします」

『えッ、それは……』

「テレエズさん、よく考へてごらんさい。鐵假面が獨言を言ふなどといふのは後金欲しさの牢番たちの出任せかも知れない。そんな取とめないことを信用して鐵假面がオビリエ大尉だと頭から極めてかゝるといふのはどうでせう。わたしがいま他の方法で助け出さうとすると、その準備に少くとも二年や三年はかゝります。萬一、その間にほかの牢獄へ移されてしまつたら、ひよつとするとアルモアーズかも知れない鐵假面を救出す望みは永久に失はれてしまふわけ。テレエズさん、それでもよろし

507

テレエズは、激しく首を振つて、

『待つて下さい。それでは、困ります。……では、どうしたらよろしいのでせう』

『べつにむづかしいことはありません。もしアルモアーズなら言ふまでもなくお二人が引取る。またロリツプだつたらその場は綺麗に夫人に引渡すとさへ誓つてくださればそれでいゝのです。……一旦夫人に渡したうへ、どうしてもアルモアーズや先鋒隊の仇を討たうといふのでしたら、その後で改めて決闘を申込むとか、二人が駈落した先まで追つて行つて殺すとか、それはどうともお二人の勝手ですがともかく一度は夫人に渡すとキツパリ約束していただくのでなければこの相談はこれで打切ることになります』

ラ・ヴォアザンの立場を考へると、さう言ひ張ることは決して無理とはいへない。鐵假面があつた憎むべきオビリエ大尉だとしても、復讐する機會はいくらもある。感情に驅られてこちらの言分を通さうとすると、眼の前にあるかけ替へのない機會をみすみす逸するわけだからテレエズはすぐ心をきめ、

『では、お誓ひします』

『確かに、一度はロリツプを夫人に渡しますね』

『かならず渡します』



『コフスキー、お前も誓ひなさい』

『お嬢さまのお心は取りもなほさず私の心。確かに誓ひました』

ラ・ヴォアザンは、穩かな顔付になつて、

『それでよろしい。さう話が決つたら、いよいよ救出しの計畫にとりかかることにしませう。……しかし、それだといつても、先程も申したやうな嚴重な警戒ぶりなものですから、右から左へといふぐあひには行きません。早くとも一月はかかりませう。……テレエズさん、あなたはその間、今まで通りしげしげと典獄のところへ出入りして何によらず充分に訊き込んで置いてください』

ル・ヴォアザンが歸つて行くと、間もなくテレエズはベスモオ典獄の晩餐に連るためにバスチーユ監獄へ馬車を駛らせた。

### 三、サンマルスの晩餐 並に、ルーヴォアの戀

バスチーユの歴史をたづねると、はじめは巴里市の西の護りとして築かれた壯麗な堡城なので、外國使節の旅館にあてられたこともあり、ルイナ一世やフランソア一世などはこの城で豪華な祝宴を催したこともある。

典獄といへば卑俗下級な職のやうに思はれようが、地方の小監獄の典獄とことちがひ、佛蘭西第一の大監獄バスチーユの典獄といふことになればその權威は決して軽いものではない。位階からいへば市長の次ぐらゐにあたる役柄で、年俸六萬リヴルといへばその方でもまづ頭株のみならず、役得の多い役目で、身分のある囚人がこゝへ送られて來るたびに特別の配慮を願ふため、親類縁者から密に贈られる袖の下だけでも年俸の十倍にものぼる。

官邸は牢獄の中庭にこそあるが三方に廣い庭をめぐらした立派な建物で、厩舎には十頭あまりの馬を繋ぎ、料理場には腕利きの料理番が十五人も控へてゐようといふ大貴族にも比すべき暮しをしてゐる。

何ひとつ不自由なことはないが、役儀柄外に出することは極く稀れで、知人の客間を訪ねるといふ社交の愉しみは許されないから、非番の日にはかならず晩餐會を催し、客を招いて饗應するのがせめてもの心やり。

今日は九月の第三の日曜日なので細かい雑務は下役に委せ、早目に典獄室を出て廣い中庭を横切り今日はどういふ新しい客の顔が揃ふかと愉しみにしながら玄關からすぐ妻の居間へ行き、  
『妻や、今日は誰々から出席の返事があつた。すゐぶん鄭重に書いてやつたからジュスコール子爵や銀行家のベルモンなども出席するといつてよこしたらう』



と訊ねると、典獄の妻のリュシイヌは氣がなさうに化粧机の前から立上がり、卓の上の角封筒の束を指しながら、

『例によつてみな體裁のいい斷り状ばかりですわ。典獄といふのは首斬役人だとも思つてゐるのかしら。かうまで毛嫌ひしなくともよささうなものを』

と言つて、長椅子へ身を投げかけ、

『典獄なんて何ていやな職業なのでせう。ほかの夫人たちはオペラだ舞踏會だといつて楽しく遊び暮してゐるのに、こんな陰氣な城壁の中へ閉籠められてめつたに外へ出ることも出來ず、世間から見捨てられて囚人同様なつまらない日を送らなくてはならないとは』

ベスモオは、眉を擧めて、

『それで、ラ・ヘイエ夫人のはうはどうだ』

リュシイヌは急に笑顔になつて、

『ほんたうに、ラ・ヘイエ夫人といふのはなんとといふ人懐こいひとなんでせう。それも愛想のいい返事を添へて、それはそれは、念の尽つたお禮の手紙でした。小判事夫人と一緒にかならずお伺ひするといつて』

ベスモオは萎びた顔を笑崩して、

『うむ、さうか。それでせつかくの料理が無駄にならずにすんだといふものだ。この邊が典獄の身分相應と諦めるほかはあるまい。嫌がるものを首に繩をかけて曳つぱつてくるわけにもゆくまいし』

典獄の妻は胸にをさめかねることがあるといふふうにキツと夫のはうへ向直つて、  
『あたしたちの晩餐を毛嫌ひするのは典獄といふ名のせむばかりでなく、あなたの客あしらひが失禮なので、それで腹を立ててだんだん來ないやうになるのですよ』

『なに、わしが失禮な素振をする』

『え、さうです。氣がつかぬといふなら言つてあげませう。……食事が始まつてこれから愉快を盡さうといふ頃になると、あなたはきつと、大事な客がありますから一寸失禮と言つて座を立つて、一時間の上も食卓へ歸つておいでにならない。馬鹿にすると思つて嫌氣が出てそれで二度とやつて來ないやうになるのですわ』

『あ、そのことか。……それなら、その都度、大事な客といふのは、實は、ある囚人のことなので、と叮嚀に斷つてゐる』

『訊いてはならぬといふことですから、この五月の間一度もお訊ねしたことはありませんでしたが、今日、晩餐の材料をとり獄舎の料理場へ行つて、偶然、第二塔囚人用の献立といふのを見ましたが、海老の吸物に積の肉、若鶏の煮込みに栗の附合せ、鶏卵が二個、杏子の甘露煮、葡萄酒が二本に食後



はメロンとは實にどうも驚き入つた贅澤な献立ですわね。あたしどもの晚餐よりまだましなくらゐ。あのぶんでは一日に五十金法の上もかかりませう。あゝいふ贅澤な待遇をするところをみると、たぶん貴族でもあるのでせうね』

ベスモオは言葉を濁して、

『さア、どういふ身分の者かわしもくはしくは知らんが、何かよツほど大切な囚人だとみえ、ルーヴオアさまから直々に食事を上等にせよといふ命令があつたので、わしはそれに従つてゐるばかりだ』

『夕食のときになると、あなたが出かけて行くのは、その囚人のためなのですか』

『さうだ』

『何をしにいらつしやいますの』

『これもルーヴオア侯から嚴重な達示で、わしが直々に食膳を持つて塔へあがり、食事がすむとまたそれを持つて戻つて來ることに極められてゐるからだ』

『おや、それは可憐なこと。バスチーユの典獄が直々に囚人の給仕をするなどといふのは後にも前にも聞いたことがありません』

ベスモオは照れくささうに額へ手をやり、

『何であらうとさういふ命令なのだから仕様がな。ルーヴオア侯は前觸もなく不意に塔へあがつて、

來て、命令通りに行届いてゐるかどうか検分するのだから油断がならぬ。客をさて置いても、食膳を持つてヨチヨチと塔の天邊までのぼつて行くといふわけなのサ』

『そんなことは典獄の權威にかゝはるから下役に命じてくれと言張りなさればいゝものを』

『ところが、さうゆかないわけがある。わしが食膳を運んで行くのは、何も鄭重にするためではない、實のところは、牢番たちに囚人の姿を見せたり、あまり近くへ寄せまいための用心なのだ。だから、その監房の鍵だけは牢番長にも委せず、かうしてわしの腰へ括りつけ、監房の扉の開閉一切、わし

が手づからやつてゐるのだ』

リュシイヌは、フンと鼻で笑ひ、

『よくまア、そんなにお慌けなさいますこと。お隠しになつても駄目です、あたしにはちやんとわかつてゐるんですから。……なんだかんだと誤魔化していらつしやるけど、それはたぶん齡の若い美しい伯爵夫人か何かなんぞでせう。どうせ人目のない監房のなか。まして、牢番も近づけないといふんだから何をしてゐるのか知れたもんじゃない。……なるほど、そんなわけなら大切なお客もなにも平氣で放つばらかすでせうよ』

ベスモオは、閉口して、

『これこれ、いゝ加減にしないか。くだらぬにもほどがある。かうなつたらしやうがない、ほんたう



のことを言ふが、それは美しい伯爵夫人どころか頭からスツボリと鐵の假面を被された化物のやうな奴なのだ」

「まあ、頭から鐵の面を……」

「假面といふよりは鐵の丸のやうなもので眼と口のところに孔があるばかり。あとはのつぺらぼうで、まるで海坊主の化物といったていたらくだ」

「どんな罪で、そんな酷いことを」

「どういふ罪かわしも知らぬが、所詮、その囚人の顔をひとの目から隠し、身分を知らさず終らせる手段だとみえる。この假面はナアロオ密偵長が考案で、巴里一の甲冑細工人アンドレエが造つたものださうで、右の耳の後に假面を外す錠前仕掛があるが、その合鍵は密偵長がペロンヌの淵へ捨て、まつたので、どんな手段を用ひてもそれを外す方法がないといふことだ」

「それはまたたいへんに嚴重なこと。……でも、そんな面を被つてゐるとすると食事などはどんなふうにするのです」

「だから、このわしがいちいち介錯してやるのだ。吸物は一と匙づつ口へ入れてやり、肉ならば手頃に切つて運んでやる。手數のかゝることといつたら實に夥しいものだ。……わしが命令通り忠實にやつてゐるのでルーヴオア侯も安心したとみえ、この頃は唐然に檢分に来るやうなこともなくなつた。

やうやく下役に委せられるやうになつてヤレヤレだが、ひと頃は、實にもう難儀した。……食事のことだけならいゝが、ルーヴオア侯が鐵假面の訊問に来て監房で差向ひになつてゐる間、蚊に攻められながら廊下の端で立番をしてゐねばならず、少し加減が悪いといつては駈つけ、ちよつと不自由なことがあるといつては呼びつける。どうにも人使ひの荒い奴で、退屈だから本を讀めの歌をうたへのと、五十八になるこのわしをさながら小使同様に使ひまくる始末。典獄をして長年になるが、こんな酷い目に逢つたのははじめてだ」

リュシイヌは、同情と輕蔑が相半ばしたやうな眼つきでベスモオの顔を眺めてゐたが、何か急に思ひ出したふうに手を拍つて、

「あ、さうさう思ひ出しました。半月ばかり前、ソアツソン伯爵夫人が監獄の彌撒を見にいらした歸りに、あたしのところへお寄りになり、この牢獄に頭に鐵の袋を被された風變りな囚人がゐるさうだが、それは本當かとお訊ねになりましたが、あたしは知らぬものだからそんな者は噂にも聞きませんとお答へしましたが、あゝ、すると何です、それはひよつとするとソアツソン夫人の縁引に當る人かも知れませんか」

さう言つてゐるところへ小間使がはいつて来て、ラ・ハイエ夫人と小判事夫人がお見えになりましたと告げる。



ベスモオ夫妻は、わざわざ玄關まで出迎へ、お世辭タラタラ食堂へ導き入れ、四人で食卓を圍み、さまざまに世間話をしながら夕食を始めた。

それから一時間ほどして食事も追々終りに近づかうとする頃、玄關の方に物々しいほどの足音がきこえ、誰か急いではいつて来たやうな氣配だつたが、何かと怪しむ暇もないうちに大股に廊下を踏みとどろかして食堂の入口にまで来、案内も乞はずに不遠慮に扉を押開けるより早く、

『オイ、ベスモオはゐるか』

と、破鐘のやうな聲で叱咤した。

人が食事をしてゐるところへ案内もなく入つて来て頭ごなしにその名を呼捨てにするなどは實に無禮極まつた仕方であるのに、ベスモオはその無禮を咎めるどころか、大悪事の現場を押へられた悪人でもあるかのやうに、髪の毛のなかまで土氣色になり、瘡にかかつたやうに手足をワナワナと震はせながら、

『おツ、こ、これは、ルーヴオアさま』

と、言ふ聲もやうやく聴取れるか聴取れぬかといふほど。椅子から立ちあがらうにも足が萎えて役に立たぬといふていで、その周章のさまは見るも哀れなばかり。

いまこの食堂へはいつて来たのは、當時、ルイ十四世の權力の行使者。かの有名な「玉璽狀」と

いふ白紙の逮捕狀を亂發して無辜の人々を投獄處刑し、ナントでは四萬の新教徒を虐殺し、殘忍極悪の故を以て全歐洲にその名を轟かした佛蘭西第一の大政治家フランソア・ミツシエル・ル・テリエ・ド・ルーヴオア侯爵であつた。

愛するマルセルが新教徒のゆゑで舊領と榮爵を褫奪し、ナアロオ密偵長に命じて數多の志士の命を奪ひ、遂には謀計によつて先鋒隊十三人の命を「半獅神の淵」に沈め、生残つた一人に鐵の假面を被せて終生生きながら葬つてしまふといふ殘忍な刑罰をかんがへ出したこれがその當人かと思ふと、この長い間の怨みや怒りが一時に勃然と胸先へ衝きあげてきて、思はずワナワナと身が震へる。

覺られては身の破滅。鐵假面救出の計畫も水の泡になる。思ひを表面に現はすまいとすると、ひとりでに額に冷汗が滲んでくる。しかし、今が大事な場合だから煮え返るやうな胸をおさへ、去氣ない顔色を作りながらルーヴオアの顔を眺めあげると、ルーヴオアは今年卅二歳と聞いてゐたが、一體に沈痛な風貌で年齢よりも遙かに老けて四十歳位には見える。

身の丈は左程高いといふほどではないが骨組はがつしりとして、さながら山から切出した岩石のやう。顔の色は飽くまでも黝んで總體に紫色になり、情け容赦のない酷薄な相は顔に溢れ、顔全體がいつも激怒してゐるやうな近寄り難い貌。皇族も軍人もルーヴオアの前に出てこの顔を仰ぐと何となく身が縮む思ひがするといふのも決して無理ではない。



なかんづく、猛々しいのはその太い眉で、眉間に少しの隙間もなく太い一の字に連がり、それがものを言ふたびに上下に動く。房々とした眉毛の下には一種毒々しい窪んだ眼があつて、その光は人を射るやう。愛想とか恩情とかいふらしいものは一點もなく、たゞもう凄まじいばかりの容貌。

佛蘭西の宮廷といへば、華美の中の華美。粹と優雅の集會所。いづれの廷臣も、いづれの女官も、服装を飾り贅を競はないものは一人もないのに、軍務宰相たるこのルーヴオアばかりはいさゝかも宮廷の風になじまず、市民か下級の税吏かとも思はれるやうな褐色の粗末な狹上衣に膝までとどくやうな武骨な廣口靴を穿いてゐるので、頑固な風貌にいよいよ以て嚴しさを添へる。

典獄の妻は恐る恐るの體でルーヴオアのそばに近づき、オドオドと空々しい空世辭を述べたてるのにルーヴオアは耳も藉さず、怒髪天を衝くともいはずばかりの形相で、

『コレ、やい、ベスモオ、このさまは何だ。特別に貴様に命じておいた大事な職務はどうした。……第二監房の夕食時だといふのに、それを捨置いて女を集め、こんなところで人がましく酒を飲み耽つてゐるなどは、實に以て言語同斷。なぜ第二塔へ行つてあの者の食事のすむまで附添つてをらん。返答によつては即刻只今罷免して、またビニユロールの山のなかへ追戻してくれるから。……さア、吐かせ』

ベスモオは、はやもう魂も身に添はぬふうで、何を言ふのもシドロモドロ。

『……はい、はい、いま、仔細に申しあげます。……實は、それを申しますのは、私の下役にさういふことにたいへん手馴れた者がをりますので、覺束ない私などよりはそいつ奴のはうがよつほど優しだと思ひ、私の代理を勤めさせて置いたやうなわけで。……はい、決して怠けるの職務を忘れたなどといふやうな次第ではございません』

ルーヴオアはセセラ笑ひ、

『これは面白い。さういふ器用な下役があつて貴様より役に立つといふのなら、一年六萬リブルの高い年俸を拂つて貴様などを雇つておくことは要らん。貴様を罷免してその下役を典獄にしようぢやないか。國家の費用も半分ですむわけだから』

ベスモオは、風に吹かれる蘆のやうに身體を顫はせ、

『何とお叱りを受けましても、重々私の不始末。これから早速第二塔へ参りますから、今日のところは特別のお見逃し。もうこの通り行きかけてをりますから』

見苦しくペコペコと頭を下げ、後退りしながら扉のところまで行つてそこでまた二三度最敬禮をしてから轉ぶやうにドタドタと玄關の方へ走去つた。

典獄の妻も小判事の夫人も生きた心もなく眼を伏せてゐると、ルーヴオアはまだ怒氣がをさまらぬか息遣ひも荒く、鋭い眼差で居並ぶ三人を一人づつ順々に睨めつけてゐたが、そのうちに何を思つた



かズカズカとテレエズのはうへ近寄つて来て穴の明かんばかりその顔を見詰めはじめた。

テレエズはハツと胸を轟かせ、さてはたうとう看破られてしまつたか。とすると、じぶんの肩に手をかけ、人を呼んで捕へさせるのは、あと一分の間かと觀念の臍を定めてゐると、ルーヴオアはなほも執拗にテレエズの顔を見かう見してから、唐突に、

『モンご婦人、あなたは、そもそもどのどなたですか』  
と、不躰に問ひかけた。

テレエズは咄嗟にはどう答へやうもなく、息も詰めて黙してゐると、小判事の夫人はおづおづと傍から引取つて、

『この御婦人はラ・ヘイエ夫人と申して、ついわたくしの隣家に住まつてゐられますところから心安くいたしてをりますので。……ポオフォルの田舎からお出でになつて、巴里には知合もないといふことで、それでわたくしが典獄夫妻にご紹介申したのですが、ならぬといふことであれば、以後、二度とこの席にはお連れしませんから』

と、追従と卑屈の使分けをして下手に出て謝まると、ルーヴオアは俄に口調を和らげて、  
『いや、何も不可ぬなぞとは言つてをらん。早呑込をしてもらつては困る』  
と、極めつけておいて、テレエズの方へ向直ると、猛々しい顔を愛想笑ひで揉みほぐし、

『……あなたはラ・ヘイエ夫人と仰しやるか。いや、どうもたいへんにお美しいことです。宮廷にも女性が多いが、あなたのやうな品格と美が兼備はつた婦人をまだ見たことがない。……うむ、お支障りなくば、わたくしもこの座に連なる光榮を得たいものです』

テレエズの返事も待たずに、典獄の妻に向つて、

『私は第二塔を見廻つたら、すぐさまここへ引返して来るから、私の食事も用意しておいていただけうか。おわかりだナ。すぐ引返して来るから』

典獄の妻は、泣かんばかりに喜悅して、

『これはどうも、望外な光榮で。……かういふむさくるしい晩餐の席に大宰相のあなたさまがお臨みくださるといふのは、ベスモオ家末代までの光榮でございました……』

と騒ぎ立てると、ルーヴオアは苦虫を噛んで、

『いや、典獄夫人。かんがへ違ひをしてもらつては困る。私はベスモオ家の名譽のために食事をしに来るのではない。この美しいラ・ヘイエ夫人に敬意を表しに来るのだ』

と、遠慮會釋もなく毒のある口をきいて、典獄のあとを追つて肩を揺りながら食堂を出て行つた。

テレエズは何のことやら嘸み込めぬながら、じぶんの素姓が見露されたのではなかつたかとホツと安堵の息をついてゐると、小判事の夫人と典獄の妻は椅子から立つて来て右左から寄添ふやうにして、



「ラ・ヘイエ夫人、あなた、いまのルーヴオア侯のやうすにお氣がつかれましたか」  
 「ほんたうに、まア、あなたは何といふご運のいゝ方」  
 と、わけのわからぬことを言ひかける。

テレエズは、二人の顔を見くらべながら、

「氣がついたとは、一體、何を。……どうして、あたしが運がいゝのでせう」

あどけなく眼を見張つて問ひ返すと、典獄の妻は嫌らしくポツと頬を染め、  
 「だつて、さうぢやありませんか。ルーヴオア侯のやうな佛國第一等の大政治家に見染められるなん  
 て、あなたはほんたうに果報な方。この話が世間へきこえたら、あなたは佛蘭西中の女性に妬まれま  
 す。……あなたは田舎から出ておいでになつたばかりでござんないでせうが、ルーヴオア侯ときたら  
 これまでどのやうな美人に對しても流眇ひとつ使つたことがない、不粹なことゝいつたらほんたうに  
 木石同然。あの齡でまだ獨身だといふので、われこそ侯爵夫人にと、腕に覺えのある貴夫人や令嬢が  
 必死になつて持ちかけてもなんの手應へもない。總倒れになつて引退つたといふのに、そのルーヴオ  
 ア侯に想はれたといふのでは、運がいゝと申しあげるよりほかないぢやありませんか」  
 愛するマルセルの仇敵のルーヴオア侯に思ひつかれるなどは、かんがへただけでもゾツと身のうち  
 が竦む。聞くさへも耳の汚れと、テレエズは、厳しく眉を擧め、いつにない強い調子で、

「そんなご冗談は、もつそのくらゐにしておいていただきます。あたくしは少々氣分が悪くなりまし  
 たから、今日は、これでお暇……」

と椅子から立ちあがると、典獄の妻は泣聲をあげてその腕を引とめ、

「ラ・ヘイエ夫人。それではあたしが困ります。今あなたを歸したら、あたしがルーヴオア侯にどの  
 やうなお叱りを受けるか知れません。……助けると思つて、どうか、もうしばらく」

小判事の夫人も、あわてて傍から、

「ねえあなた、どうぞ、もうしばらく。その代り長くはお引とめしません。ほんの三十分だけ……」

テレエズは、慇懃に、

「勝手がましく失禮ですが、典獄とルーヴオア侯には、お二人からどうぞよろしく。……恐入りま  
 すが、玄關の下僕に歸るからと告げさせて頂きたうございます」

止める手を上手に振離して、靜かに次の客間へ出て行く。あとには飽氣にとられたやうな二つの顔。

#### 四、第二塔の窓の薄明 並に、闇の庭の待伏せ

典獄の邸の門を出ると、そこがバスターニユの大中庭。



巴里の市内にありながらこゝばかりは別世界。見上げると、中之濠を距て、八つの塔を連らねた城壁が黒々と高く閣空を衝き、見張塔の常夜燈は一點の空の星かと思はれるばかり。濠も中庭も閣の中に埋もれつくし、微かに聞えるのは城壁のうへを歩きまはる歩哨の靴音ばかり。

テレエズはマントオの襟を引合せながら急ぎ足に歩いて行くと、コフスキーは背後から唐突に聲を

かけ、

『もし、お嬢さま。ひよつとすると、今夜、このあたりで鐵假面の正體がわかるかも知れません』

テレエズは、息をひいて、

『それはまア、どういふわけ？』

『實は、あなたさまのお歸りを待つ間、いつかの機會のために監獄のなかの地理を見究めておかうと思ひ、さあらぬ體で兵舎から水飲場、典獄の邸の裏手のはうまで彷徨ひ歩いてをりますと、ソアツツン伯爵夫人が裏手の塀の際に身を潜めてゐられるのを見かけたのでございます』

『まア、伯爵夫人が』

コフスキーは、仔細らしく頷いて、

『伯爵夫人は鐵假面がオリビエ大尉であるやうに申され、堅くそれを信じておいでになるやうに伺ひましたが、實のところ、それは嘘なのでございます』

テレエズは、顔を引緊めて、

『それは聽捨てにならないこと。……それで、どうしてお前にそんなことがわかりました』

『私は樹の蔭に身を隠し、一體何をなさるつもりなのかと窺つてゐますと、伯爵夫人は、私がすぐそばにゐるとも知らず、幾度も切なげな溜息をついてから、いつも逃げ隠ればかりしてゐるが、いま典獄の家へ入つたやうすだから、今日こそは、こゝでルーヴオアを待伏せ、鐵假面の正體を白狀させてやらなければならぬ、と獨言を言つてをられました』

テレエズは、力まかせにコフスキーの腕を握り、

『コフスキーや、すると、鐵假面は……』

『はい、旦那さまかも知れぬのでございます』

鐵假面はオリビエ大尉だとばかり思ひこみ、愛するマルセルは、あの夜、淵の底に沈んでたぶんもうこの世にないものと、悲しみの雲に閉され晴れ間さへもなかつたテレエズの胸のなかに思ひがけなく希望の光が射しかけてきた。

もう斷念かけてゐたマルセルがまだこの世に生き永らへてゐるのかも知れぬと思ふと、テレエズは嬉しさで涙含み、今まで忌はしいとばかり思つてゐたペルト・オウジエールの塔も、そのひとがそこに囚はれてゐるかと思ふと急に懐かしく、改めてしみじみと振仰ぎながら、



「あそこに聳えてゐるのがベルト・オウジエールの塔。……鐵假面がもしマルセルだとすると、一番頂上の、微かに明が洩れてゐるところがマルセルのゐる監房。たぶん、今頃は、典獄が夕食の世話をしてゐるのだらうが、あたしがいまバスチーユの中庭に立つて監房の窓を見上げてゐるとは、よもやマルセルも知らないでせう。……どんなやうすでも食事をしてゐるのやら。翼があつたらあの窓のところまで飛んで行き、ひと目でいゝからマルセルの姿を見たいこと」

コフスキーは、氣を引立てるやうな調子で、

「しんじつ、鐵假面が旦那さまなら、そのお嘆きも、もう暫の間。……何といつても相手がソアツン夫人なら如何なルーヴオア侯でも出まかせを言つて誤魔化してしまふわけにはまゐりませぬ、伯爵夫人もあゝいふ人並み外れた烈しいお氣性の方ですから、一旦、口を切り出したら胡亂な答へで容赦するはずはありません、かならず本當のことを白状させるにちがひありません」

とこゝまで言つて急に中之濠の方へ振り返り、

「おゝ、第二塔のはうからこちらへ歩いて來るのは確かにルーヴオア侯と典獄。見咎められないうちに、さア、こちらへ……」

コフスキーはテレエズの手を引き足音を忍ばせながら濠について典獄の屋敷の裏手へまはり、花圃の縁に植ゑた丸く刈込んだ灌木の茂みのうしろに身を潜めた。テレエズが車寄の方を透して見ると、

馬車と車寄せの境石の間に蹲つてゐる黒い人影が見える。

コフスキーはテレエズの耳に口をあて、

「ほれほれ、あそこに。……あれが伯爵夫人です」

と言つてゐるとき、ルーヴオアと典獄はやうやく石橋を渡り終へ玄關から屋敷のなかへ入つたが、間もなくやゝ奥まつた食堂のあるあたりから凄まじいルーヴオアの怒號が聞えてきた。

典獄の妻や小判事夫人がテレエズを歸してしまつたのでそれを立腹して呶鳴りちらしてゐるのだとわかつたが、そのうちに荒々しく玄關の扉が押開けられ、グドグドと泣聲まじりに訛言を述べる典獄と典獄の妻を振切るやうにして出て來たルーヴオア。

よほど腹がすゑかねると見え、手に持つた杖で石畳を叩きつけながら屋敷の横手に置いてあつた小馬車のところまで大股に歩いて來ると、伯爵夫人は唐突に馬車の蔭から飛出して大手をひろげてルーヴオアの前に立塞つた。

ルーヴオアは、一二歩身を退らせながら、

「何だ、何者だ貴様は！」

と猛々しく誰何すると、夫人は、ホ、ホ、ホと痾高い聲で嘲けるやうに笑つて、

「何もそんなに驚くことはないでせう。……わたしです、ソアツソン伯爵夫人です。わたしがそんな



に怖ろしいのですか』

『お、これは伯爵夫人』

『やうやくわかりましたか。このひと月ほどの間、毎日お前の屋敷を訪ね、そのたびに居留守を喰はされてゐたソアツソン伯爵夫人です。……さア、かうしてこゝでお前を擱へた以上、下手に逃隠れはさせない。どうしぶとく構へたつて、わたしの問ひに答へさせてみせるから』

ルーヴオアは嘲りを籠めた含笑ひをして、

『ルイ王の前のご側室ともあらうあなたが、夜中、馬丁同然に車のをそばで私をお待ちになるなぞは』  
『何とでも言ふがい。馬丁であらうと乞食であらうと、必要があればどんなことでもします。わたしがこんなことをするのをとがめるなら、わたしが訪ねて行つたときなぜ素直に會ひません。お前が卑怯に逃隠れするから、それで、わたしもこんな真似をするのだ』

『ご承知の通り、當分は國事多端で、とてもあなたの無駄話などを伺つてゐる暇はありませんから』  
『わたしの話が無駄話とどうしてわかつた』

『無駄話でなければ、恐らく狂氣沙汰でせう。品位を重んずべきあなたが、こんなところで私を待伏せしてゐられることによつても充分に察しられるではありませんか』

『わたしを怒らせようと思つて、今日はその手に乗らぬのだよ。無駄口をきくのはやめて、わたし

の問ふことに返事をなさい』

ルーヴオアは、傲岸に身を反して、

『あなたのやうな常規に外れた方ならばいざ知らず、國王の代理人、一國の宰相ともあらう私が、車寄に突ツ立つて問答するなどといふ品位のないことは出来ません。お訊ねの件がおありになるといふのなら、また日を改めて官邸へお出掛けください』

ソアツソン伯爵夫人は、いよいよ突ン抜けた癩聲になつて、

『なに？ こんな車寄では話が出来ぬと。大風なことを言ふのはよしなさい。……ミツシエル、お前は十年前にはルイの走使ひをしてゐたのを忘れたのか。……お前はたかがしがなない麵麩焼きの息子だらう。……大宰相マザランの姪たるドランプ・マンチーニがかうして立つてゐるこの車寄で、お前如きが話が出来ぬとは利いた風も程があらう。……お前の祖父のル・テリエは街を麵麩の觸賣りをし、それで喰ふや喰はずのカツカツの暮を立てゝゐた。麵麩が賣れずにもなりかねるときは水を飲んで過したといふことも聞いてゐる。その倅のお前の父は僅かな手柄で宮廷の書記に取立てられ、繋がる縁でその子のお前がルイの馬車の露拂ひに引上げられた。ルイが夜さ夜さわたしの屋敷へ忍んで來ると、お前は馬車の番をして白々明けまで雪の吹きさらす玄關で立つてゐたことを忘れたか』

『ソアツソン伯爵夫人、それは、あなた、あんまり……』



「嘘ではなからう、黙つて聴いてゐなさい。……言ひだしたら言ひたいだけのことは言ふのだから」  
 「こんなところであなたに棚ざらへをされなくとも私の祖父が麵麴焼きであつたくらゐのことはよく存じてをります。如何にもルイ王の馬車の前驅をして雪のなかで凍えて立つてゐたことも忘れはいたしません、それがどうしたと仰しやるのです」

「どうしたもかうしたもあるものか。お前があまり恩知らずだから、少しむかしの話をしてたしなめてやるのだ」

「ほ、私がどうして恩知らずですか」

「もう忘れましたか。……足の先が凍えかけるとみえ、まるで鶴のやうに雪のなかに片足だけで突つ立ち、足の裏を内股にあてて温めてから、そつとその足をおろしてまた別な足を内股にあてる。あまり可哀さうだから少しばかり、心附けをやつたらお前は有難涙に暮れ、こんなことは毎度のことですから、どうぞお心にかけてられませんやうにと言つてあたりを見廻し、心附けを押しただいてそつと衣襲のなかへ入れ、雪の上に跪いてわたしの裳裾に接吻したのを忘れませんか。吹きさらしの玄關の雪の中に素足で立つてゐたことを思つたら、ここで立話したとて厭も辛いもあるまい。……なに？ 國王の代理人、一國の宰相だと？ なるほどさうかも知れぬが、十年前はルイの馬車の露拂ひのミツシエルではないか、この成上り者め」

激し切つて止度もなく罵りたてるので、さすがのルーヴオアも手に餘つた風で、

「如何にも私は馬車の露拂ひ。それはわかりましたからもうこのへんで止めていただきませう。……私も多忙な身で、あまり手間取つてもをられぬのですが、どうでも用があるといふならお伺ひ申しませう。くだくだしい話は伺つてゐる暇がありませんから、どうか要點だけを。……私にご用と仰しやるのはどんなことです」

伯爵夫人は、理も性もなく、藪から棒に、

「そんなことは訊かなくともわかつてゐるだらう。ロリツプ・トウリエを即刻放免してわたしの手へ返しなさい」

ルーヴオアは、空嘯いて、

「ほう、ロリツプ・トウリエ。……それは、一體、何者です」

「何者だと？ ロリツプの名をお前が知らぬはずはあるまい。お前の手下のナアロオがその者が正直なのをいゝことにして賞金をくれるの大尉に取立てると巧いことを言つて蕩込み、オビリエ大尉といふ名で先鋒隊へ入りこませ、先鋒隊の行動を諜報させたそのロリツプ・トウリエです。……用のあるときだけは使つておいて、用済みになると祕密が洩れるのを怖れて牢のなかへ押込めてしまつたらう」



『これはしたり、何のことやら、一向にどうも……』

『お恍けではない。……この節は宮廷の儀式にさへ招かれず、遠々しくなつてゐるから、このわたしが國家の祕密に疎くなつてゐるとでも思つたら大きな思ひ違ひ。宮廷にこそ出入りしないが、わたしの一門はみな樞機についてゐるのだから何もかもみなこの耳に入つてゐる。……知らないと思つてゐるか？ ミツシエル、お前が、生残つた先鋒隊の一人に鐵で造つた假面を被せ、誰にもその顔を見せぬやうにして、あれ、あのベルト・オウジエール塔の第二監房へ幽閉してあることをちやんと知つてゐるのだ』

ルーヴオアは、地面から飛びあがり、語氣も激しく、

『え、えッ、どうして、あなたはそれを？』

伯爵夫人は、氷のやうな冷笑を泛べ、

『どうしてこれほどの大祕密が洩れたのだと言ひたいのだらう？ どうだ、驚いたか』

ルーヴオアは、驚愕のためか怒りのためかブルブルと胴震ひをして、

『鐵假面……。いや、斷じてそのやうなものはありません』

『かうまでなつてもまだ白を切るつもりか。何といふ往生際の悪いこと。その姿を人に見せまいとして、三度の食事までわざわざ典獄に運ばせてゐることまでちやんと知つてゐるのだよ』

ルーヴオアは、さながら打つてかかるやうな口調で、

『いや、伯爵夫人、むかしから術策のあるあなたでしたが、よくそこまで探偵が届きましたナ、まづ天晴れだと申しあげておきませうか』

『如何にもそこまで探索が届いてゐるのだから、もう逃げ口上は言はせません。さア、即刻、ロリツプを放免してわたしに返しなさい』

ルーヴオアは、急に容を改め、

『伯爵夫人、すこし言葉を慎まれたがよからう。國家がその必要に於て獄に繋いである者を放免しろとは、そもそもどういふ權力を以つて？ たとへあなたの身分が何であらうと、それでは言ひ方が過ぎますゾ。お控へなさい』

伯爵夫人は、鼻の先で笑つて、

『おや、それが宰相の權威とやらいふものなのですか。ほかの者なら驚くだらうが、わたしならをかしくもない。權柄張つたことは相手を見ていふがい』

『これは、どうも方圖がない。……あなたがルイ王に不平を持つ連中の尻押しをし、國位顛覆を志す陰謀黨の軍資金として和蘭のアムステルダム銀行へ五百萬法といふ大金を預け入れたことまでちやんと調べが届いてゐるが、あなたがマザラン前宰相の姪であるといふことを思ひ、またルイ王の愛人



で、つたといふことを思ひ、本来ならば容赦なく逮捕すべきところを大目に見遁してあるのです。王族の端に繋がる身でありながら、國家を賊す陰謀黨と氣脈を通じてゐたことがルイ王の耳に入つたら、あなたとても只ではすみませんゾ」

伯爵夫人はルーヴオアの恫喝を空吹く風と聞き流し、

「おゝさうですか。只ではすまぬといふのはどういふこと？……はい、如何にもわたしは國賊。……あれほどの眞實なわたしの愛をド・ラ・ヴァリエールといふ端女に見代へられ、體よく宮廷から追ひ拂はれたわたしです。以前はルイ王のたつた一人の愛人、今は國王の仇敵。……さア、わたしの口からはつきりとさう言つた。ミシエル、お前は軍務宰相で警察司法の全權を握つてゐる男。こんな明白な國賊をそのまゝに見過しておくといふのは實にどうも職務に不忠實。即刻、その下司聲を張り、ばこんな辛い思ひをせずと毎日そばに引添つてゐられるから。その方がわたしの望み。……露拂ひの宰相さん、早くわたしを縛つてしまひなさい」

ルーヴオアは驚のやうな眼を据ゑて伯爵夫人の顔を眺めながら、

「残念ですが伯爵夫人、その望みを叶へてあげることが私には出来ません」

「おや、どうして？ やはり、わたしを縛るのが怖いのだネ」

「いや、それはあなたのお考へ違ひ。あなたの罪をまともに指摘したら縛るぐらゐではすまぬといふことです。手緩いことをお考へなさるな。あなたがどのやうな悪足掻きなさらうと、このルーヴオアがウンといふ筈はないのだから、無駄なことだとお諦め願ひませうか」

魔の塔のやうに黒々と闇空に聳り立つ第二塔のはうを指しながら、

「あそこにある男は鐵の假面をかぶつたまゝあの塔の中で生涯を送るのです。如何なる者といふこともその顔を見ることが出来ません。彼はもう佛國の、いやさ、この世の歴史の外に埋没した生ける屍です。このところとあのところは既に幽明をへだてゝゐる。人力ではあの者をこの世へ引戻すことは出来ません。これが、あなたに對する私の返答です」

伯爵夫人は、裂帛のやうな聲をあげて、

「それはあんまりだ。……お前、ミシエル、あれが一體どんな罪を犯したといふのだ。鐵の假面を被され、生きながら葬られるほどの罪をいつ仕出かした」

「あなたから怨みの言葉をいただくとは意外ですナ。あれとても他の者同様に殺してしまふべきところをあゝして命だけ助けてあるのはいはば私の慈悲。お禮をいはれ、ばとてあなたに怨まれる筋はありません」

「お前は理窟に合はぬことをいふ。なるほどあの者は先鋒隊へこそはいつたが、それといふのもお前



らに内通するため。それがどうして鐵假面を被せられるほどの罪になるのだ」

ルーヴオアは、意外なことを聞くものだといふ風に、ホウと奇妙な喉音をたて、から、笑止に堪へぬ面持で、

『いや、やうやくわかりました。あなたがさつきから放免しろの助けろのと言つてゐられるのは、あなたがまだ宮廷にゐるとき、あなたの愛人にしてゐられたあの色の生ツ白い執事の倅のことですか』  
『如何にもさう。わたしがさつきからロリツプ、ロリツプと言つてゐたのがお前にはわからなかつたのか』

ルーヴオアは笑ひ聲を納めて、

『あゝ、さうですか。それならば、もうジタバタされても無益。あの男ならとうのむかしに死んでしまひました』

伯爵夫人は、えッ、と身を反らせて、

『何、ロリツプは死んだと？……いや、そんな騙かしに乗るものか。死んだのはもう一人のはらの男だ。……ミシエル、いま言つたのは嘘でせう。どうか、嘘だといつておくれ』

身も世もない風に腕に取纏るのをルーヴオアは素氣なく振拂つて、

『嘘ならば嘘にしておかれるがいでせう。これ以上のことは國家の祕密ですからどうお訊ねなさら

うとお返事するわけにはゆきませせん。問答は無益。私は、これで失禮します』

と言ひ捨て馬車のはうへ歩き出す。

伯爵夫人は、蘆笛のやうな悲しげな聲をたてながら背後から追継り、なりもふりもなくルーヴオアの狭上衣の裾に取りついて、

『では、もう餘計なことはいひませせん。だから……だから、たつたひとつの願ひだけかなへておくれ。決して無理な願ひではない』

ルーヴオアは、煩さうに眉を擧めて舌打をし、

『伯爵夫人、相變らずあなたの我儘は手にあまります。願ひとおつしやるのは、一體、どんなことですか』

『どうか、わたしに鐵假面の姿を一目見せておくれ。顔を見ることが出来なくとも、それでわたしは満足するから』

ルーヴオアは、冷やかに首を振つて、

『どうお頼みになつてもそれは出来ぬ相談。私以外に何者にもあの者の姿を見ることは出来ませせん』  
『ミシエル、どうかむかしのことを思ひ出しておくれ。このわたしが蔭になり日向になり庇つてやつたこともあるではないか。すこしでも温い心があつたらそれを思ひ出して、覗窓の隙間からでもた



つたひと目鐵假面のやうすを見せておくれ。……お前がこの願ひをきいてくれたら先鋒隊の企はも  
 ちろん外國の政府と氣脈を通じてゐる陰謀黨の一人ひとりの名をみなお前に知らせるから』  
 ルーヴオアは相手にせず、

『陰謀黨に加盟した奴らの名前ですと。……そんなことはあなたに聞かなくとも加盟書に一人残らず  
 書附けてある。その加盟書のはいつた手箱はもう私の手にはいつてゐるのだからあなたの口からなぞ  
 聞くことはいりません。……身分柄もなくこんなところで取留めのないことをしてゐる暇があつたら、  
 あなたご自身の名が加盟書のなかに無いやうにとでもお祈りなさるがいい。さア、もうお放しなさい』  
 嘲けるやうな捨臺詞を残し、容赦もなく伯爵夫人を押し退けて馬車に飛び乗ると手綱を取上げてガラ  
 ガラと走らせ出す。

伯爵夫人は闇のなかに踞つて身も世もなく泣き沈んでゐたが涙ををさめて起ちあがり、  
 『嘘だ嘘だ。あれほど愛してやつたロリツプだもの。死んだといふなら一度ぐらゐは夢枕に立つてこ  
 の世の名残りを惜しみに来るはず。この長い間、ロリツプの夢を見ない夜とてないけれど、夢の中の  
 ロリツプはいつもむかしのやうに愛らしい顔をして微笑んでゐる。……嘘だ嘘だ、ロリツプは死には  
 しない。あの薄明が洩れる第二塔の頂上の部屋で明暮れわたしのことを思ひながら生きてゐるのだ。  
 ……もうかうなつたらルーヴオアになぞ頼まぬ。女の念力でかならず救出して見せるから』

と、塔の頂上のはうを振仰ぎ、

『待つておいで、ロリツプ。もう暫くだよ。わたしだけの力でかならず救出してあげるからね』  
 咽び泣くやうに呟くと、矢庭に身をひるがへし、城門のはうへ走去つてしまつた。

### 五、バスチーユの歴史

#### 並に、瓜二つの麻布袋

バスチーユ監獄は佛蘭西の政治史からその名を除くことの出来ないもので、ひと口に「死の牢獄」  
 と呼ばれ、ルイ十四世の治世だけでもこゝに投獄された者が二千二百二十八人。一六〇〇年から一七  
 八九年までの約二百年を通じたらその数は莫大なものである。

何しろ三百年も前に建てられた堡城のことだから、どこにもここにも苔が生え、なかんづく地下牢  
 は永劫陽の光が射しこむことがなく汚穢と闇に埋もれ、そのうへ満潮時になるとセーヌ河の水がヒタ  
 ヒタと差込んでくる。ひとたびこの地下牢へ投込まれたら病死するか發狂するか、いづれ悲惨な末路  
 を遂げなくてはならぬ。この世にまたとあらうとも思はれぬ生きながらの地獄。暴政と恐怖と嗟嘆の  
 象徴ともいふべき陰惨たぐひない大監獄である。

こゝに投獄された著名な人々を挙げると、第一にルイ十四世の王弟ルイ・フィリップの孫、オルレ